原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第35集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

石田大原墓域緊急調査報告書

2007

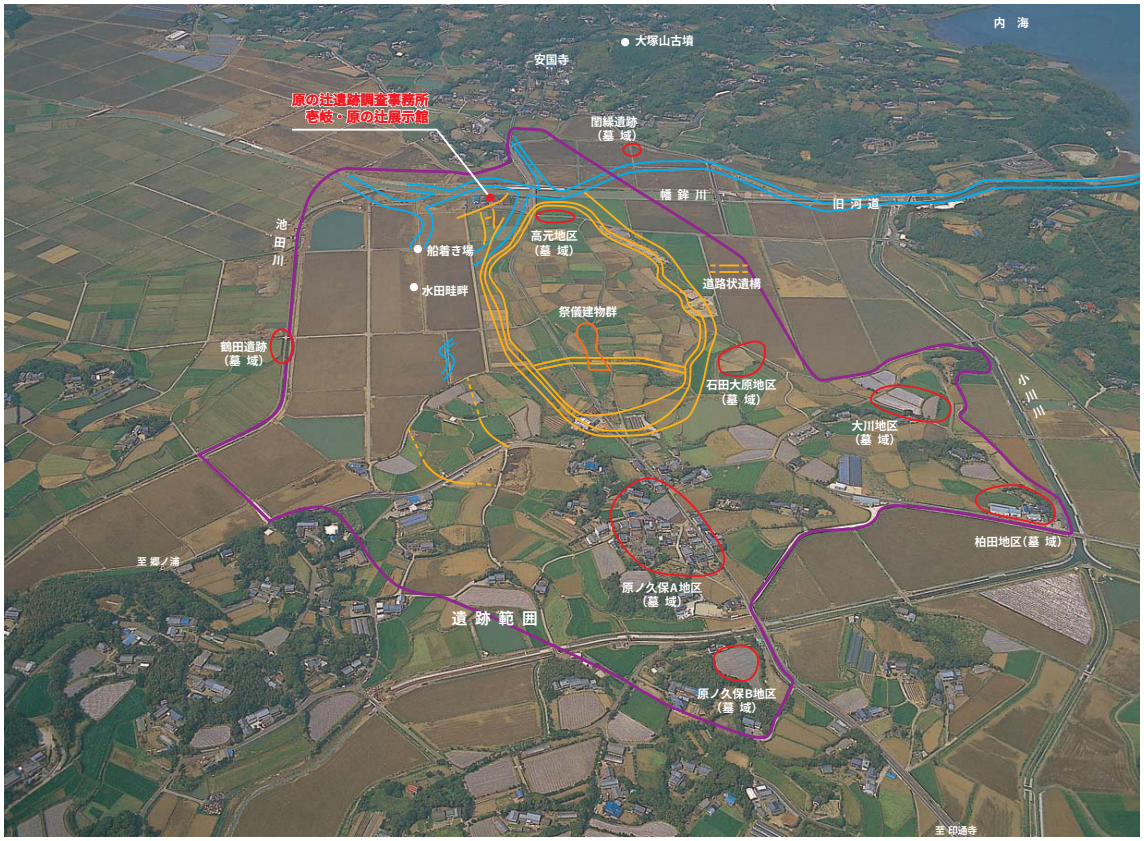
長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第35集

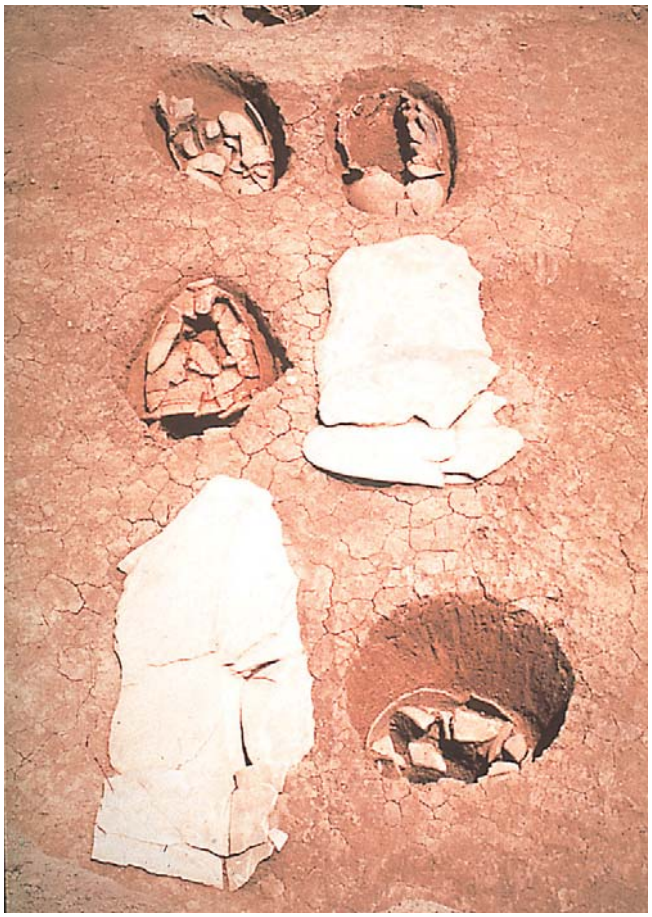
原（はる）の辻（つじ）遺跡

石田大原墓域緊急調査報告書

壱岐島位置図（原の辻遺跡）



原の辻遺跡航空写真（黄線；環濠，青線；旧河道）



石田大原墓域甕棺と石棺

K 2

K 3

K18

S14

K43　　K44　　K45

副葬品関係

「鯨」

「銛が刺さった鯨」

「船」

「捕鯨線刻」土器

K41

K 2

K43

石田大原墓域の甕棺

発刊にあたって

本書は，1974（昭和49）年に畑地の水田化工事中に甕棺破片が発見されたことを受け，緊急発掘調査を行った原の辻遺跡石田大原墓域の緊急発掘調査報告書です。

この石田大原墓域の緊急発掘調査は，長崎県教育委員会に昭和46年に文化財課が発足し，行政による発掘調査の体制が整備され，その後文化課と名称変更になって間もなくの昭和49年に実施されました。それまで京都大学や九州大学などが中心となった東亜考古学会という学術研究機関によって行われていた発掘調査が，行政による調査に変わっていくスタートでの調査でした。この頃は大型事業等が次々と計画されたことも重なり報告書まで手が回らない状況でしたが，この度公刊される運びとなりました。

石田大原墓域の時期は，原の辻遺跡が形成された頃にあたり，環濠集落に囲まれた集落域とその外に所在する墓域との関係を解明する重要な存在です。また，甕棺の中から副葬品として検出された中国製戦国式銅剣やトンボ玉は，原の辻遺跡と大陸との国際交流を実証する大変貴重な遺物です。

原の辻遺跡は，『魏志倭人伝』に登場する「一支国」の王都として，弥生時代の国の規模・構造を解明できる希有の事例ということで，平成12年11月24日に弥生時代の遺跡としては日本で三番目の国特別史跡に指定されました。現在，壱岐市によって文化庁の史跡等総合整備活用推進事業の採択を受け，祭儀場建物群及び竪穴住居や環濠等の復元整備が進められ，平成22年度までには第Ⅰ期の復元整備計画を終了する予定です。併せて平成21年度には遺跡北側の山稜に，県立埋蔵文化財センターと壱岐市立一支国博物館（仮称）が一体的な建物としてオープンされる予定で，地域振興の面からも期待されているところです。

本書は，今後予定されている石田大原墓地群の復元整備の基礎資料として使用される予定であり，学術研究と文化財保護の面で活用されることを念願いたします。

最後に，ここまで至るにあたり，地元の方々をはじめ，多くの関係者の御理解と御協力に心から感謝申し上げます。

平成19年３月26日

長崎県教育委員会教育長　**横　田　修　一　郎**

例　　言

1．本書は，昭和49年４月17日から同年８月12日にかけて，畑地を水田に転換するための地下げ工事に伴い，長崎県壱岐市石田町石田西字大原359，360番地で長崎県教育委員会文化課が実施した，緊急発掘調査報告書である。調査面積は750㎡である。

2．発掘調査は，長崎県教育委員会文化課，田川　肇（文化財保護主事，現退職），高野晋司（同，現長崎県教育委員会学芸文化課文化財指導監），藤田和裕（同，故人），副島和明（同，現長崎県教育委員会佐世保教育事務所文化財調査課長），安楽　勉（同，現長崎県教育委員会原の辻遺跡調査事務所長）の５名の調査員が行った。また，この土地の地権者である立石好男氏には調査に御協力頂き，郷土史家，山口麻太郎，郷ノ浦町郷土館長，横山　順，「島の科学」同人，林　徳衛，壱岐商業高校，野本政宏の各氏には調査御指導頂いた。

3．現地発掘調査時には，上記各調査員により平板測量・遺構実測・写真撮影等を行い。報告書作成時の遺物整理及び甕棺及び遺物実測は原の辻遺跡調査事務所で行い，甕棺・副葬品等の遺物の写真撮影は，溝上貴稔（原の辻遺跡調査事務所，文化財保護主事）が行った。

4．出土資料については，現在長崎県教育委員会原の辻遺跡調査事務所に保管している。

5．本書は，分担執筆を行った。Ⅰ－１，２を林　隆広（原の辻遺跡調査事務所，文化財保護主事）が行い，Ⅱ－１及びⅢ－３を高野が，Ⅲ－１を田川が，Ⅲ－２．①②及びⅢ－４．②を村川逸朗（原の辻遺跡調査事務所係長）が，Ⅲ－２．③及びⅢ－４．③を寺田正剛（原の辻遺跡調査事務所，文化財保護主事）が，Ⅲ－４．①を松見裕二（長崎県文化・スポーツ振興部文化施設整備室学芸員）が，Ⅳを安楽がそれぞれ行った。編集は村川による。

6．甕棺をＫ１，２，３，…，石棺をＳ１，２，３，…，とアルファベットで表記している。縮尺は，甕棺を１/40，石棺を１/30，甕棺の上甕・下甕を１/６にしている。副葬品は実大のものと，１/３のものがある。縮尺を表記しているもの以外は実大である。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地する環境……1
　1．地理的環境（林）……1
　2．歴史的環境（〃）……2

Ⅱ　調査の経緯（高野）……6

Ⅲ　調査……10
　1．調査概要（田川）……10
　2．遺構（村川）……13
　　①1～3号溝について（村川）……13
　　②甕棺（村川）……17
　　③石棺墓（寺田）……38
　3．副葬品（高野）……48
　4．小結……51
　　①石田大原墓域甕棺の時期的特徴について（松見）……51
　　②石田大原墓域における遺構の概観（村川）……54
　　③石田大原地区検出の石棺墓について（寺田）……59
　　④石田大原墓域その後の調査について（安楽）……62

Ⅳ　まとめ（安楽）……67

挿 図 目 次

第1図　壱岐島位置図……1
第2図　壱岐島内遺跡分布図……5
第3図　遺構配置図……11
第4図　1～3号溝土層図……14
第5図　1～3号溝内出土遺物……15
第6図　K1，3，4甕棺墓及び副葬品……16
第7図　K2甕棺墓及び副葬品……17
第8図　K5，6甕棺墓……19
第9図　K7，8甕棺墓及び副葬品……20
第10図　K9，10，12甕棺墓……21
第11図　K13，14，16甕棺墓……22
第12図　K18甕棺墓及び副葬品……23
第13図　K17，19，20，21甕棺墓……24
第14図　K23，24甕棺墓及び副葬品……25
第15図　K25，27，28，29甕棺墓……27
第16図　K31，32甕棺墓……28
第17図　K34，40，41甕棺墓及び副葬品……29
第18図　K42甕棺墓及び副葬品……30
第19図　K43甕棺墓及び副葬品……31
第20図　K32，44，45甕棺墓及び副葬品……32
第21図　K45，46甕棺墓……33
第22図　K47甕棺墓及び副葬品……34

第23図　K48, 49甕棺墓及び副葬品 ……35
第24図　K50甕棺墓及び副葬品……36
第25図　K52甕棺墓……37
第26図　Ｓ１箱式石棺墓……38
第27図　Ｓ２, ３, ５箱式石棺墓及び副葬品…39
第28図　Ｓ６, ７箱式石棺墓及び副葬品 ……40
第29図　Ｓ８, ９箱式石棺墓 ……41
第30図　S10, 11箱式石棺墓及び副葬品 ……42
第31図　S12, 13箱式石棺墓 ……43
第32図　S14, 15箱式石棺墓及び副葬品 ……44
第33図　S16箱式石棺墓及び副葬品……45
第34図　S17, 18箱式石棺墓 ……46
第35図　S19箱式石棺墓……47
第36図　石田大原墓域甕棺編年①……52
第37図　石田大原墓域甕棺編年②……53
第38図　石田大原墓域における甕棺数の変遷…54
第39図　原の辻遺跡墓地配置図……57
第40図　高元地区時期別住居跡等検出状況…58
第41図　西北九州地域における甕棺及び縄文時代石銛出土地……58
第42図　長崎県内出土石棺墓時期別法量比率グラフ……60
第43図　石田大原墓域Ｓ49, H13, 14, 16年度調査一覧図……63
第44図　石田大原墓域の青銅製品……66

表　目　次

第１表　壱岐・対馬面積比率表…… 1
第２表　壱岐島内遺跡・史跡一覧表…… 5
第３表　甕棺墓観察表①……30
第４表　甕棺墓観察表②……31
第５表　甕棺墓観察表③……37
第６表　副葬品観察表①……45
第７表　副葬品観察表②……47
第８表　副葬品観察表③……49
第９表　箱式石棺墓一覧表……50
第10表　大原地区における甕棺の時期区分一覧……51

図 版 目 次

図版１　調査地近景
図版２　調査状況
図版３　遺構検出状況（１号溝）
図版４　遺構検出状況（２号溝）
図版５　遺構検出状況（３号溝）
図版６　遺構検出状況（石棺墓）
図版７　Ｋ１～７甕棺墓検出状況
図版８　Ｋ８～16甕棺墓検出状況
図版９　K17～24甕棺墓検出状況
図版10　K24～34甕棺墓検出状況
図版11　K37～46甕棺墓検出状況
図版12　K47～52甕棺墓検出状況
図版13　Ｓ１～６箱式石棺墓検出状況
図版14　Ｓ７～９箱式石棺墓検出状況
図版15　S11～15箱式石棺墓検出状況
図版16　S16～19箱式石棺墓検出状況
図版17　Ｋ１～７甕棺墓
図版18　Ｋ８～17甕棺墓
図版19　K18～23甕棺墓
図版20　K24～42甕棺墓
図版21　K44～47甕棺墓
図版22　K48～52甕棺墓

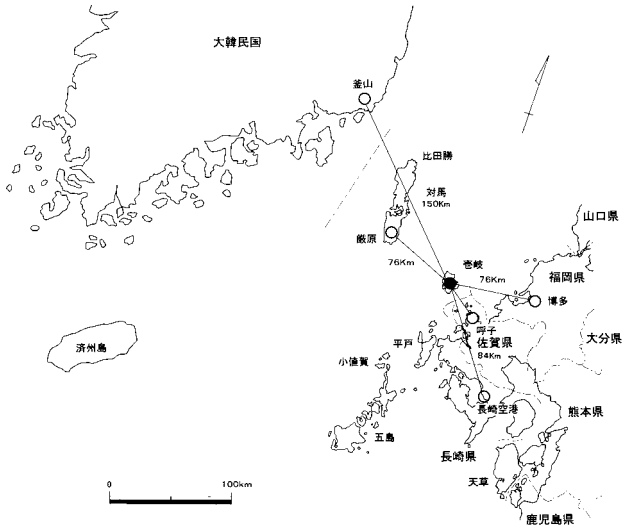
Ⅰ章　遺跡の立地する環境

１．地理的環境

「…又南に一海渡る千余里，名付けて瀚海と曰い，一大國に至る。官は卑狗といい，副官は卑奴母離と曰う。方三百里可，竹林や叢林を多くし，三千許の家が有る。差に田地を有し，田を耕しても猶食に不足し，同じように船に乗りて南北に市糴している…」

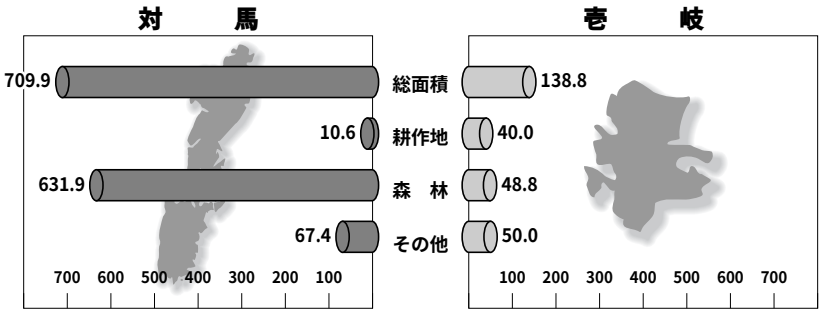
このように『魏志倭人伝』にて記されている壱岐は対馬同様，大陸と日本を結ぶ飛び石のように玄界灘に浮かぶ島である。南北約17㎞，東西約15㎞のやや南北に長い本島のほか多くの属島からなり，総面積約138.8㎢，人口は約３万２千人を数える。本土との交通手段は海上交通が主で，福岡県博多と佐賀県呼子へ船便が結ばれている。長崎県には直通の交通手段が空路しかないため，行政区分としては長崎県に属するものの文化的，経済的には福岡県とのつながりが深い。

島全体の地形は比較的平坦な溶岩台地で，最高峰の岳の辻岳でも標高213ｍにすぎない。これは『魏志倭人伝』で「…居る所絶島…土地は山険しく，深林多く，道路は禽鹿の径の如し…良田無く…」と記される対馬とは対照的である。『魏志倭人伝』では「…田を耕しても猶食に不足し…」と記されるが，島南東部の深江田原は県内第一の沖積平野で，今日では圃場整備も進み，有数の穀物地帯となっている。原の辻遺跡はこの中心部に位置し，南から伸びた舌状の台地（標高18ｍ）を中心に約100haの規模を誇る。また遺跡北部には島内最長の幡鉾川（約8.8㎞）が流れ，東へ約1.5㎞進むとやがて内海湾に注ぎ込む。この幡鉾川では圃場整備に伴う河岸整備が行われる近年まで高潮の遡上がみられ，また遺跡より約２㎞上流には「船橋」という地名が残っていることから，太古より水上交通として機能していたことが想像される。



第１図　壱岐島位置図

第１表　壱岐・対馬面積比率表



単位は㎢	その他	森　林	耕　地	総面積
対　馬	67.4	631.9	10.6	709.9
壱　岐	50	48.8	40	138.8

２．歴史的環境

壱岐における旧石器時代の遺物は名切遺跡，松崎遺跡，鶴田遺跡など島内の数ヵ所で確認されている。また原の辻遺跡からは昭和50年（1975）に台形石器・ナイフ形石器・細石器・細石核などが広範囲にわたり出土した。特に台形石器は姶良火山灰（AT）降灰直後の石器組成の重要な器種として「原の辻型台形石器」と呼称されることとなり，時期は剥片尖頭器との共伴からナイフ形石器文化中期後半におくことができる。また平成３年（1991）には遺跡丘陵西側の水田下180㎝の腐植土層からナウマン象の臼歯が出土している。ナウマン象と旧石器の共伴は確認されていないが，絶滅した動物化石とそれを狩猟した人類の遺物が同時に出土した例は全国でも長野県野尻湖遺跡などがあるにすぎず，原の辻遺跡はその例に追加される可能性もある。

壱岐における縄文時代の遺跡は鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡などで壱岐島西側に集中し，しかも海岸部に立地して干潮時に遺跡が現れる，いわゆる潮間帯遺跡が多いことが特徴としてあげられる。鎌崎遺跡は表面採集ではあるが良好な石銛やスクレーパーなど特徴ある石器が確認されており，特に全体を直角三角形状に整形して底辺にゆるい弧状の刃部を作り出すスクレーパーは「鎌崎型スクレーパー」と呼ばれ，九州北西沿岸部のみならず朝鮮半島南岸の東三洞貝塚でも出土している。

壱岐における初めての縄文遺跡発掘の事例となった名切遺跡では，昭和58年（1983）に長崎県教育委員会によって発掘調査が行われた。この遺跡からは中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が，上面からは人頭大の礫や石皿が出土している。形状の多くが円形筒型で，なかにはフラスコ状のものもある。湧水が見られる遺跡の立地状況から，貯蔵と灰汁抜きの兼用が考えられよう。礫や石皿は堅果類を竪穴に詰め，それに板材で蓋をした際の重しとしたのだろう。多様な石器も出土しており，漁撈・狩猟・植物採集活動を裏付ける多くの資料を得ることとなった。剥片石器の素材は黒曜石が多いが，壱岐産の黒曜石の他に佐賀県伊万里市腰岳産の良質な黒曜石もみられる。

また松崎遺跡では幾何学的細線刻文をもち，滑石粉末を混入した縄文前期の土器が確認されている。この種のものは朝鮮半島の櫛目文土器との関連が指摘されている。

このように確認された石器や貯蔵穴などから，これらの縄文時代の遺物が生活の糧を海にのみ求めるのではなく，多様な生活を営んでいたことがうかがえる。また海上交流の活発さも物語っており，対馬海峡を舞台にした九州北部と朝鮮半島を結ぶ海上交流が，後の稲作伝播の経路となったことを想起させる。

弥生時代の遺跡は，壱岐島内で約60ヵ所が周知されているが，なかでも遺跡の規模，出土品の質量から突出するのが原の辻遺跡である。この遺跡は大正時代に発見され，その後の河川改修工事や耕地整理に伴って大量の土器や中国製銅鏡などが，また東亜考古学会による学術調査では貨泉が出土するなどして学術的に重要な遺跡として認知されるようになった。今日までの調査で遺跡面積100ha，３重の環濠を備え，石積みの船着き場などを有する大規模な集落であることが判明している。また『魏志倭人伝』に記載された記事と国名が一致する唯一の遺跡と特定され，平成12年には国特別史跡に指定されている。

車出遺跡は幡鉾川の約５㎞西側の上流にある山間部の狭い平野に所在する。この遺跡からは方格規

矩鏡や貸泉，ト骨などの祭祀に関わる遺物が出土している。この遺跡の側には後に旧式内社の壱岐一の宮と称される天手長男神社が鉢形山山頂に営まれるため，この地が太古から祭祀的な空間として機能していたことが想像される。

カラカミ遺跡は標高70m超える丘陵部に位置する遺跡で，鉄製釣針や鯨骨製アワビオコシなど漁撈に関わる特徴的な遺物が出土することから，農耕文化を如実に示す原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。しかし勝本町教育委員会が実施した発掘調査（昭和57～60）では銅鏃やト骨などが出土し，また環濠を備えている点などから原の辻遺跡との関連も指摘されるようになった。朝鮮半島から舶載された瓦質土器や滑石混入土器も確認されており，海を糧に生活したこの集落の性格がうかがえる。

車出遺跡，カラカミ遺跡両者とも遺跡の存続期間は原の辻遺跡と趨勢を同じくしており興味深い。あるいはこのいずれかが原の辻遺跡とは役割を分かち合った，すなわち呪術・祭祀のためのみに営まれた集落で，「卑狗」が統べる原の辻遺跡に対して「卑奴母離」が治める祭祀的な空間であったかと思われるが，これは想像の域を出ない。

祭祀的な遺跡としては，天ヶ原セジョウ神遺跡をあげることができる。この遺跡は壱岐島の北端部に位置し，昭和36年（1961），護岸工事の際に３本の中広銅矛が出土している。おそらくは朝鮮半島や大陸との境界を意識したもので，外的の侵攻を防ぐ目的と，航海の安全を祈る目的で埋納されたものと思われる。

現在確認されている壱岐島内の古墳は256基にのぼるが，編年的に４世紀までを遡るものはない。現在周知されている古墳では大塚山古墳が最も古く，５世紀後半頃に比定されているが，大部分が６世紀から７世紀に築造されたものである。形状は円墳が主で，これら古墳のうち90余基が壱岐島のほぼ中央部に集中している。これは一地方の古墳群としては突出した規模と内容であり，しかも各古墳の間には同じ設計図が使用されたと思われるほどの類似性が見られることは大きな特徴といえる。

鬼の窟古墳は県下最大の円墳で，石室は玄室・中室・前室からなり17mと長い。この古墳の西に位置する笹塚古墳も石室は15mと長く，その構造や構築方法は鬼の窟古墳と同じであり，その強い類似性は特筆される。県下最大の前方後円墳である双六古墳もこの古墳群にある。全長91m。玄室・前室・羨道からなる石室は全長11mをはかり，自然地形を利用して版築した２段築成である。調査により石室内から金製品・金銅製品・青銅製品・鉄製品・ガラス玉や須恵器・土師器・唐二彩などの遺物が確認されている。

古代，律令体制下では壱岐は対馬同様に一国（下国）として扱われ，壱岐・石田の２郡が置かれた。従って国府が置かれ，やがて国分寺が設置されるのだが，壱岐では新たに建設する経済基盤がなかったのか，壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。その記録には「壱岐嶋直氏寺為島分寺。置僧五口」とあり，僧二十口が置かれた諸国の国分寺に比べて規模が小さく，そのため嶋分寺と呼ばれることになる。この嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が少量確認されている。平城宮では第Ⅰ期（和銅元年～養老五年）に使用され，同范資料では大和大安寺などで出土している。このことは壱岐直が朝廷から范木を下賜されたことを想像させる。壱岐直は宮城と同じ瓦で氏寺の甍を飾ったのだろうか。

古代の遺跡としては串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。ここではト占に使用された海亀の甲

羅や，大量の鮑殻が出土している。亀トは壱岐島内の弥生時代遺跡では確認されていないが，ト骨から引き継がれたト占の伝統が感じられる。また鮑殻はここが調の加工場であったことを想像させる。

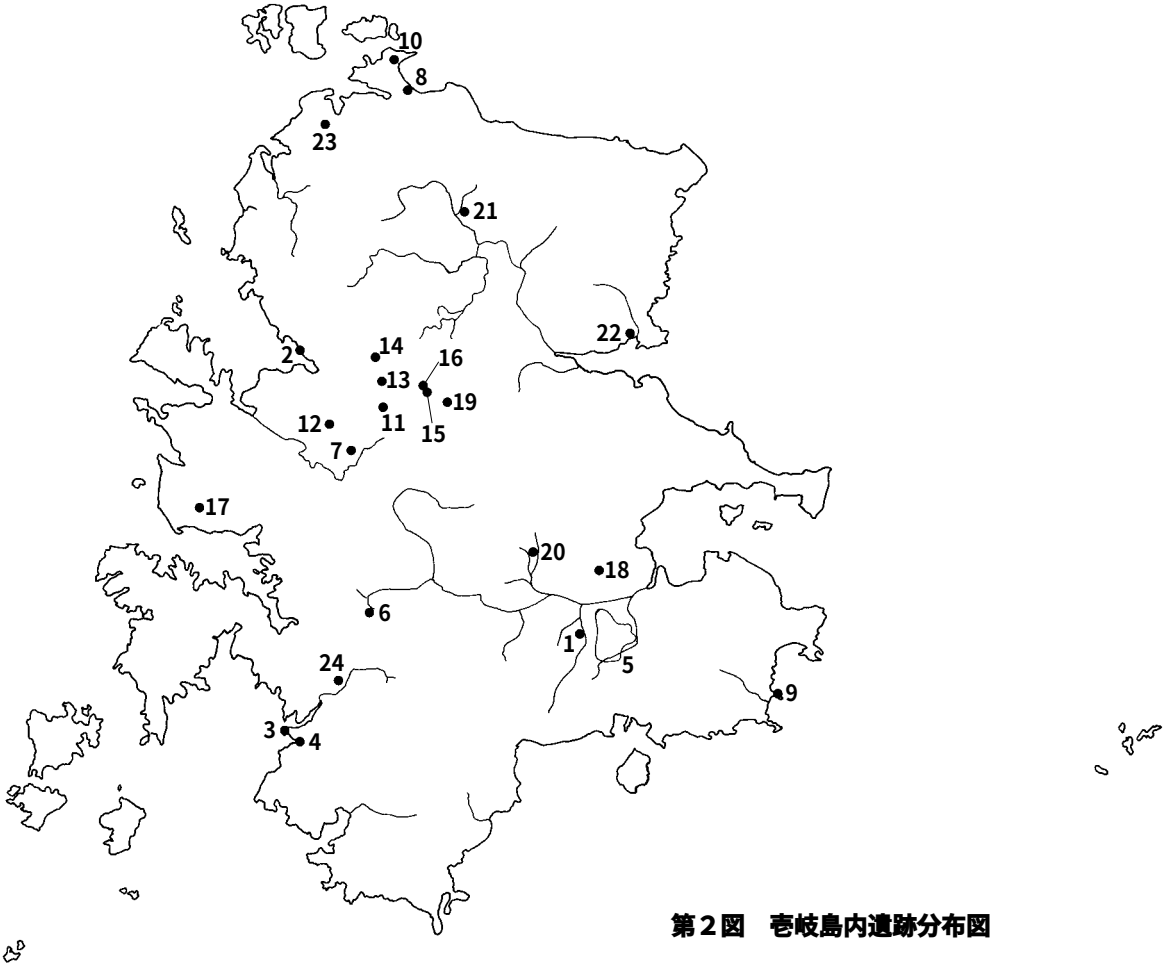
なぜ壱岐に多くの巨石古墳が存在するのか，その理由は古代の様子から想像することができる。まず壱岐にはト占の伝統が弥生時代から受け継がれており，やがて律令時代にはト部として朝廷における重要な職掌を担うに至ったことである。また壱岐は太古より海を生活の糧としているため海上交易に精通した海人族としての性格も併せ持っている。６世紀におこった朝廷と筑紫国磐井との戦いでは，朝鮮半島西岸，新羅付近の制海権を掌握していた磐井勢力を伊吉島造が駆逐したと『旧事記』の国造本紀に記録されている。朝鮮半島と朝廷との仲介をなしうる壱岐の勢力に対して朝廷から何らかの恩賞があったはずで，おそらくはそれを背景に古墳造営が行われたと思われる。

国境の島としての過酷な境遇は古代より壱岐に大きな禍根をもたらした。白村江の戦い（663）では多くの壱岐の民が徴発されて海の藻屑と消えたであろうし，寛仁三年（1019）の刀伊の入寇では壱岐島守藤原理忠をはじめ多くの住民が殺害または捕因された。

鎌倉時代には文永・弘安の役，すなわち蒙古襲来（元寇）を受ける。鎌倉武士団の活躍や神風などが叙情詩的に語られる反面，多くの住民が殺戮された。

室町時代の壱岐は「三島の倭寇」の１つとして知られる。三島とは壱岐・対馬・松浦（松浦は島ではない）のことで，倭寇とは14～16世紀にかけて朝鮮半島や中国大陸沿岸で活動した海賊的集団のことである。この背景には南北朝並立から始まる全国的な戦乱がある。もともと農業生産力が低い「三島」は戦乱の影響で生活物資を海外との交易（私貿易）に求めねばならなくなり，しばしば略奪行為を行なうようになるのである。鎌倉期を通じて壱岐対馬の守護職であった少貳氏に代わり，この頃壱岐は松浦党五氏(志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留)によって分割統治されたと『海東諸国紀』（1471）にある。この中に「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主(つかさど)る。戊子年（1468），図書（李朝が授給した銅印）を受け歳遣一，二船を約す。書に一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す」とあり，志佐氏が真弓氏を代官として活発な交易を展開していたことがうかがえ，この交易は三浦の乱（1510）まで続けられたとされる。原の辻遺跡の西約１㎞に位置する覩城は真弓氏の居城と思われ，発掘調査では14世紀頃の高麗象嵌青磁・粉青沙器などが出土している。その後文明四年（1472）に肥前上松浦の岸岳城主である波多氏が壱岐に侵攻する。その際，松浦党五氏の代官衆が覩城で籠城・降服したといわれるが，先述の通り波多氏による壱岐領有後も志佐氏による朝鮮貿易は活発に行われていることから，壱岐の主導権移行はより複雑であったことが想起される。その波多氏も内紛から日高・松浦氏に倒され，平戸を本拠とする松浦氏による壱岐統治が開始される。

松浦氏による壱岐統治が開始された頃，長く続いた戦国時代も終焉を迎える。九州征伐の際，豊臣秀吉のもとへ参陣した松浦氏は領地を安堵される。文禄元年（1592）からはじまる朝鮮出兵（文禄・慶長の役）では，松浦氏は第一軍の小西行長配下に編成され，三千の軍勢で渡海している。またその前年には秀吉の命を受けて勝本城を築城している。『壹岐名勝圖誌』に「夜の中に手々に石を持上がり築けり」とあるように，突貫工事で築城したものと思われる。現在は勝本浦に向かって開かれた外枡形虎口や，その搦手となる虎口などの遺構が残されている。



第２図　壱岐島内遺跡分布図

第２表　壱岐島内遺跡・史跡一覧表

番号	遺跡名	主な出土品 備考	主な報告
1	鶴田遺跡	旧石器（石核・フレーク・ナイフ型石器） 良質の漆黒黒曜石　磯道技法との類似が指摘される	長崎県教育委員会（1998）
2	松崎遺跡	縄文土器・縄文石器・貝輪 干潮帯遺跡　縄文早期や縄文時代平行期の韓半島新石器時代土器が出土する	勝本町教育委員会（2003）
3	鎌崎遺跡	縄文土器・弥生土器・石器 干潮帯遺跡　鎌崎型スクレーパーは韓半島南岸でも出土	横山順・田中良之（1979）
4	名切遺跡	縄文土器・石器 干潮帯遺跡　貯蔵穴30基を確認	長崎県教育委員会（1985）
5	原の辻遺跡	弥生土器・石器・青銅器・鉄器 一支国の中心集落　韓半島系・大陸系の遺物が大量に出土	長崎県教育委員会
6	車出遺跡	弥生土器・銅鏡片・ガラス玉 丹塗磨研土器が多く出土	長崎県・郷ノ浦町教育委員会（1998）
7	カラカミ遺跡	弥生土器・骨格器・卜骨 海人的性格をもつが環濠も備える	勝本町教育委員会（1985.1988）
8	天ケ原セジョウ神遺跡	銅矛 中広銅矛が３本出土	勝本町教育委員会（1985）
9	大久保遺跡	弥生土器・須恵器 石棺墓　壮年男性の人骨が出土	長崎県教育委員会（1988）
10	串山ミルメ浦遺跡	土師器・須恵器・金属器・亀卜・骨格器 砂丘上の生産遺跡で甑把手と鮑殻が出土していることから干し鮑（調か？）生産が中心と推測	勝本町教育委員会（1985.1989.1990）
11	双六古墳	鉄製品・金銅製品・ガラス玉・須恵器・土師器・唐三彩 前方後円墳（全長91㍍後円部直径43㍍高さ10.6㍍前方部幅36㍍高さ５㍍）横穴式石室（全長11㍍玄室・前室）	勝本町教育委員会（2001）
12	対馬塚古墳	― 前方後円墳（全長約65㍍後円部直径約36㍍前方部幅25㍍）横穴式石室（全長9.4㍍玄室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
13	笹塚古墳	須恵器・土師器・陶質土器・金銅製馬具 円墳（直径38㍍高さ10㍍方墳の可能性も）横穴式石室（14.8㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
14	掛木古墳	須恵器・土師器・銅鏡片・金環・鉄製品 円墳（直径約30㍍高さ７㍍）横穴式石室（全長13.6㍍玄室・中室・前室）	長崎県教育委員会（1992）
15	鬼の窟古墳	須恵器・陶質土器（新羅系） 円墳（直径45㍍高さ13㍍）横穴式石室（全長16.5㍍玄室・中室・前室）	芦辺町教育委員会（1990）
16	兵瀬古墳	― 円墳（直径34㍍高さ８㍍）横穴式石室（全長12㍍玄室・中室・前室）	松永泰彦（1982）
17	鬼屋窪古墳	須恵器 墳丘消失　石室も半壊しており開口方向など不明　袖石に船の線刻あり	副島康司・木村幾太郎（1981）
18	大塚山古墳	須恵器・鉄器 円墳（直径14㍍高さ２㍍）竪穴系横口石室（全長3.96㍍）	芦辺町教育委員会（1987）
19	壱岐嶋分寺跡	瓦・須恵器・土師器・輸入陶磁器 奈良平城宮6284Ａ型式と同范の軒丸・軒片瓦が出土	芦辺町教育委員会（1991～1994）
20	覩城跡	輸入陶磁器 松浦党五氏の佐志氏代官真弓氏の居城　朝鮮貿易の拠点	長崎県教育委員会（1997）
21	文永の役新城古戦場	― 文永の役における戦場　壱岐守護代平景隆らが戦死	―
22	弘安の役瀬戸浦古戦場	― 弘安の役における戦場　壱岐守護代少貳資時らが戦死	―
23	勝本城跡	― 朝鮮出兵時に豊臣秀吉の命で松浦鎮信が築城　兵站中継基地	―
24	亀丘城跡	― 波多宗無が築城した城郭　近世からの壱岐の中枢部	―

Ⅱ章　調査の経緯

1951（昭和26）年から1961（昭和36）年にいたる５度にわたる東亜考古学会による調査以降壱岐島での調査は休眠状態であった。島という特性からか大規模開発が行われる事もなく，また開発に伴う緊急発掘調査が実施されることも殆ど無かったといって過言ではない。その後1974(昭和49)年になって，原の辻遺跡を見直す一大転機が訪れた。今回報告することとなった緊急調査であり，その経過は以下のとおりである。

1974（昭和49）年４月９日，当時の石田町（現壱岐市石田町）教育委員会に原の辻遺跡周辺で甕棺破片と箱式石棺の石材が散乱しているとの通報がなされた。通報者はたまたま原の辻遺跡の見学に来島していた大阪府文化課と泉大津市社会教育課職員（氏名不詳）で，その情報は翌10日，町から県文化課に急報された。直ちに県文化課職員が現地に赴き散乱した石棺材と甕棺破片を確認し，併せて土地所有者からの聞き取りの結果，当該地は石田町石田西触字大原359，360番地にあたり，壱岐独特の饅頭状に盛り上がった畑を水田にするため表面を削平した際に遺構を一部破壊されたものと思われた。この通報によってこの場所が弥生時代の墓域であったことが初めて確認された訳である。

当該地では既に削平工事が終了して田植えの準備中であったが，遺構の重要性と地主である立石好男氏のご理解とご好意により緊急調査を実施する運びとなった。

発掘調査は当初４月18日から４月30日までの予定としたが，調査の進展と共に甕棺，箱式石棺が共に増え続けたことで６月30日まで延期された。しかしながらこの期間でも遺構の実測が間に合わず，改めて７月16日から８月12日まで補完調査を行った。延べ103日間という当時としてはかなり長期にわたる緊急調査であり，この調査だけで当時の文化課の１年間の緊急調査費400万円を全て使い切った事が想い出される。

調査組織は以下のとおりであった。

調査総括	文化課長	西原　英麿
	課長補佐	伊達木　旱
	管理係長	中村　　茂
	総務係長	村山　祐利
	主事	杉内　純一（平成13年逝去）
	同	大賀　享子
調査員	文化財保護主事	田川　　肇
	同	高野　晋司
	同	藤田　和裕（平成12年逝去）
	同	副島　和明
	同	安楽　　勉
調査協力	地権者	立石　好男

	福岡市教育委員会	力武　卓治
	上県町伊奈小学校	浦川　博子
石田町教育委員会教育長		後藤　正敏
	主事	西口　好弘
調査指導	郷土史家	山口麻太郎
	郷ノ浦町郷土館	横山　　順
	島の科学同人	林　　徳衛
	壱岐商業高校	野本　政宏
調査作業協力		今西金太郎
		今西　ツギ
		辻川チエ子
		田上清四朗
		中島　国夫
		村田　恒子
		山内　茂人

発掘調査では結果的に約750㎡の範囲に甕棺43基，箱式石棺18基の外，溝４条が確認された。副葬品としては，戦国式銅剣を始め，鉄製品，トンボ玉，ガラス小玉，勾玉などが数多く発見され，改めて大陸との関係が深い遺跡であることが認識された。また今回の調査区域は1953（昭和28）年に東亜考古学会によって調査された地点から直線で400m程南東側に離れていることもあって，遺跡の規模が相当広範囲にわたることが予察されるに至った。

なお，この調査の結果を受け，改めて原の辻遺跡の範囲について確認する必要が生じ，県の事業として翌1975（昭和50）年度から３年間補助事業による範囲確認調査を実施することになった。一応その結果概要を記しておく。

1975（昭和50）年度の調査（第１次確認調査）(註1)

原の辻遺跡は沖積地に舌状に突き出た微高台地とその周辺の低地部分からなるが，低地の水田部分は地権者の理解が得られなかったことから従来から遺跡として周知されていた台地部分について試掘壙を設定した。その結果弥生土器や陶質土器に加えＶ字溝と思われる遺構を確認している。

1976（昭和51）年度の調査（第２次確認調査）(註2)

台地の南東部大川区域を中心として実施。中国鏡を副葬した弥生後期の墓域を確認した。(註4)

1977（昭和52）年度の調査（第３次確認調査）(註3)

台地の南西部を対象として実施。新たな３ケ所の墓域やＶ字溝を確認した。また良好な状況で旧石器時代の石器を発見した。その後これらの石器について検討がなされ，特に台形石器についてはその特徴的な形態から原の辻型台形石器の呼称が賦されている。

1979（昭和54）年度の調査（第４次確認調査）

第３次調査で確認したＶ字溝の延長を見るために試掘壙を設定した結果，後世の掘削がなされた部分では遺構がかなり破壊されていることで明確な延長は確認出来なかった。

これらの一連の確認調査によって遺跡は旧石器時代から弥生時代全般にわたる大規模且つ広範囲な複合遺跡であることや，大陸との間に深い関係が認められることが判明した。このため，1980（昭和55）年頃から遺跡の国指定への必要性が叫ばれ始め，その理解を得るために県教育委員会は石田町や芦辺町の住民への説明会などを数回開催するなど指定のための準備に入ることとなった。しかし，遺跡が所在する石田・芦辺両町に専門職員がいなかったことや，県文化課においても1978（昭和52）年から1993（平成３）年までは，九州横断自動車道，諫早中核工業団地造成工事，県立百花台公園工事等の大規模開発に伴う緊急調査を優先した事情もあり，原の辻遺跡の史跡指定のための積極的な働きかけは中断することを余儀なくされた。

また，その後の原の辻遺跡を取り巻く情勢としては，時折発生する小規模の土砂崩れ等の災害関係1991（平成元）年や道路脇への電柱敷設，ため池掘削に伴う調査など小規模の緊急調査を実施することにとどまり(註４)，相変わらず史跡指定に関する動きは中座したままであった。

1991（平成３）年度から遺跡の北側を流れる幡鉾川流域総合整備事業がスタートした。幡鉾川は，寛保二年（1742）年に編纂された「続壱岐国風土記」には田川との記載がある。その後一本の川ながら上流が幡鉾川で，下流は河内川と呼ばれていたようである。

幡鉾川流域総合整備事業は，蛇行する川の直線化や，水深を深くするための浚渫工事及び川の流域400haについて大規模圃場整備を実施するものであったが，県教育委員会ではこの事業に先立ち，これまで未確認であった水田部分の低地部分について試掘調査を広範囲に実施した。この結果，この低地部分にも掘立柱跡等の各種遺構が相当残存することが判明し，これら調査の成果を受けて，1993(平成５）年から遺物・遺構が密集する台地隣接地について本調査を実施した。その結果，集落の中心区域と推定される台地部分は，その周りを二重から三重の環濠で囲まれていることが判明し，(註５) 環濠の中からは弥生時代前期から後期に至る夥しい数の遺物が出土した。中でも膨大な数の弥生土器と共に出土した大陸系土器の多さや，豊富な金属器，木器類，石器類，動物依存体など，これまで調査した他の弥生遺跡から出土する遺構，遺物と比較しても群を抜く規模内容である事実が判明し，この調査成果は故佐原真先生の尽力もあって，大々的に報道されることとなった。また地元研究団体から「原の辻遺跡の保存に関する陳情者」も提出されることとなり保存へと大きく踏み出した。その影響もあって，環濠を含む台地周辺区域は当初の圃場整備区域から非農用地に転換されることとなった。開発から保存へと一大転換が可能になったのは事業を推進する県並びに地元各関係者の理解が第一にあったことは明記されなければならない。

その後，文化庁の係官の視察も行われるなど保存のための条件が整う一方，国指定史跡のための要望がなされ始めるようになった。国史跡を視野に入れた1979（昭和54）年の動きから既に15年が経過していた。

この後，遺跡の重要性を喧伝する県や地元による様々な施策の実施や文化庁との協議を経て，1997（平成９）年９月には国史跡に指定され，更に2000（平成12）年11月には特別史跡へと昇格することとなった。

史跡指定直後，地元では学識者８名と県・市の担当者等による「原の辻遺跡保存整備委員会」を立ち上げ，以後年に２回のペースで会議を継続しながら整備内容を検討し，2005（平成17）年度からは第Ⅰ期の遺跡の保存整備が始まることとなった。復元建物や環壕などの遺構を整備し，2009（平成21）年度にはオープンの予定である。

また，発掘調査は現在遺跡面積約100haの約９％を調査済みであるが，当面継続の予定である。

最後に，1974年発掘調査後33年間報告書を公刊出来なかったことに対して，大いに反省すべき点があり忸怩たる思いであるが，反面調査員の一人としてやっと責任を果たせるという安堵感も感じている。故藤田和裕氏も泉下で喜んでくれていると思う。

註１　長崎県教育委員会「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書　第26集　1976
註２　長崎県教育委員会「原の辻遺跡（Ⅱ）」長崎県文化財調査報告書　第31集　1977
註３　長崎県教育委員会「原の辻遺跡（Ⅲ）」長崎県文化財調査報告書　第37集　1978
註４　芦辺町教育委員会「原の辻遺跡」芦辺町文化財調査報告書　第６集　1993
註５　長崎県教育委員会「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書　第124集　1995

故 藤田和裕氏（昭和49年石田大原墓域調査にて）

Ⅲ章　調　　査

1．調査概要

原の辻遺跡は，通称“深江田原”と呼ばれる県下第二位の平野に面する標高５～18ｍの低平な微高地上に広く位置しており，これまで数回の発掘調査が行われている(註1)。今回の調査地点は，この微高地の遺跡の中心部から東に浅い谷を隔てて約150ｍ程離れた標高５ｍ程の低平な微高地上である。昭和49年４月に畑地から水田への改田工事に際して石棺等が検出され石田町，土地所有者の協力を得て緊急調査を実施した。約750㎡調査し，箱式石棺18基，甕棺43基，溝４条を確認した。

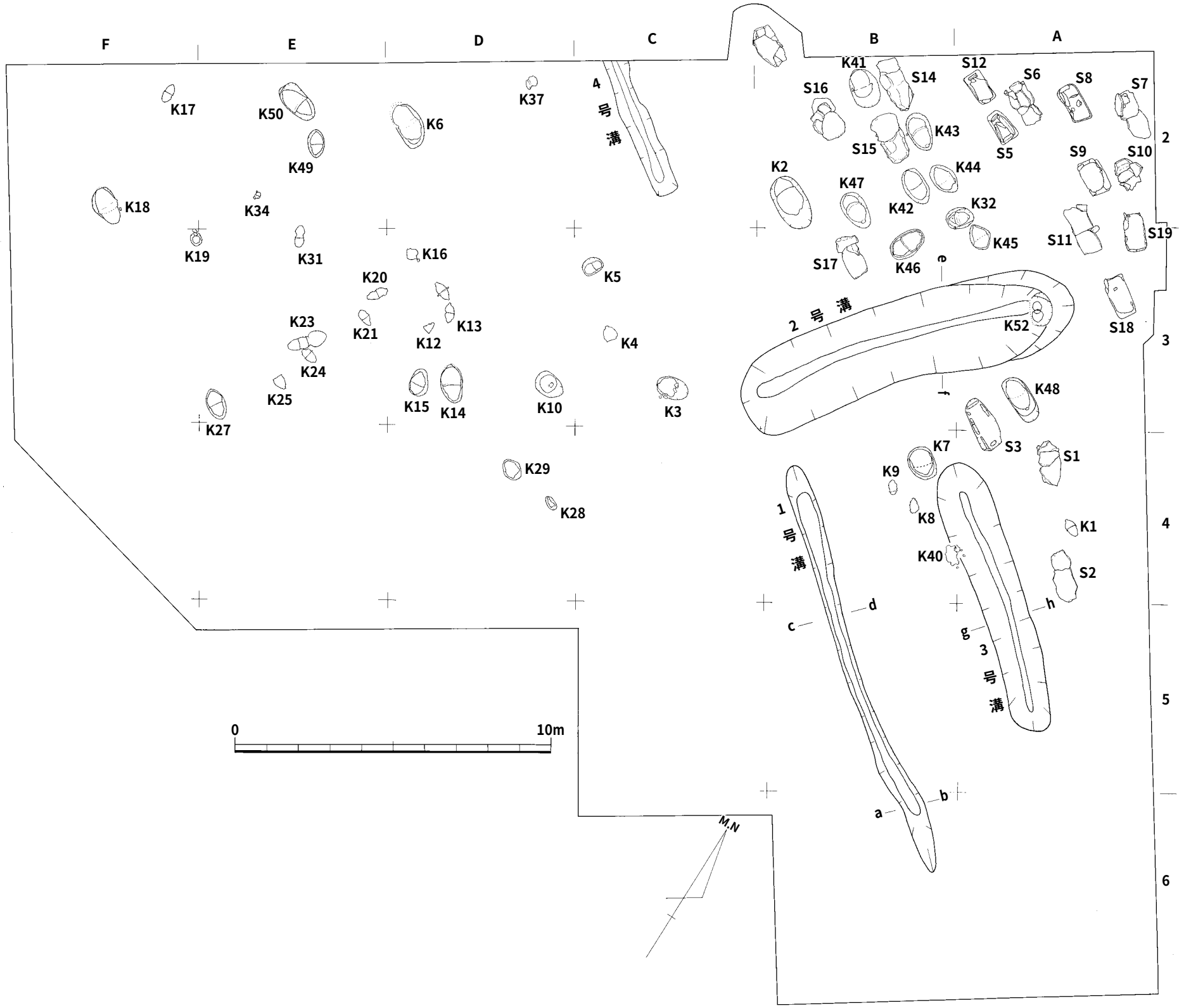
調査地の地質は，玄武岩が風化・堆積した地山の上に黄色の粘質土層がのり，さらにその上に黒色土層がある。改田工事により調査対象地の南側半分は地山まで削平されており，埋葬状態が確認できるのは調査を行った北側部分のみである。石棺や甕棺，他に溝などで埋葬域が形成されているが，それらの有機的な関係などは調査時の知見では不明としか言えない。

石棺は，カンラン石石英玄武岩を使用し箱式石棺を構築している。中には棺材を抜かれたものもある。石棺の所属時期については，副葬品が玉類しかないため詳細な時期は不明であるが，周囲の状況等勘案して甕棺の時期差はさほどないものと考えられる。北側の斜面に分布している。

甕棺は，合口甕棺が主で単甕は少例である。合口の周りは黄色粘土でかためられているものもある。Ａ・Ｂ－２区に径40～50㎝，長さ70㎝位の比較的大型の城ノ越期のものが集中する。20°～30°の傾きをもちコンタに沿って東西に埋置されている（黄色粘土層中）。Ｄ・Ｅ・Ｆ－２・３区は黒色土層中に小児棺が多いようである。高坏等の破片等もこの地区に多い。これらの殆どは耕作あるいはブルドーザーにより上半分を除去されている。特筆すべきは，Ｅ－３区から三重甕棺（K23）の出土をみたことである(註2)。壺１，甕２の組み合わせで，真中の甕は底部を打ち抜き他１つの甕の口縁と咬み合わせている。更にすぐ東に隣接する合口甕棺（K24）の下甕の底部を切って埋置するという点など極めて希少な例である。副葬品として鉄刀子１，ヤリガンナ１がある。副葬品は大陸文化との接触点，北九州文化圏に属しながらも極めて少ない。特に金属器にあっては中国製戦国式銅剣（K18），鉄製刀子１，ヤリガンナ１（K23）を数えるのみである。それに比して玉類は割合多く，勾玉・管玉・ガラス玉・ガラス小玉・臼玉等計56個を数える。また，玉類の中では碧玉製の管玉が78％の43個を数える。

註１　ａ松本友雄「一支国考古通信」（一）考古学雑誌 17-2. 1927
ｂ松本友雄「壱岐に於ける弥生式土器遺蹟の分布と原の辻包含地」考古学 1-5,6 1930
ｃ鴇田忠正「長崎県壱岐郡田河村原の辻遺蹟の研究」日本文化史所収 1944
ｄ水野清一・岡崎　敬「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」対馬の自然と文化 1954

註２　三重棺の報告では，高島忠平「福岡県穂波町椋本・森原出土の甕棺」九州考古学 第15号 1962　また，後に三重甕棺（K23）の壺に，「船」，「鯨」の線刻が施されていることがわかった。


F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
K17
K50
K6
K37
4 号 溝
K49
K18
K34
K19
K31
K16
K5
K20
K23
K21
K13
K12
K4
K24
K25
K15
K14
K10
K3
K27
K29
K28
K41
S14
S12
S6
S8
S7
S16
K43
S15
S5
S9
S10
K2
K44
K47
K42
K32
K45
S11
S19
S17
K46
2 号 溝
K52
S18
K48
K7
S3
S1
K9
K8
K1
K40
S2
1 号 溝
d
c
h
g
3 号 溝
b
a
0
10m
M.N

第３図　遺構配置図

２．遺　　構

調査対象地の東西36m，南北30mに及ぶ範囲内に，石棺18基，甕棺43基，溝４条が検出された。前項の調査概要で触れたように，南側は既に削平され元の様子はわからず，東側も米軍によって戦後まもなく撮影された航空写真を見ると東側に張り出した微高地があり，それが削られたようである。それらの状況からして本来の墓域は，少なくとも現在のものより北東側へ拡がっていたものと推測される。現時点で確認できる範囲でみれば，Ａ－２区を中心とした石棺のグループがあり，その西側には甕棺の列埋葬の中に石棺が混じるグループがある。この中で一番古い甕棺がK43，41であり，それぞれ石棺と並列している。この南に２号溝が列埋葬を横断するように掘削され，さらにその南に，２号溝に直交するように１号と２号溝が掘削されている。１号溝の東にはＫ７を中心としてＫ８，９があり，３号溝の東にはＫ１，48とＳ１，２がある。さらに，その西側のＣ～Ｆ－２～４区の範囲内に列をなさずに，それぞれ個々に埋置された甕棺と小児甕棺のグループがある。

時期的に古い方からいくと①K43，41を中心とする甕棺と石棺の列埋葬のグループ，次に②３号溝東のＫ１，48とＳ１，２，そして③Ｋ７を中心とするＫ８，９，Ａ－２区を中心とした石棺のグループとなり，最後に④Ｃ～Ｆ－２～４区に所在する甕棺と小児甕棺のグループとなる事が推察される。

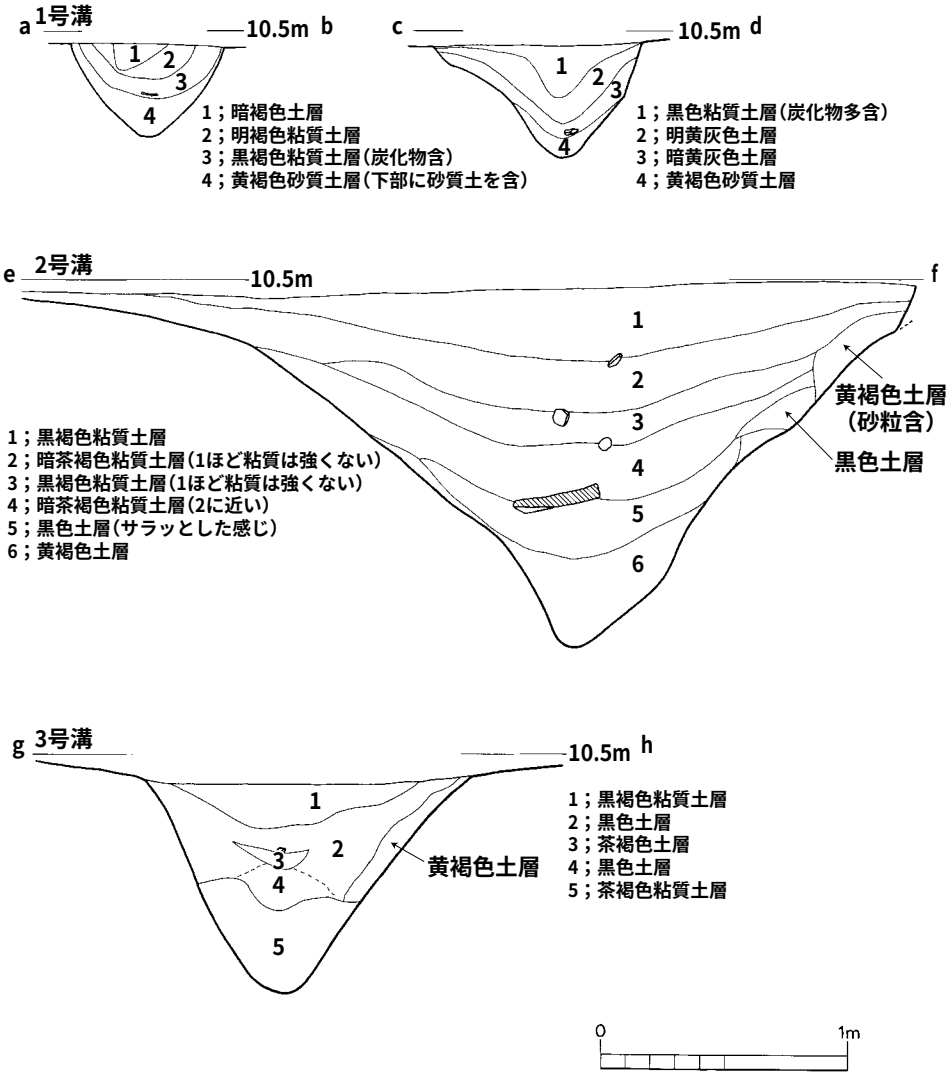
①１～３号溝について

１～３号溝についての法量及び断面形をみると，１号溝は長さ13m60㎝，幅80㎝である。遺構検出面からの深さは45㎝で断面はＶ字状をなす。北側の土層断面をみると，傾斜の途中で傾斜角度が変わっているので再掘削の可能性もある。２号溝は長さ10m90㎝，幅２m80㎝，同深さ１m43㎝を測り１～３号溝の中で一番深い。土層断面をみると，断面の５と６層の境のところで掘削の傾斜角度が変化しているので，この２号も再掘削の可能性がある。３号溝は長さ８m90㎝，幅１m70㎝，同深さ84㎝である。Ｖ字状をなす。

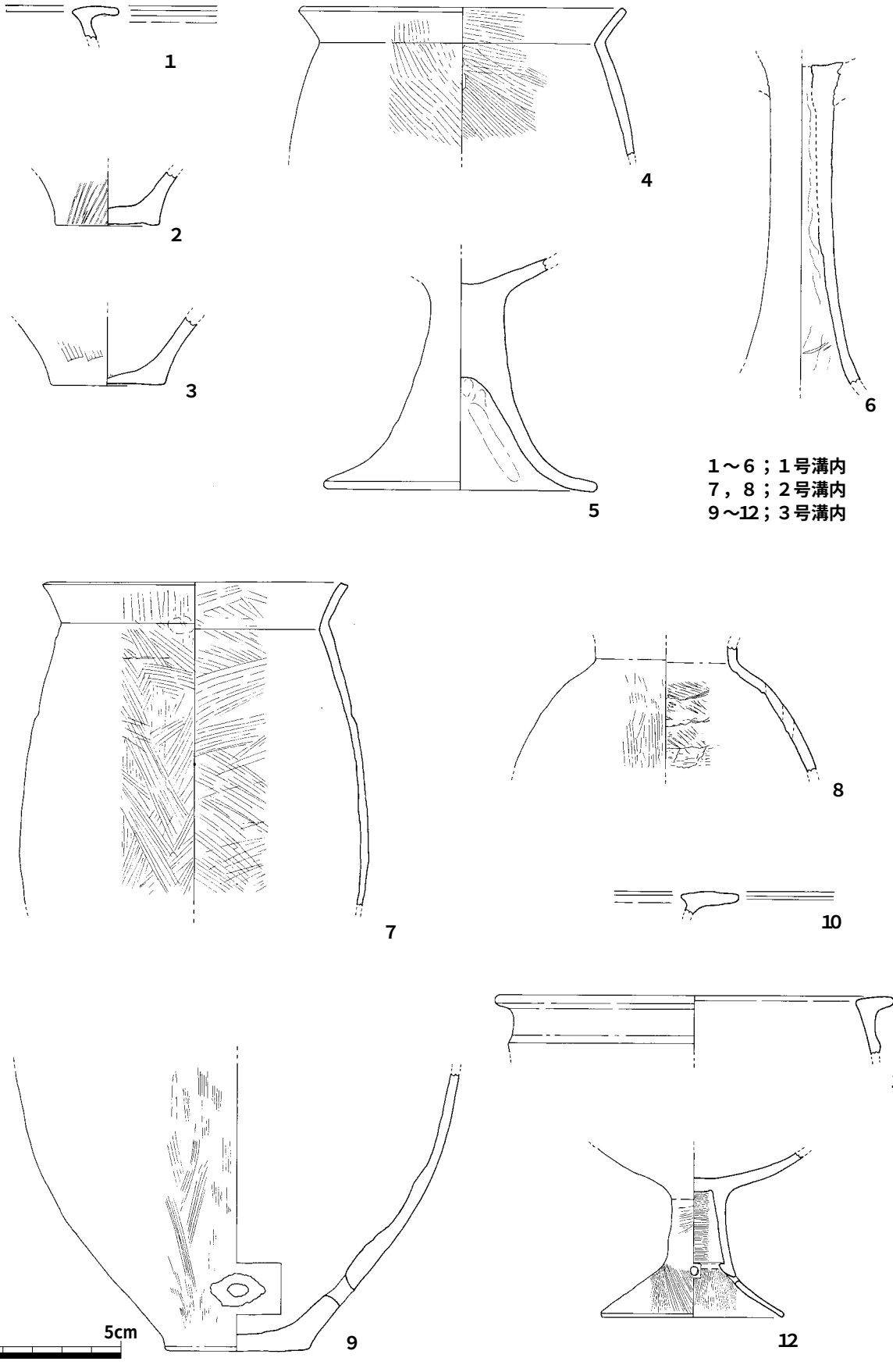
この１～３号溝は，甕棺と石棺の墓地域の中に掘削されながら，２号溝は列埋葬を横断するように作られているし，それと直交する１，３号溝についても列埋葬の軸とは微妙にその方向が違っている。これらの状況から，時期差等が考えられるところであるが，それぞれの溝からの出土遺物をみると，１号溝からは，弥生時代中期中葉の土器の底部（２，３）や，高杯脚部（６）等があり，同後期中葉頃の甕（４）と高杯（５）も出土している。溝内からの出土遺物で見れば，一番新しい遺物である甕の時期である弥生時代後期中葉頃に掘削された時に，古い遺物が混じったとも解釈される。しかし，上述するように溝の傾斜角度が変化しているので，最初弥生時代中期中葉頃に掘削されたものが，後期中葉頃に再掘削され，そのときに弥生時代中期中葉頃ものと後期中葉頃のものが混在した可能性が考えられる。２号溝も出土土器（７）は，弥生時代後期中葉頃のものであるが，再掘削の可能性もある。８の資料は，土器の内面に粘土紐の輪積み痕を顕著に残すもので韓半島の土器をまねてこちらで作られたもののようである。３号溝出土土器（11）は，弥生時代中期中葉のもので，弥生時代終末期の高杯（12）も出土している。ただ３号溝のふちに覆い被さっているK40は，底部の特徴から弥生時代中期初頭のものと考えられ，３号溝の掘削時期はそれ以前だと推察される。２号溝であるが，列埋

葬の南端K45と２号溝との間に１ｍ程の空白地帯があるのが注目される。この空白地帯には甕棺等の抜き取り跡等も確認されていないので，元々ここは空白地帯として空いていたと考えられる。このことから，K45の時期である前期末以降に２号溝が掘削されたものであろう。この２号溝南に埋置されるK48は，列埋葬の軸線に揃えている。その南にはＫ１があり，その後中期前葉のＫ７が埋置されるが，このＫ７の軸線と１号溝のそれが揃っているのは注目されるし，北側の２号溝に直交するように埋置している。東には既にK48や，Ｋ１が所在していたものであろう。

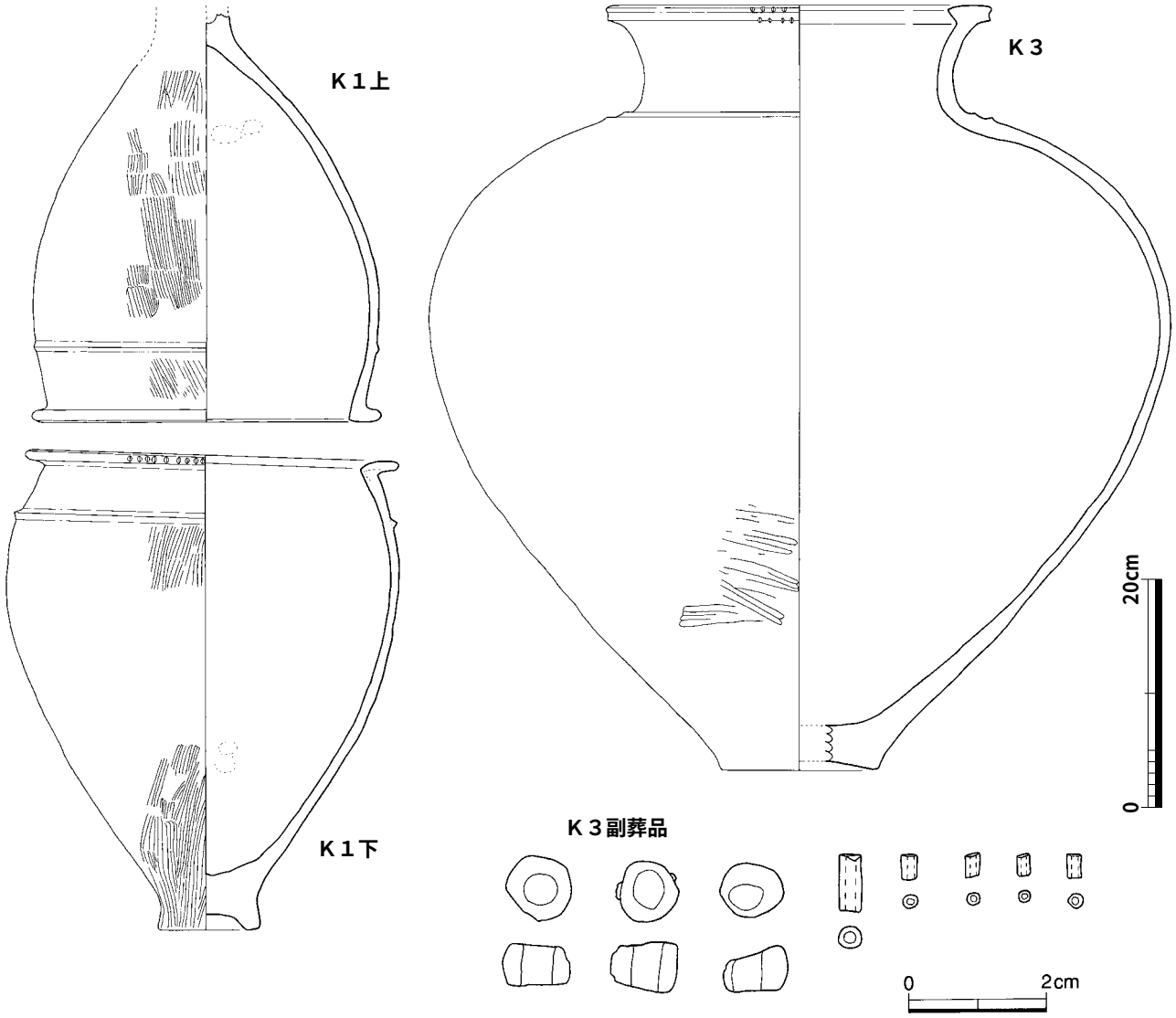
上述したようなことから，甕棺の埋置または溝の掘削された時期は近接しており，遺構の軸線からみても，関連する墓地のエリアを形づくっていたものであろう。



第４図　１～３号溝土層図（１/30）



第5図　1～3号溝内出土遺物（1/2）



第６図　Ｋ１，３，４甕棺墓及び副葬品

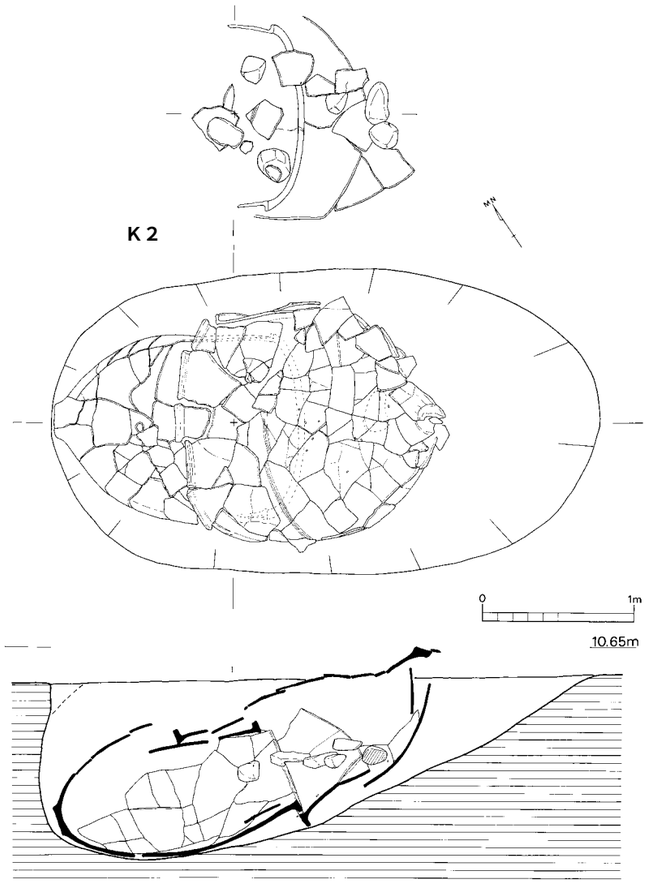
②甕　棺

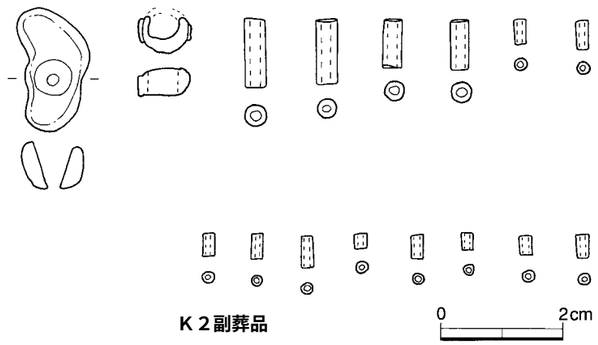
甕棺は，当初，全部で52基を検出したが，残存状況等から欠番として扱ったものがあり，ここでは確かなもの43基をとりあげた。甕棺の分布状況をみて，まず気付くことはＢ－２区を中心として大原Ⅰｂ期（弥生時代前期後葉）のＳ14～K43，44，45と連なる列埋葬であろう。N61°Wの方位である。それぞれにＳ14，15石棺が併設されるが，左右交互に構築される。それから南東方向へ大原１ｃ期（弥生時代終末）のＫ42，44，45が列埋葬される。ほぼ同じ時期に１ｍ程西側にK47や，列の方向に直交するようなK46がある。次の時期大原Ⅱａ期（弥生時代中期初頭）のＫ２は，さらにＫ47の北西にある。それから南東方向へ２号溝を超えて，大原１ｃ期のK48，Ｋ１が埋置されていく。なお，上述したこのエリアの甕棺は，金海式から城ノ越式期のものになる。その西には成人甕棺のＫ７と小児棺Ｋ８がある。Ｋ９は後出する後期前葉の資料である。

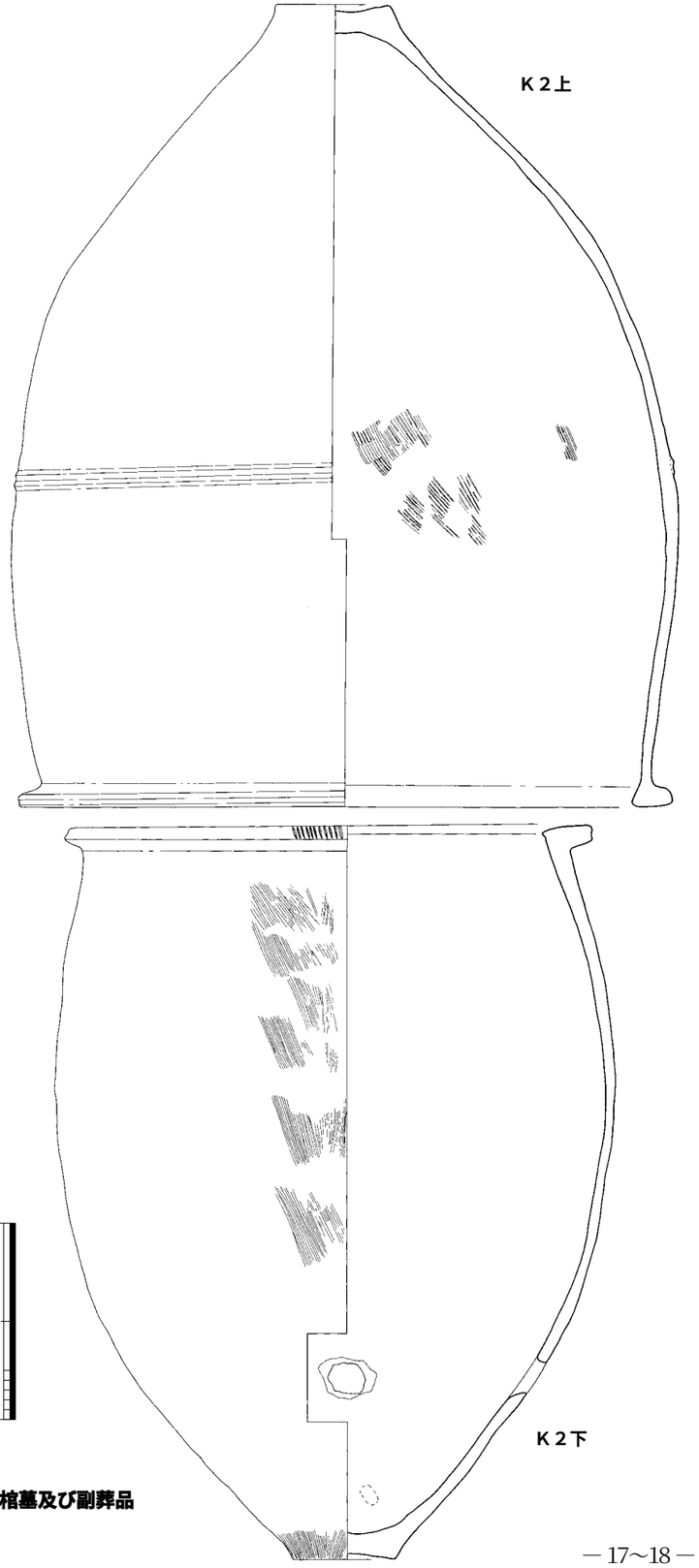
ところで，大原Ⅱｂ期（弥生時代中期前葉）のＫ７に注目すると，北を２号溝，東をK48，Ｓ１，Ｋ１，Ｓ２で，西を１号溝でそれぞれ区画ないしは囲っているような状況を呈するが，このエリアには同時期のものは，埋置されていない。そして，西側のＣ～Ｆ－２～４区に所在する甕棺と小児甕棺のエリアでは特に区画するような溝は見あたらないが，大原Ⅱａ期のＫ３が２号溝の西南1.8m程の所に埋置され，Ｋ４，５と大原Ⅱｂ期にかけて続く。そして，Ｋ７と同時期のK50や，K27が埋置されるようになる。頭位の軸も時に揃えると言うことも見られない。ただこのエリアの中に埋置されている中期前葉のK18や，中期中葉～末にかけてのK23には，戦国式の銅剣が副葬されていたり，鉄製品の副葬品や捕鯨線刻が施されていたりと内容は充実している。また，甕棺の大きさについてもその埋置状況から特別な意味を考えたＫ７よりもK50の方が大きいし，力関係については逆にＣ～Ｆ－２～４区内のK18等の方が強かったのではないかとも考えられるが，はっきりしない。

墓坑の平面形態については，全体的に楕円形を呈する。ただ，大きさについては上面が削平されており，もう少し大きかったことも考えられる。甕棺が埋置される角度については，列埋葬をなす金海式から城ノ越式期のものが30°を超すものが多かったりと傾斜が強い。中期の中葉頃になると水平になる。K52のように弥生時代終末期になると，39°と角度をもつようにもなる。また，K10のような単甕が存在したりと単純に北部九州と同一視できないようなところも看取される。

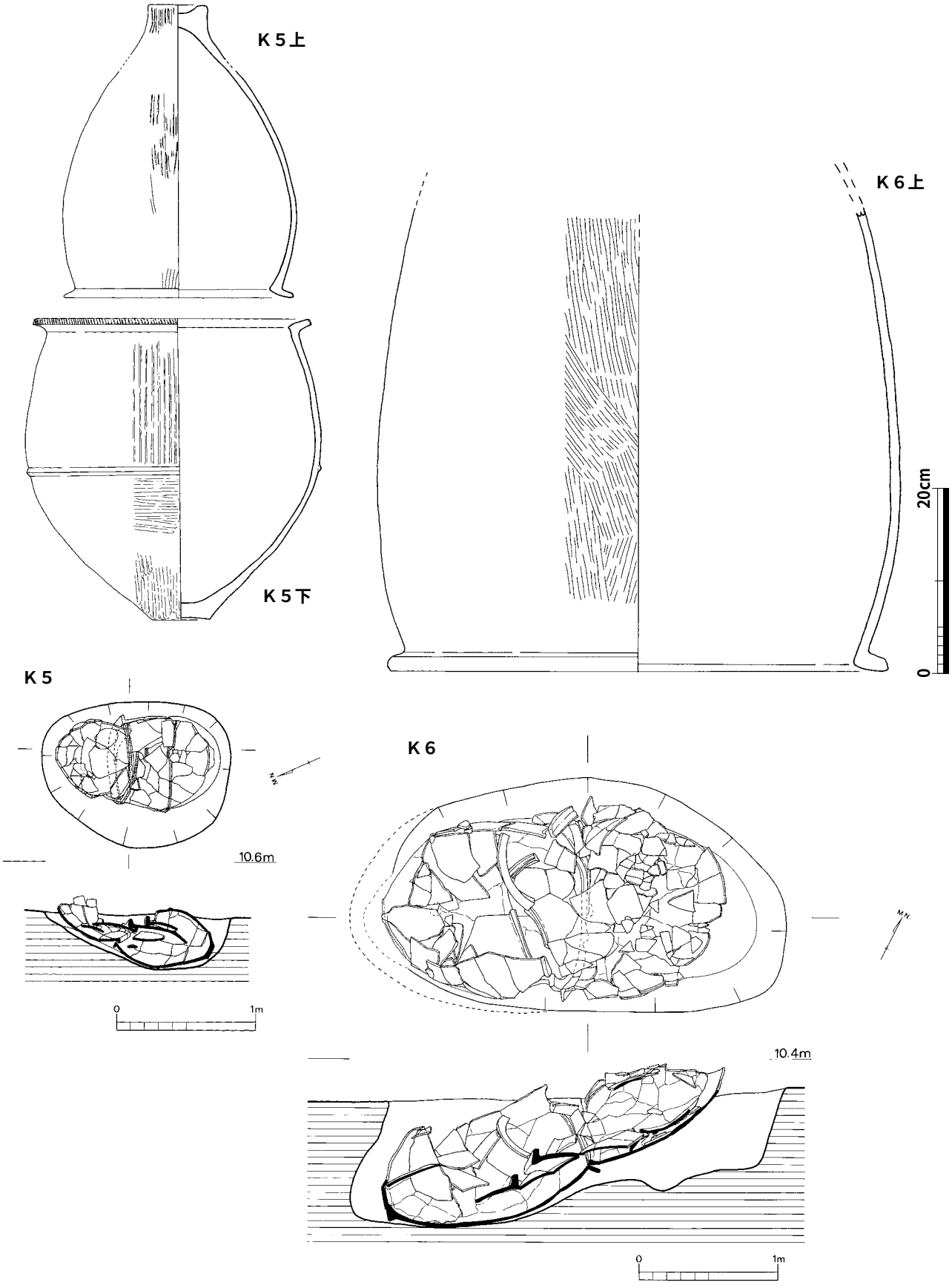
大きさが70㎝を超えるような大型棺は，Ｋ２，６，14，50等があり，Ｋ２が一番大きい。K23は三重棺であるが，大型棺を使用せずに中型壺ないしは小型甕を利用して代用しようとの意識があったものであろうか。この下甕には「船」や「鯨」があり，その「鯨」には，銛が刺さった状況も描いた「捕鯨線刻」土器である。



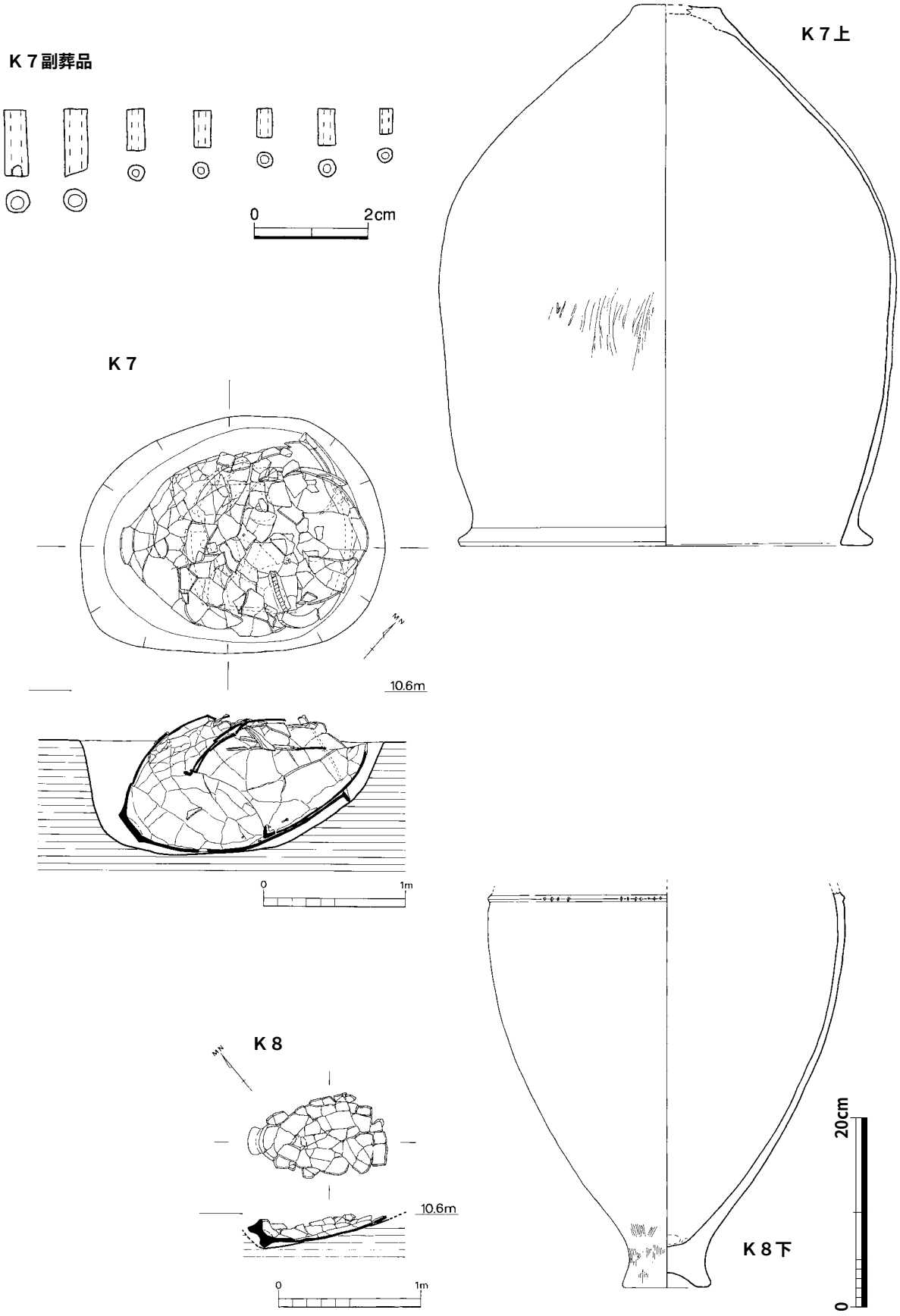




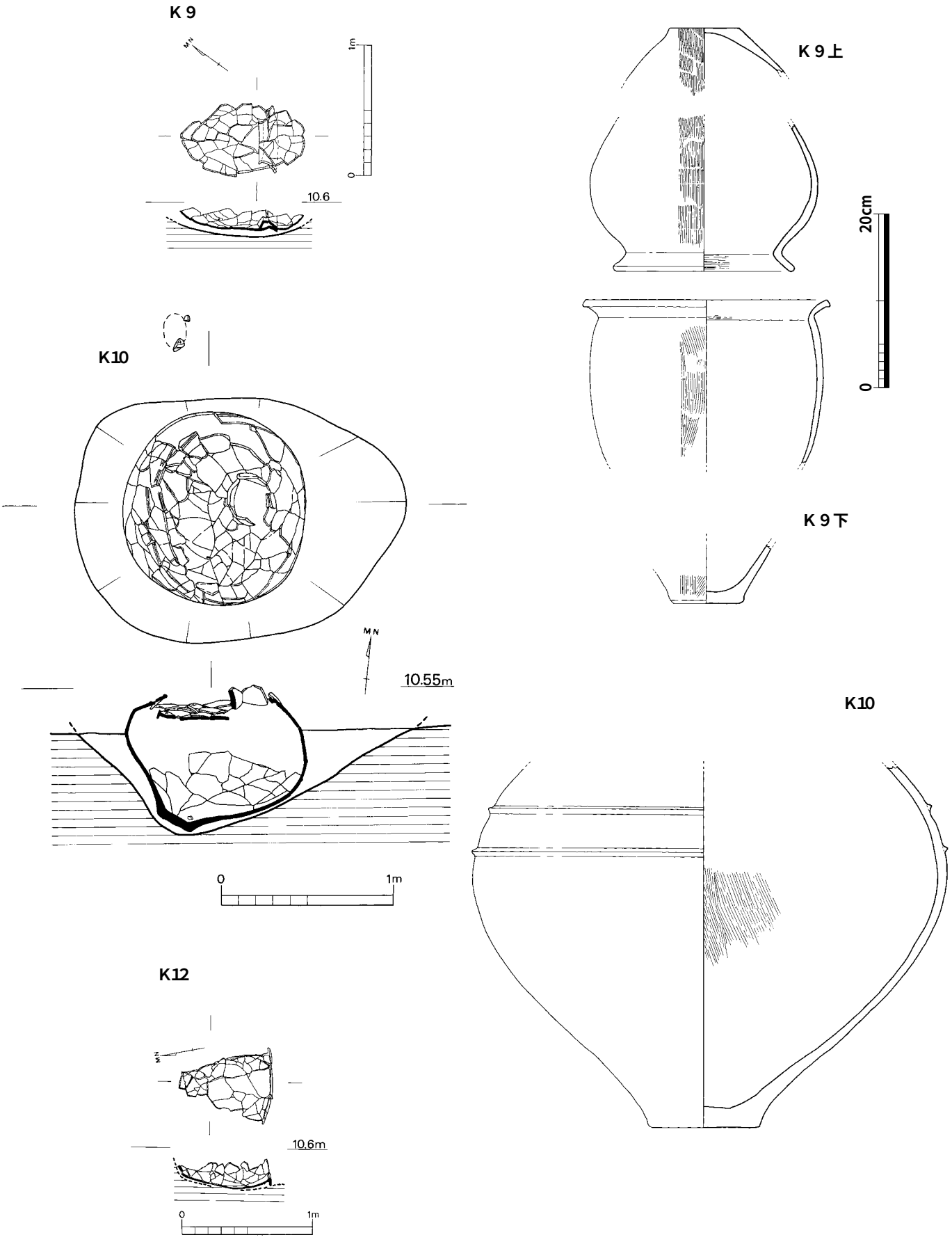
第７図　Ｋ２甕棺墓及び副葬品



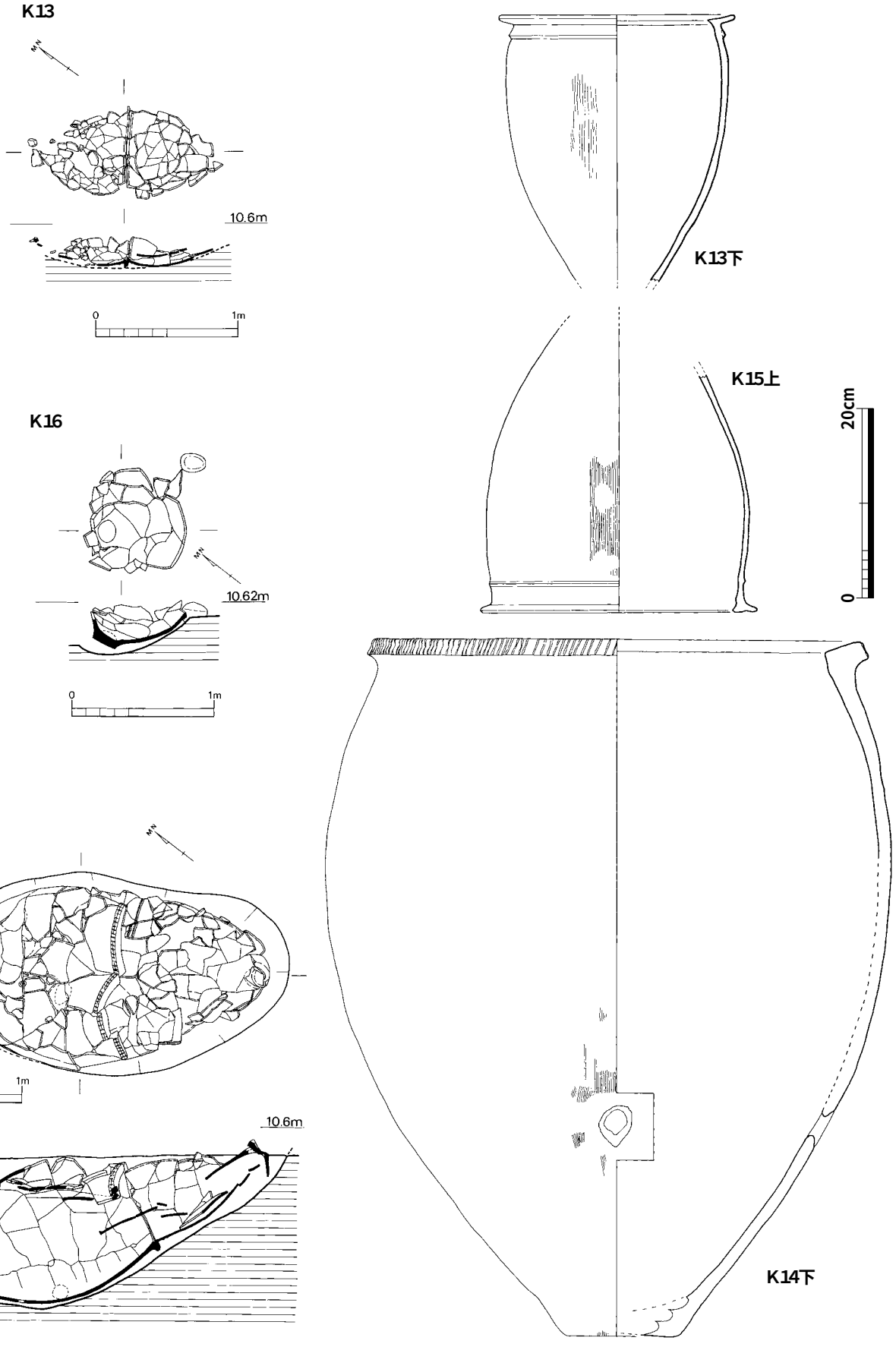
第8図　K5,6甕棺墓



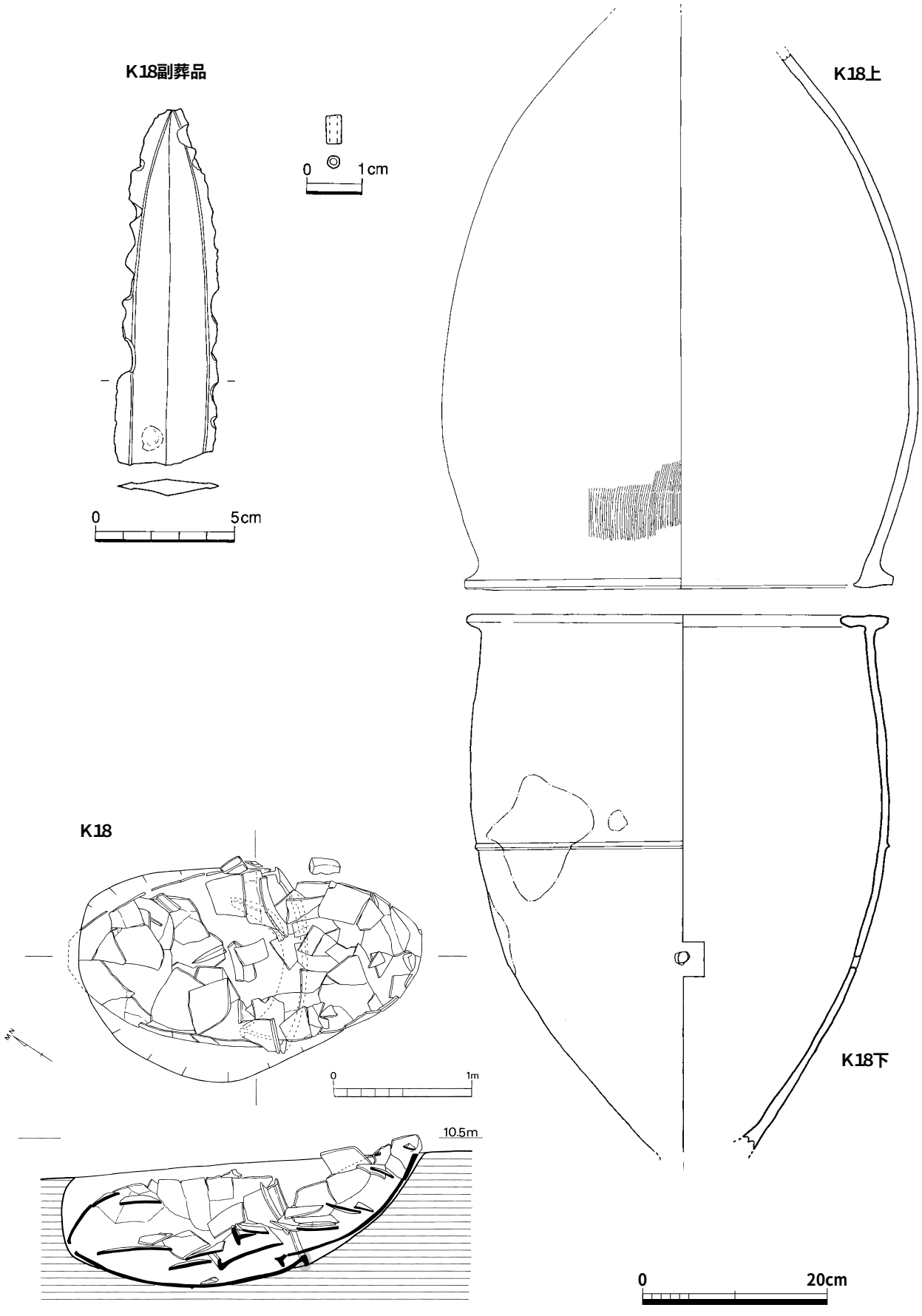
第９図　Ｋ７，８甕棺墓及び副葬品



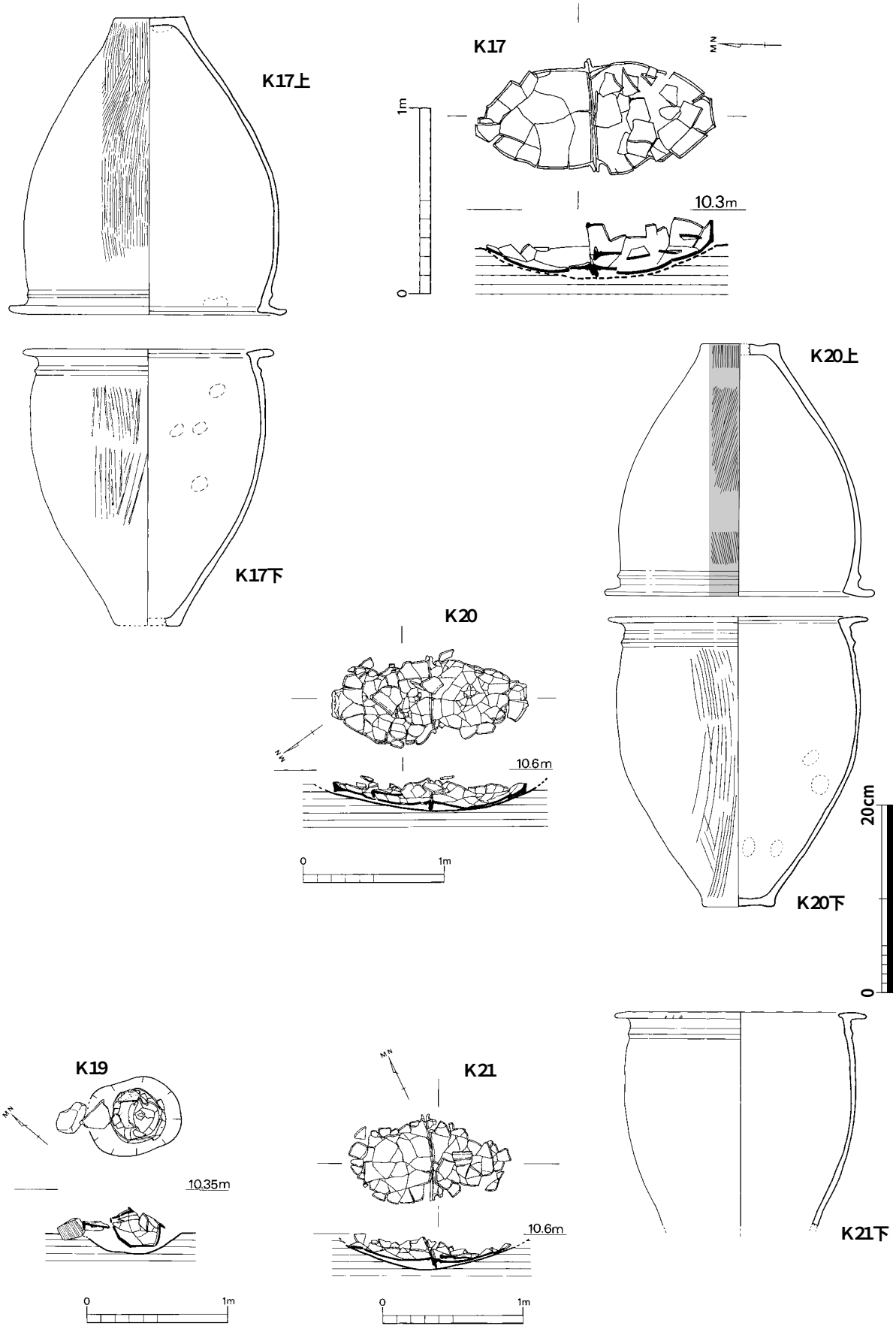
第10図　K９,10,12甕棺墓



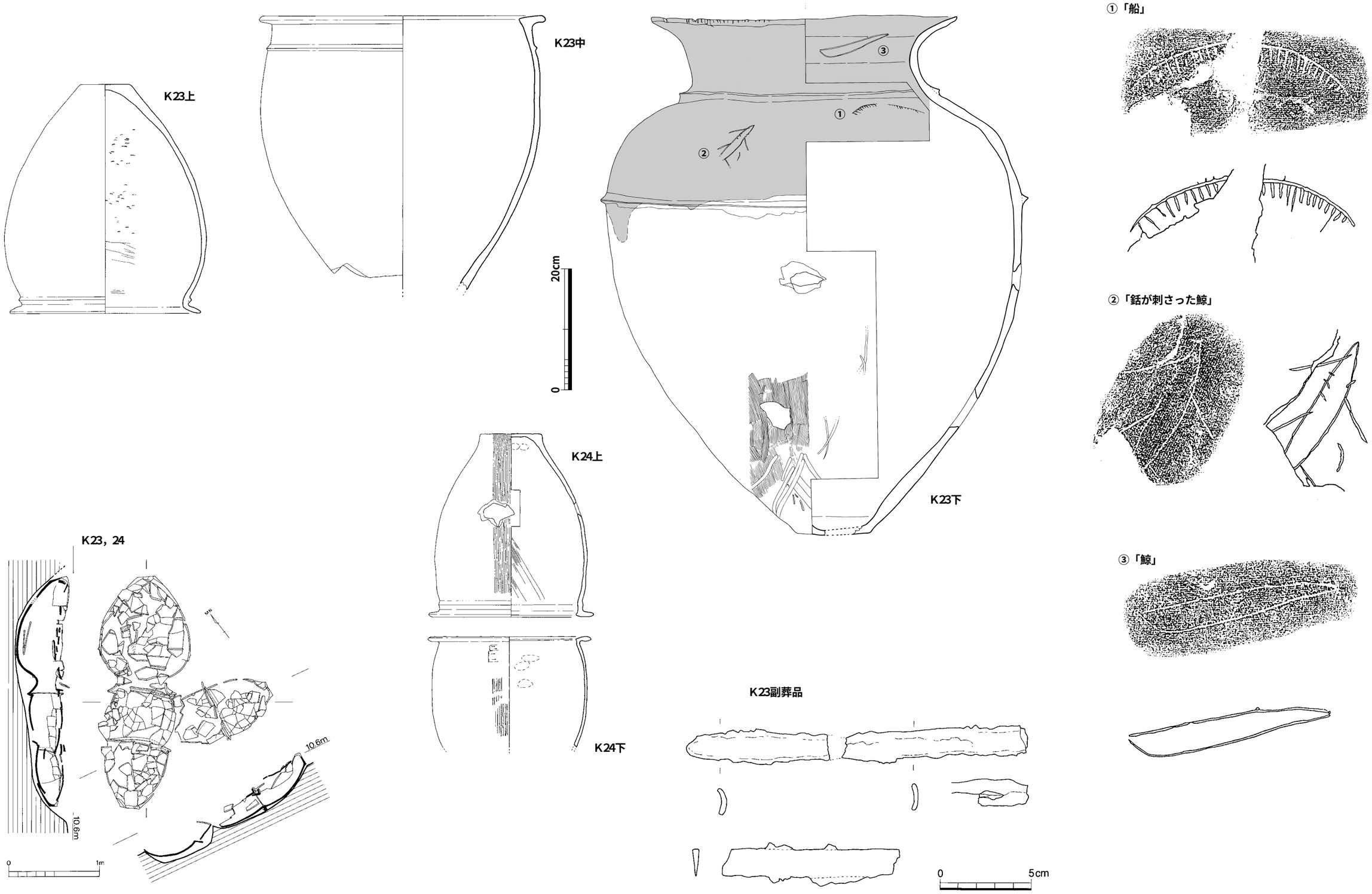
第11図　K13,14,16甕棺墓



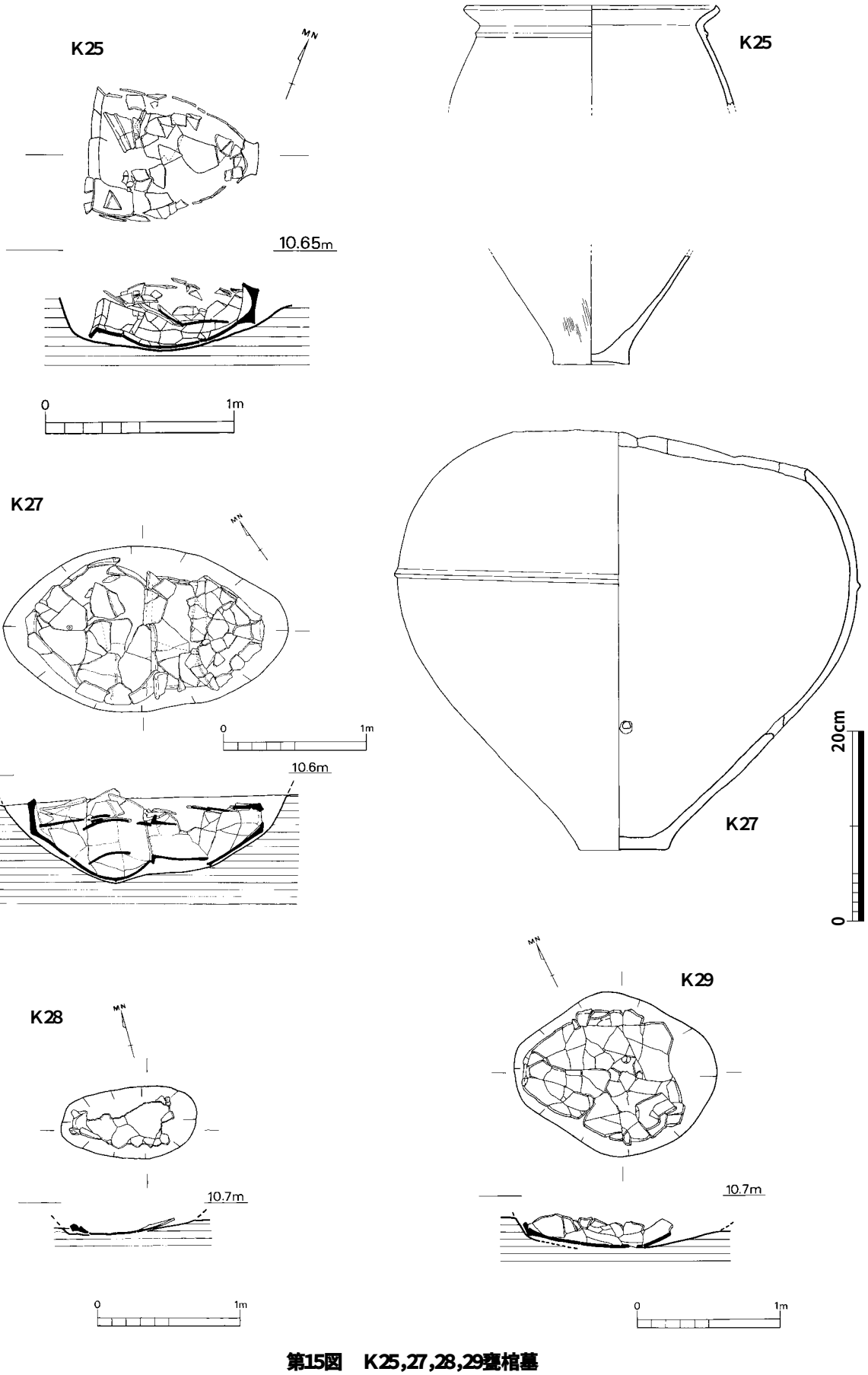
第12図　K18甕棺墓及び副葬品



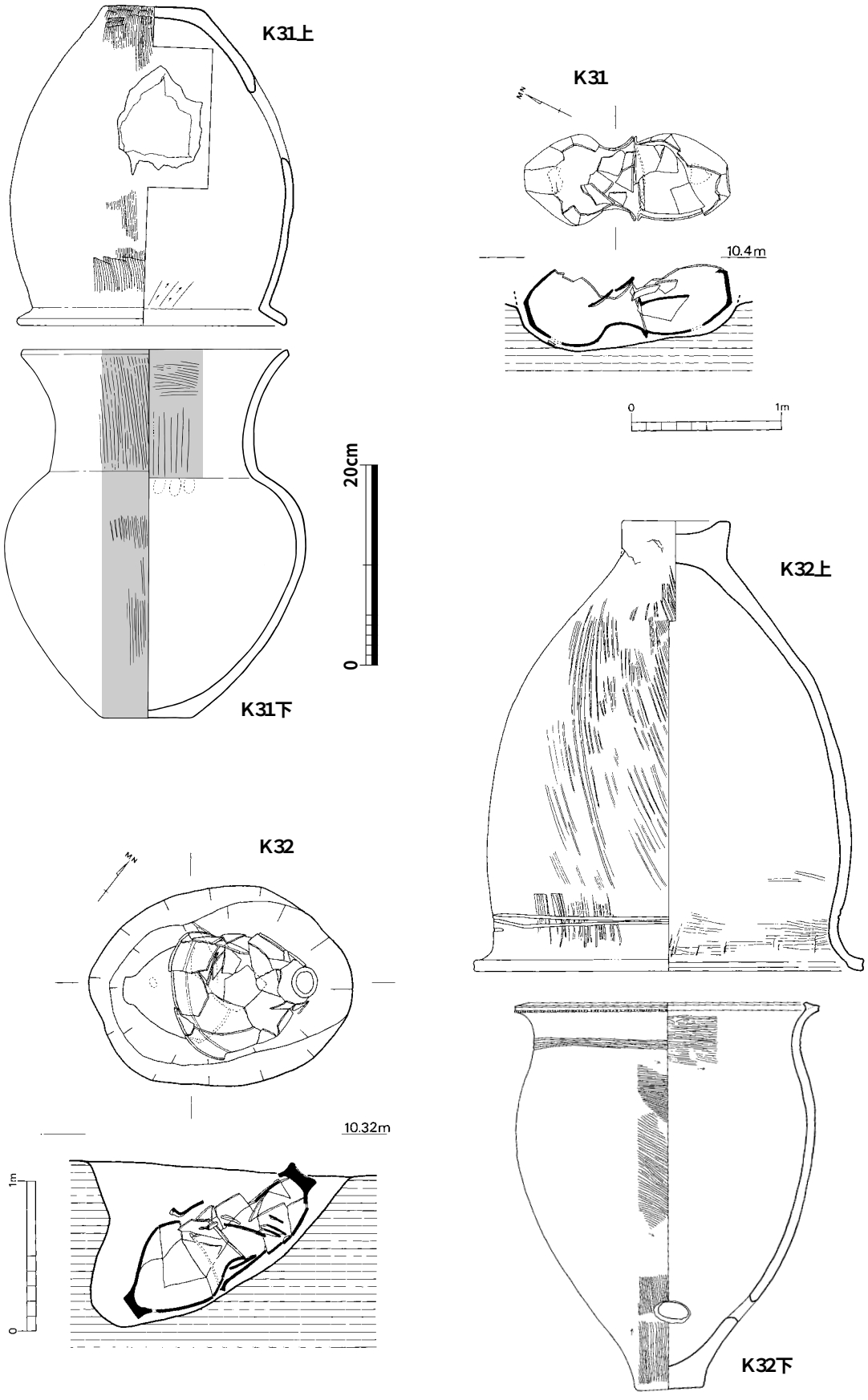
第13図　K17,19,20,21甕棺墓



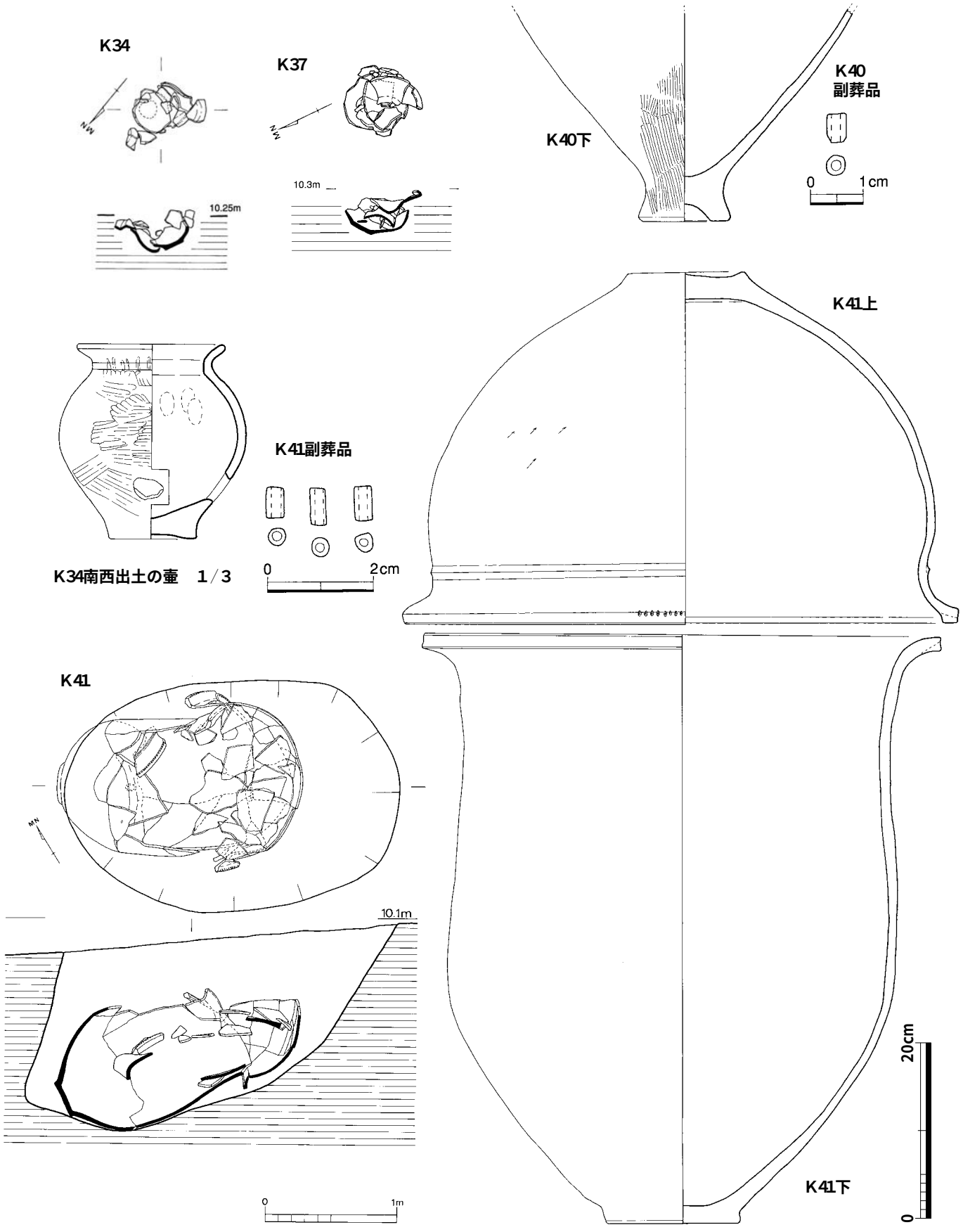
第14図　K23,24甕棺墓及び副葬品



第15図　K25,27,28,29甕棺墓



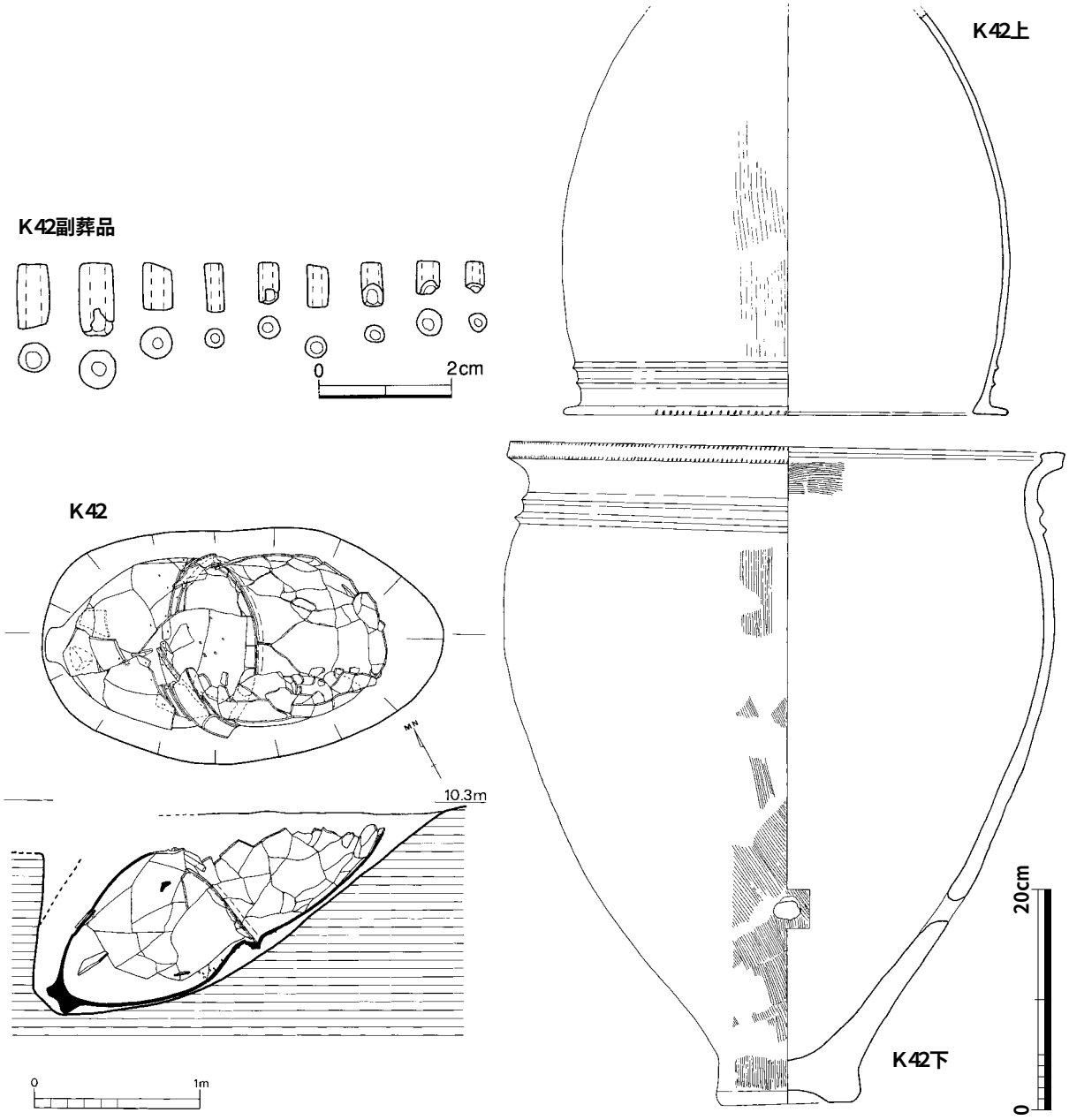
第16図　K31,32甕棺墓



第17図　K34,40,41甕棺墓及び副葬品

第３表　甕棺墓観察表①

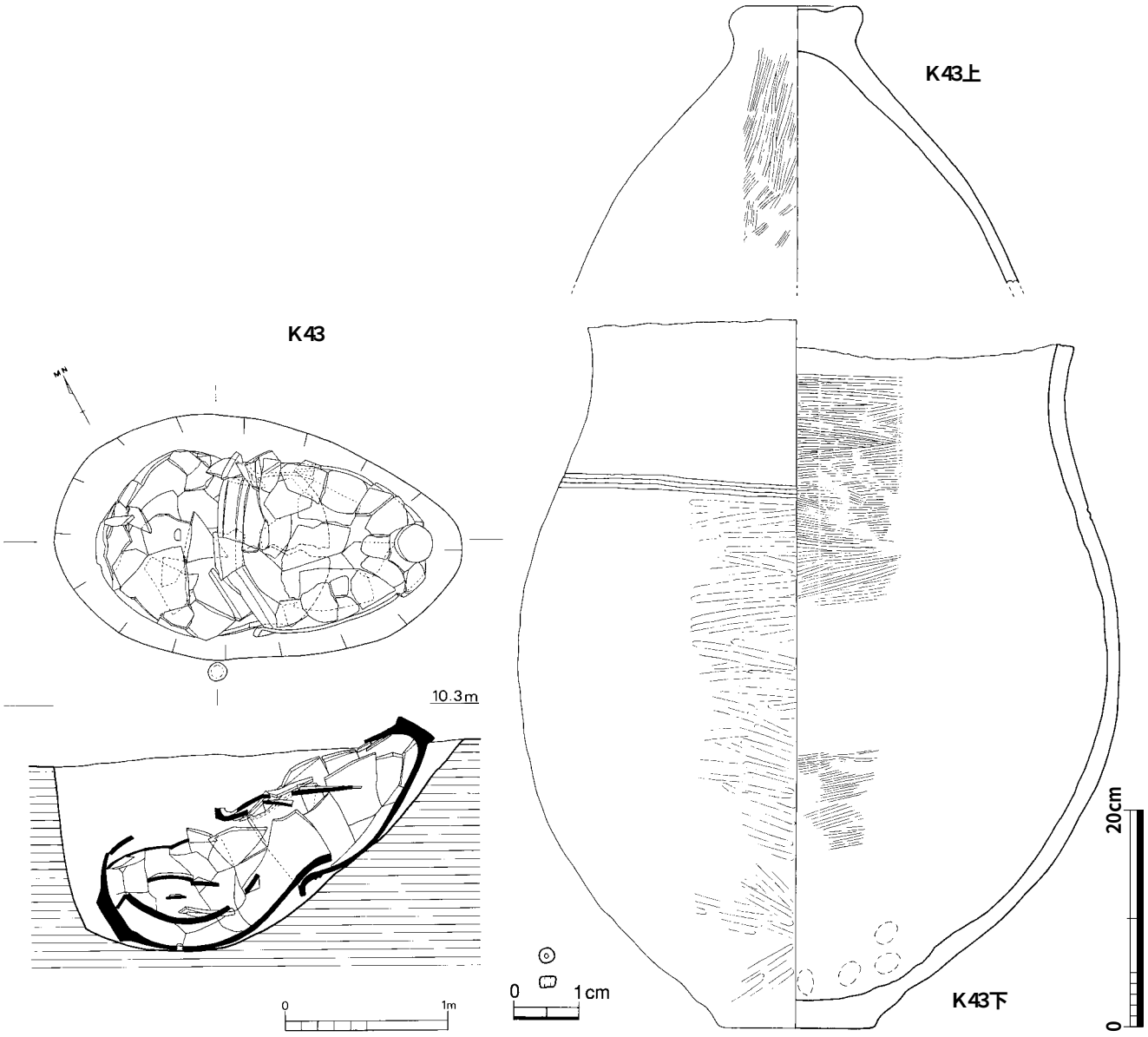
遺構番号	挿図番号	甕棺形式・埋置			墓坑(cm)					上甕(cm)				下甕(cm)				備考
		構造	方位	角度	平面形態	長さ	幅	深さ	奥行	分類	口径・器高・胴回	特徴(色調・胎土)	手法	分類	口径・器高・胴回	特徴	手法	
K1	6	合口								大Ⅱa	56.0・59.7・59.0	明赤褐・石英,長石,金雲母	表:口縁部ヨコナデ,ハケメ 裏:ナデ,指押さえ	大Ⅱa	32.2・41.7・34.3	橙・石英,長石	表:口縁部ヨコナデ,刻み,ハケメ裏:ナデ,指押	
k2	7	合口	N55°W	18°	楕円	180	99.5	60	3.5	大Ⅱa	66.6・82.5・67.8	石英,長石,金雲母	表:口縁ヨコナデ,胴部ナデ 裏:ハケメ,ナデ,底部指押	大Ⅱa	53.9・74.7・56.1	赤褐・石英,長石,金雲母	表:口縁部ヨコナデ,ハケメ裏:底部指押さえ	
k3	6	単棺	N57°E		楕円	103	67			大Ⅱa	33.8・67.0・65.0	明赤褐・長石	表:口縁部刻み,ヘラミガキ					表面丹塗り,スス痕あり
k4	6	合口	N57°W											大Ⅱb	31.2・40.0・29.0	明赤褐・石英,長石,金雲母	表:口縁部ヨコナデ,ハケメ裏:底部指押さえ	表裏面スス痕あり
k5	8	合口	N24°E	25°	楕円	67.5	52	20.5		大Ⅱa	24.9・31.7・25.2	明赤褐・石英,長石,金雲母	表:口縁部ヨコナデ,ハケメ	大Ⅱa	29.9・32.8・31.7	橙・石英,長石	表:口縁部刻みヨコナデ,暗文,ミガキ	
k6	8	合口	N63°E		楕円	141	83.5	50		大Ⅱa	56.8・39.5・39.8	にぶい橙・石英,長石	表:口縁部ヨコナデ,ナデ 裏:ナデ					
k7	9	合口	N49°E	36°	楕円	106.5	82.5	39.5		大Ⅱb	44.0・57.4・48.5	橙・石英	表:口縁部ヨコナデ,所々にハケメ					表面スス痕あり
k8	9	単棺	N51°W											大Ⅰc	#NAME?	橙・長石,石英,金雲母	表:ハケメ裏:底部指押さえ	表面ほとんど風化
k9	10	合口	N34°W							大Ⅳ	20.8・―・26.2	赤褐・砂粒	表:口縁部ヨコナデ,ハケメ	大Ⅳ	28.2・―・27.0	赤褐・長石,石英,金雲母	表:口縁部ヨコナデ,ハケメ裏:底部指押さえ	
k10	10	単棺	N84°E	69°	楕円	95	70.5	33		大Ⅱc	40.4・41.2・52.6	明赤褐・石英,長石	表:ナデ裏:ナデ,ハケメ					
k12	10	単棺	N11°E															



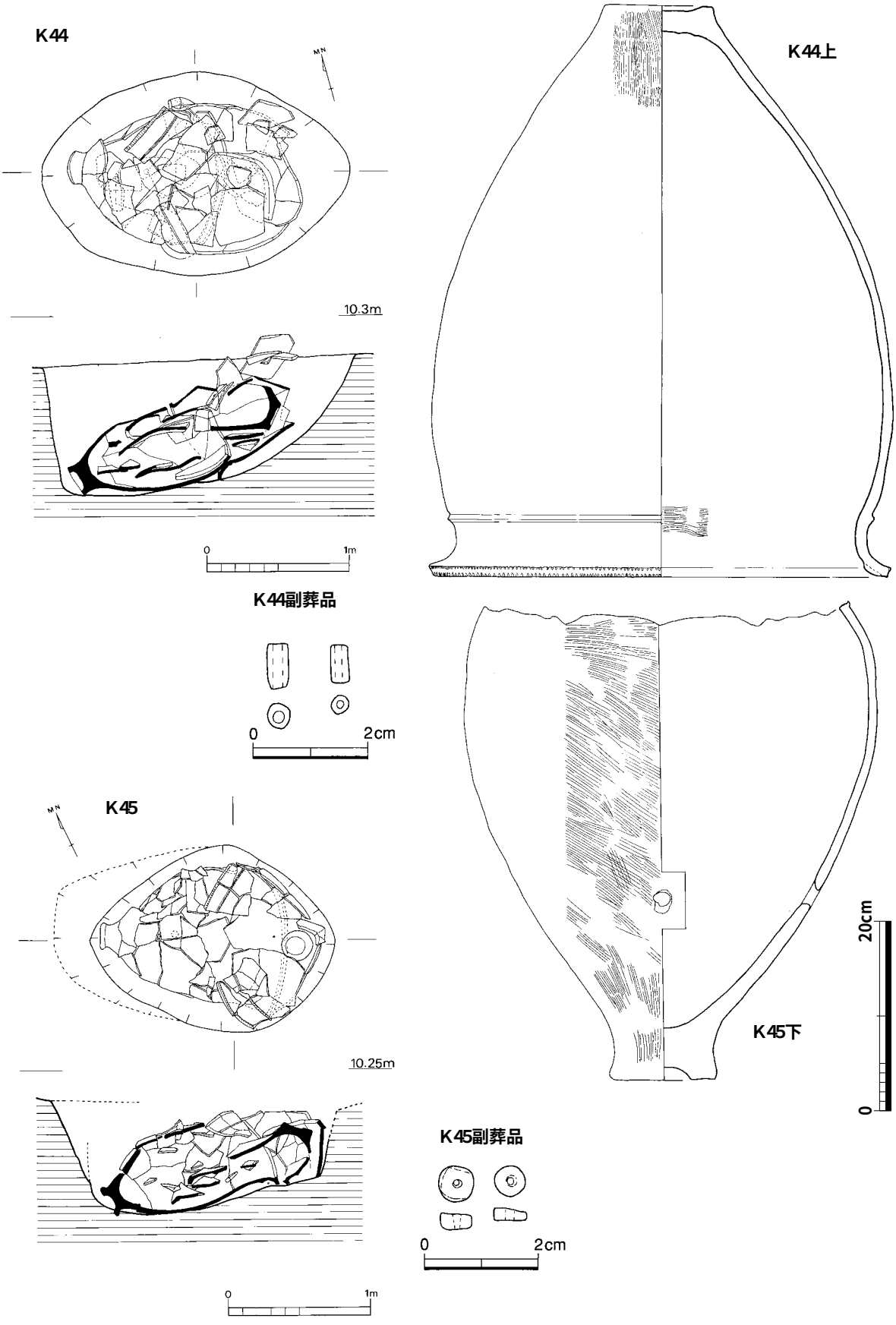
第18図　K42甕棺墓及び副葬品

第４表　甕棺墓観察表②

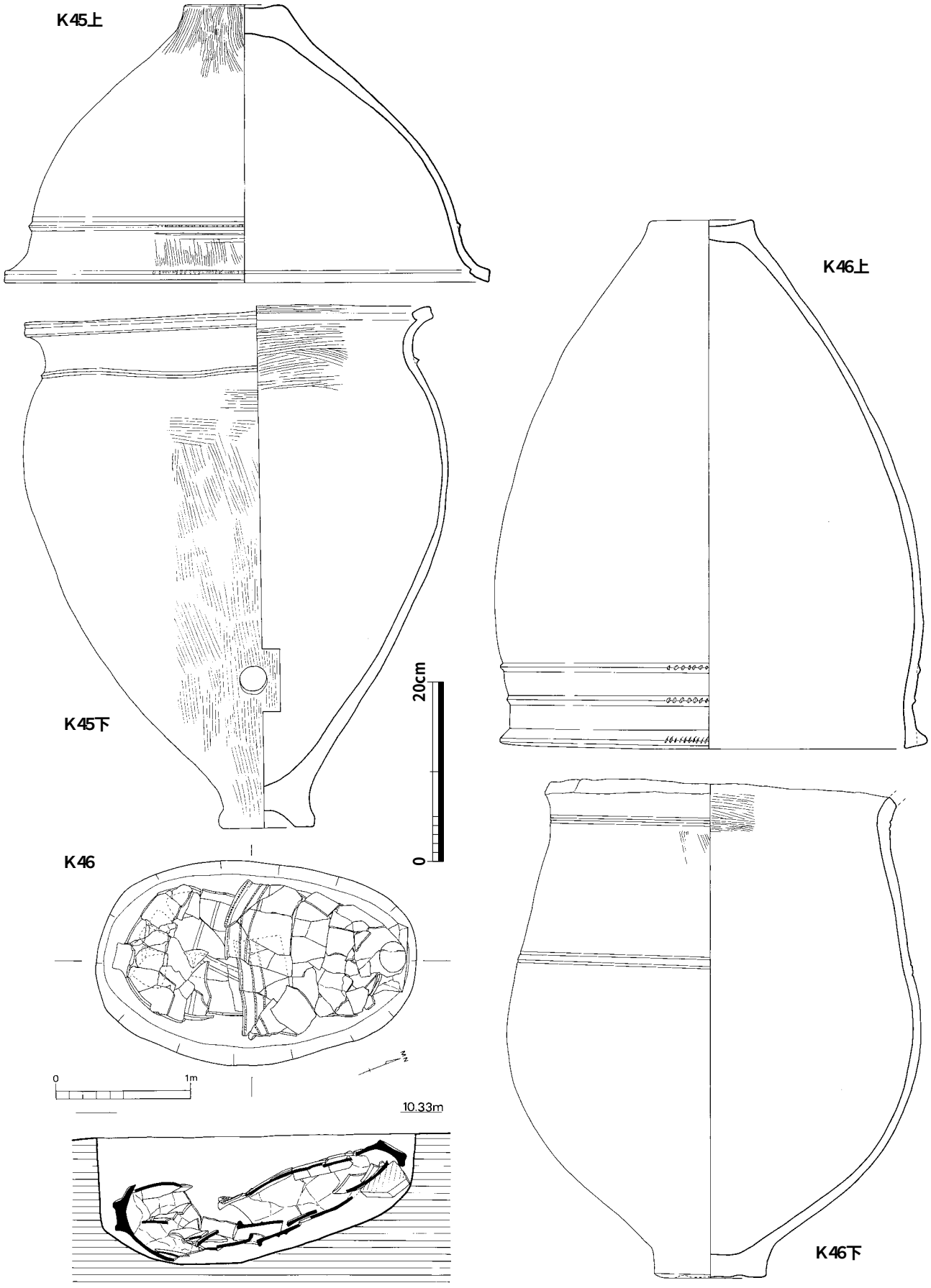
遺構番号	挿図番号	甕棺形式・埋置			墓坑(cm)					上甕(cm)				下甕(cm)				備考
		構造	方位	角度	平面形態	長さ	幅	深さ	奥行	分類	口径・器高・胴回	特徴	手法	分類	口径・器高・胴回	特徴	手法	
K13	11	合口	N36°W							大Ⅲ	25.0・28.2・23.5	橙・石英, 長石	表:ナデ 裏:ナデ					
k14	11	合口	N38°W	31°	楕円	115	71	54	9					大Ⅱa	52.8・73.6・59.6		表:口縁ヨコナデ, 刻みハケメ後ナデ　裏:ナデ	穿孔あり
k15	11	合口	N22°W	29°		66.5	47.5	23.5		大Ⅱc	29.2・30.0・27.4	茶褐・砂粒	表:口縁部ハケメ調整後凸溝をつけてヨコナデ, ハケメ					表面風化
k16	11	単棺	N38°W															
k17	13	合口	N 2°W							大Ⅱc	29.5・32.5・26.6	橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 裏:指押さえ	大Ⅱc	26.3・29.6・25.0	橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 裏:指押さえ	表面スス痕あり
k18	12	合口	N33°W	19°	楕円	122	77	48.5	4.5	大Ⅱb	46.6・62.0・51.6	赤褐	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ					一部スス・粘土塊で合口ふさぐ
k19	13	単棺	N40°W		楕円													
k20	13	合口	N35°E							大Ⅱc	28.9・27.0・26.0	橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ ナデ	大Ⅱc	27.8・26.0・31.1	橙・石英, 長石	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 裏:指押さえ	表面スス痕あり
k21	13	合口	N65°W											大Ⅱc	26.8・23.0・24.6	茶褐・砂粒	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ	
k23上下	14	三連	N38°E							大Ⅲ	35.8・61.4・50.0			大Ⅲ	31.6・38.0・33.4	にぶい赤褐・石英, 長石		
K23中	14									大Ⅲ	33.4・32.1・32.6							
k24	14	合口	N77°E							大Ⅱc	27.0・30.0・25.2	にぶい黄橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 裏:ヘラ押さえ, ハケメ, 指押さえ	大Ⅱc	26.9・18.3・25.5	黄灰・石英, 長石, 金雲母	表:口縁部ヨコナデ, ヘラナデ, ハケメ　裏:ナデ, 指押さえ	風化・剥落あり
k25	15	単棺	N69°E							大Ⅳ	27.0・—・—	黄橙・石英, 長石	表:底部ヨコナデ					



第19図　K43甕棺墓及び副葬品



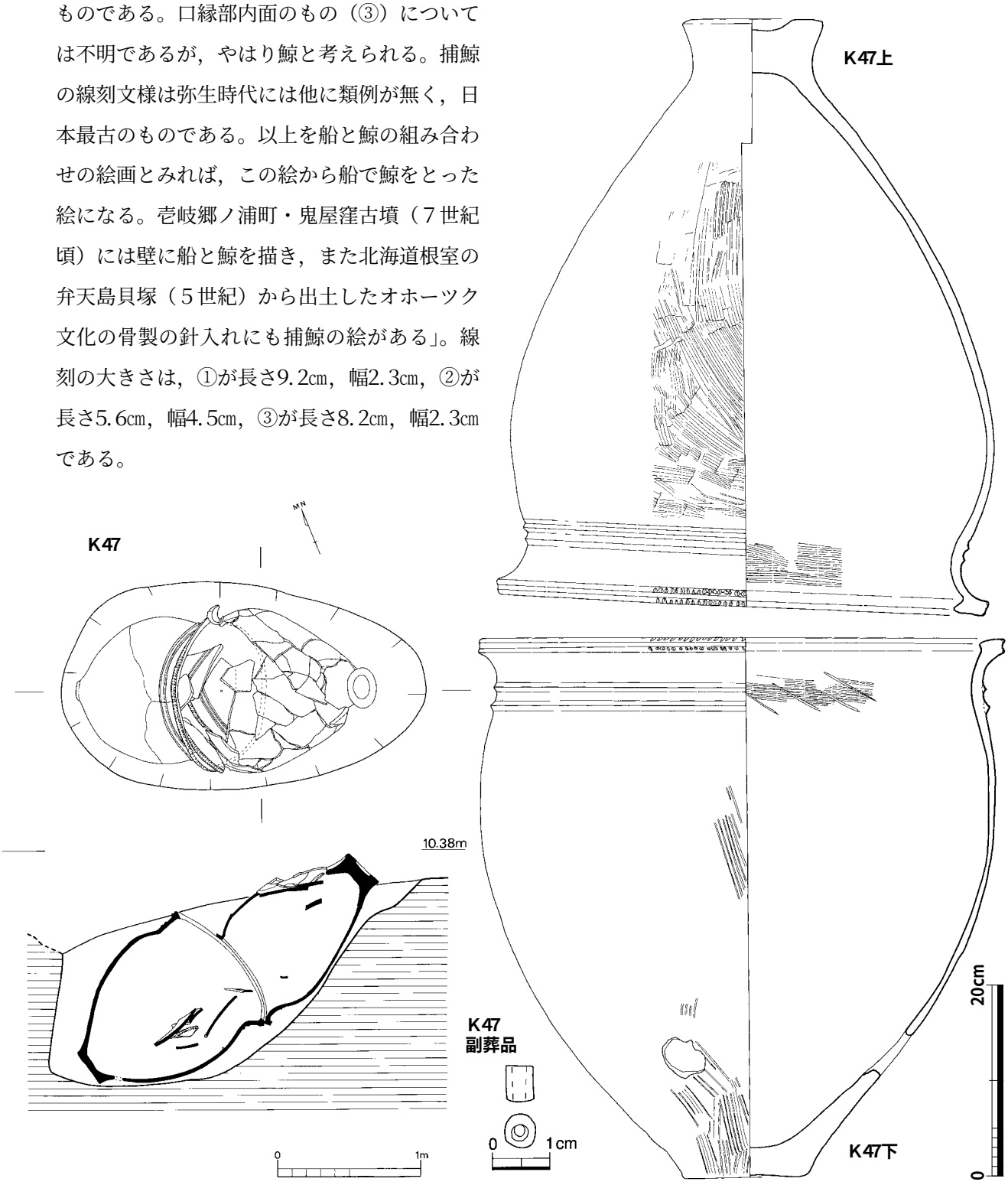
第20図　K32,44,45甕棺墓及び副葬品



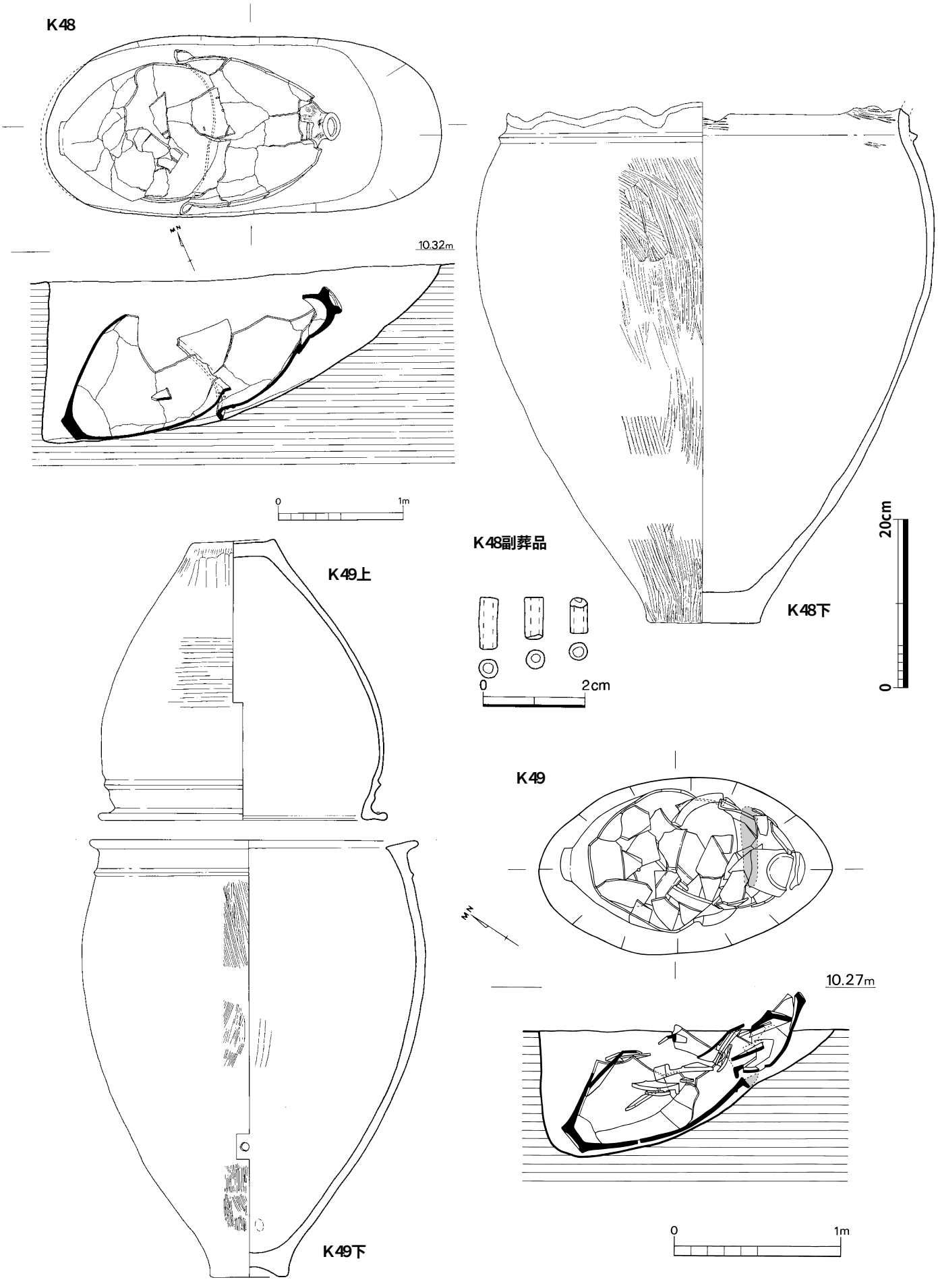
第21図　K45,46甕棺墓

「捕鯨線刻」土器（第13図）

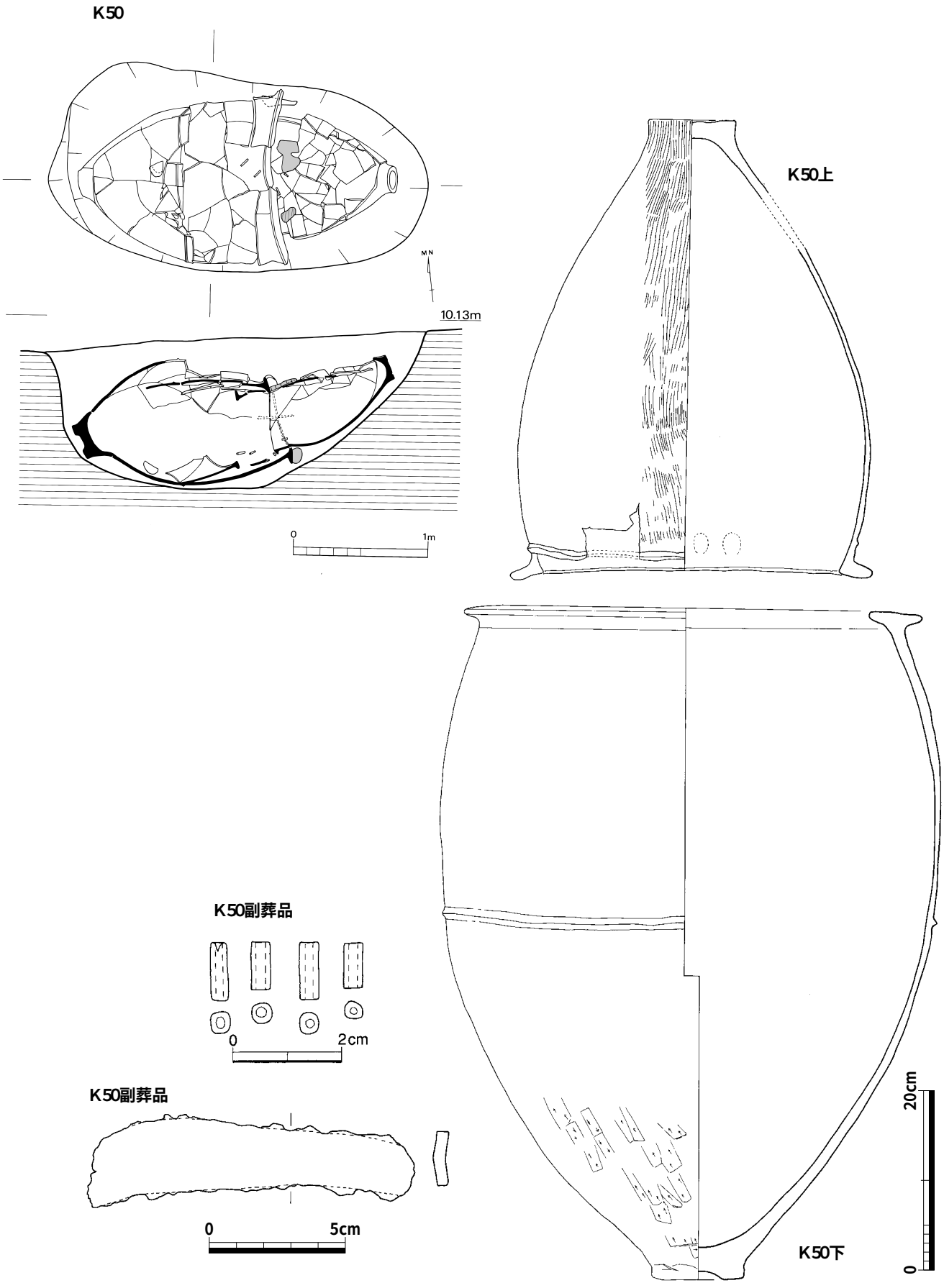
Ｅ－３区，K23の甕と壺を組み合わせた三連式甕棺下ガメの胴上部に二カ所，口縁部内面に一カ所の計三カ所に線刻が認められた。線刻文様については，故佐原眞氏に実見して頂いており，以下のコメントをいただいた「胴上部表面のものはそれぞれ船（①）と鯨（②）であり，捕鯨の様子を描いたものである。口縁部内面のもの（③）については不明であるが，やはり鯨と考えられる。捕鯨の線刻文様は弥生時代には他に類例が無く，日本最古のものである。以上を船と鯨の組み合わせの絵画とみれば，この絵から船で鯨をとった絵になる。壱岐郷ノ浦町・鬼屋窪古墳（７世紀頃）には壁に船と鯨を描き，また北海道根室の弁天島貝塚（５世紀）から出土したオホーツク文化の骨製の針入れにも捕鯨の絵がある」。線刻の大きさは，①が長さ9.2㎝，幅2.3㎝，②が長さ5.6㎝，幅4.5㎝，③が長さ8.2㎝，幅2.3㎝である。



第22図　K47甕棺墓及び副葬品



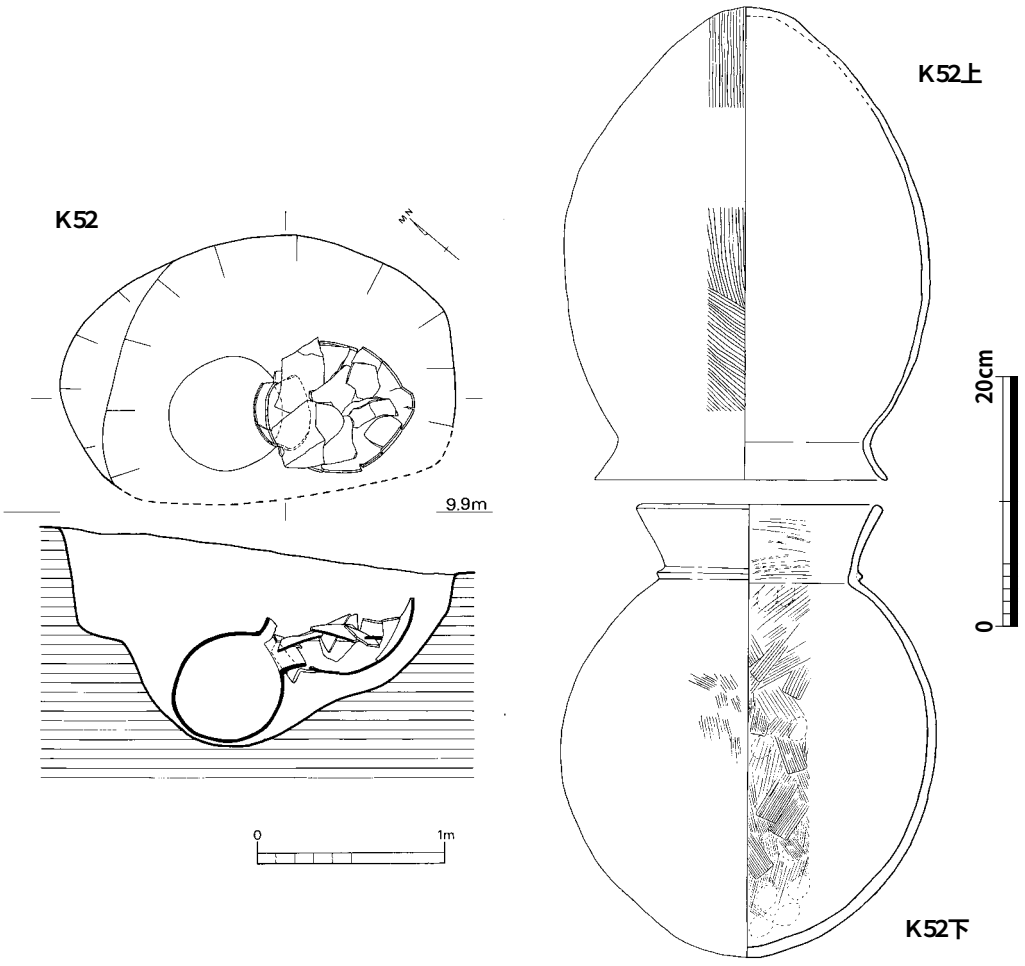
第23図　K48,49甕棺墓及び副葬品



第24図　K50甕棺墓及び副葬品

第５表　甕棺墓観察表③

遺構番号	挿図番号	甕棺形式・埋置			墓坑(cm)					上甕(cm)				下甕(cm)				備考
		構造	方位	角度	平面形態	長さ	幅	深さ	奥行	分類	口径・器高・胴回	特徴	手法	分類	口径・器高・胴回	特徴	手法	
k27	15	合口	N64°W	0°	楕円		57.5	31		大Ⅱb	36.1・38.2・35.4	明赤褐・石英, 長石	表:口縁部ヨコナデ, ヘラ磨き	大Ⅱb		淡灰色	表:ナデ	
k28	15	単棺	N74°W		楕円	47	25											
k29	15	単棺	N64°W		洋梨	71	57											
k31	16	合口	N25°W							大Ⅳ	27.0・32.2・28.4	橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁ヨコナデ, ハケメ, ナデ 裏:ヘラケズリ, ナデ, 指押え	大Ⅳ	26.4・37.1・30.1	明赤褐・石英, 長石	表:口縁ヨコナデ, ハケメナデ消 裏:ハケメ, ナデ, 指押	
k32	16	合口	N52°E	38°		87	66.5	55		大Ⅰc	48.8・44.1・45.2	橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 裏:ハケメ	大Ⅰc	30.4・38.8・30.0	黄褐・砂粒	表:口縁ヨコナデ, ハケメ 裏:ハケメ	表面一部ススあり
k34	17	単棺																
k37		単棺	N25°E															
k40	17	単棺	N65°W											大Ⅰc	38.2・38.2・23.8	橙・石英, 長石		
k41	17	合口	N58°W	28°	楕円	126.5	87.5	79	14	大Ⅰb	63.3・40.5・58.0	明茶褐・砂粒	表:口縁部貼り付け, キザミ 裏:ナデ	大Ⅰb	59.4・67.0・49.8	黄褐・砂粒	裏:ヨコナデ	表裏面一部ススあり
k42	18	合口	N61°E	37°	楕円	120	71	59		大Ⅰc	41.2・36.6・41.4	にぶい黄褐・石英, 長石	表:口縁部ヨコナデ, キザミ, ハケメ 裏:ナデ	大Ⅰc	50.4・59.4・49.8		表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 裏:ハケメ	
k43	19	合口	N61°W	34°	楕円	125	75	63.5		大Ⅰb	―・―・12.0	石英・長石		大Ⅰb	44.6・65.5・65.0	明赤褐・石英, 長石	表:ヘラミガキ 裏:ハケメ, 指押さえ	
k44	20	合口	N74°W	31°	楕円	108	71.5	50		大Ⅰc	48.8・60.4・48.2	黄褐・砂粒	表:口縁部ヨコナデ, ナデ, ハケメ 裏:ハケメ, 底部指ナデ	大Ⅰc	39.2・50.5・44.3	にぶい黄橙・石英, 長石, 金雲母	表:ナデ, ハケメ 裏:ナデ, 底部指押さえ	表面スス痕あり裏面丹塗り痕あり
k45	20・21	合口	N64°W	27°	楕円		65	40		大Ⅰc	53.9・31.4・47.8	にぶい橙・石英, 長石	表:キザミ, ハケメ	大Ⅰc	45.4・58.2・47.6	にぶい黄橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁ヨコナデ, ハケメ, 底部押えヨコナデ　裏:ハケメ	
k46	21	合口	N20°E		楕円	118	75.5	48		大Ⅰc	24.0・29.5・23.5	茶褐・砂粒	表:ナデ 裏:ナデ	大Ⅰc	36.4・53.8・44.4	茶褐・石英	表:ナデ, ミガキ 裏:ナデ	
k47	22	合口	N68°W	37°	楕円	126	72	71		大Ⅰc	51.7・63.3・51.0	浅黄橙・石英, 長石	表:キザミ, ハケメ	大Ⅰc	54.5・57.2・53.3	明褐灰・石英, 長石, 金雲母	表:ハケメ 裏:ハケメ	口縁部, 突帯, 胴部表面の風化
k48	23	合口	N23°E	36°	楕円	157	72	70	3.5	大Ⅰc	62.4・55.0・58.4	にぶい褐・石英, 長石	表:ハケメ 裏:ハケメ	大Ⅰc	47.8・61.2・54.7	にぶい黄橙・石英, 長石, 金雲母	表:ヨコナデ, ハケメ 裏:ハケメ, ナデ, 底部指押さえ	表面スス痕あり・風化
k49	23	合口	N33°W	35°		88	52.5	37.5		大Ⅱa	34.4・33.2・33.4	赤褐・砂粒	表:口縁部ヨコナデ, ヘラナデ, 底部ヨコナデ					粘土塊で合口ふさぐ
k50	24	合口	N83°W	14°	楕円	139.5	76.5	59		大Ⅱb	40.4・50.4・38.5	橙・石英, 長石	表:口縁部ヨコナデ, ハケメ 底部指押さえ爪あと	大Ⅱb	50.8・75.0・55.5	橙・石英, 長石, 金雲母	表:口縁ヨコナデ, ハケメ, ヘラケズリ　裏:ナデ, 指押	一部ススあり・粘土塊で合口ふさぐ
k52	25	合口	N39°W	39°	楕円	105	71	57.5		大Ⅴ	23.0・37.6・28.8	橙・石英, 長石, 金雲母	表:ハケメ 裏:ハケメ	大Ⅴ	19.6・36.5・30.1	橙・石英, 長石	表:口縁ヨコナデ, ハケメ, ヘラナデ　裏:ハケメ, 指押え	

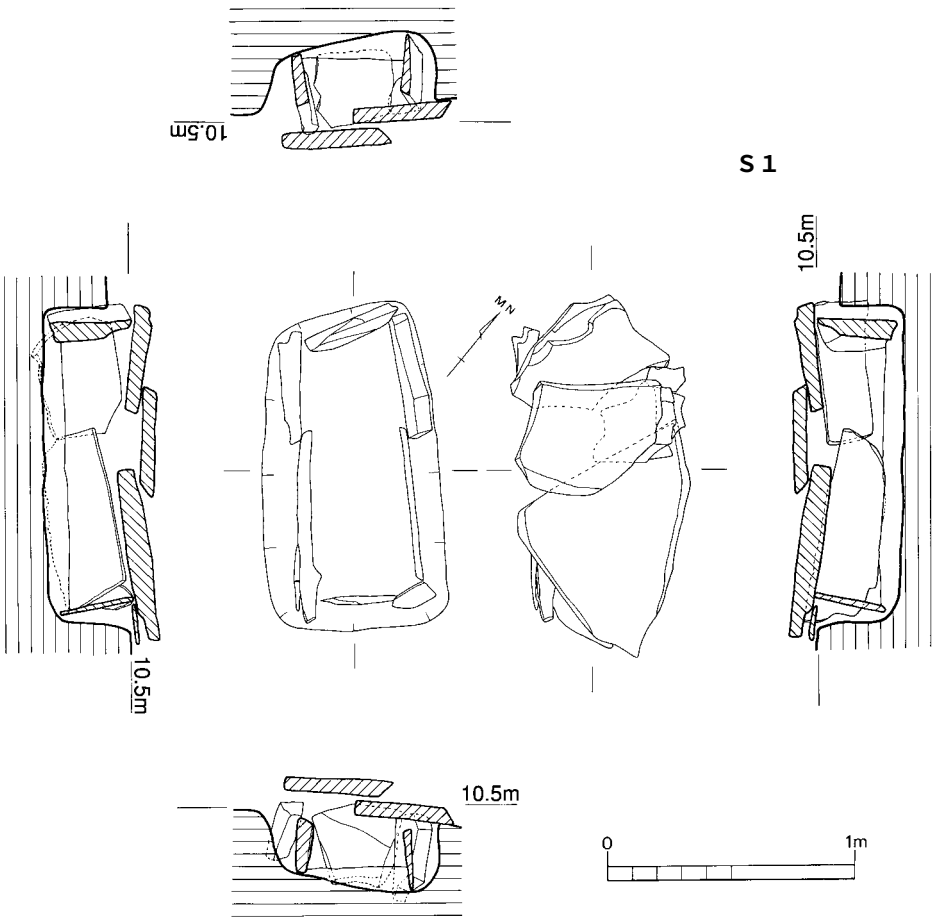


第25図　K52甕棺墓

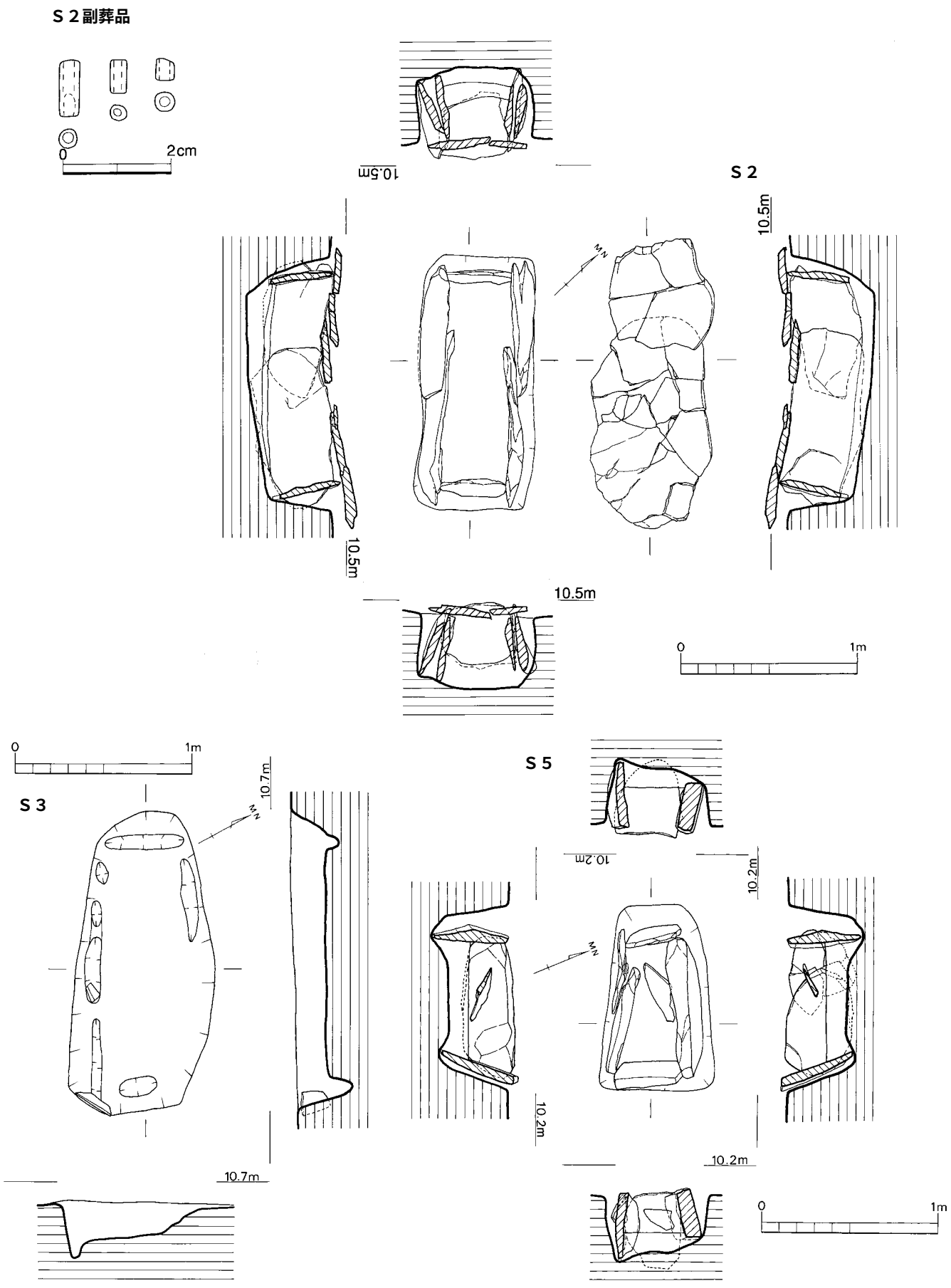
③石棺墓（第26図～第35図）

昭和49年の石田大原墓域における石棺墓は18基が確認されている（10号と16号の２基は石蓋土壙墓，４号は欠番扱いである）。そのうち，棺蓋まで残存するものは14基と極めて良好であり，形式を見る上で貴重な資料といえる。

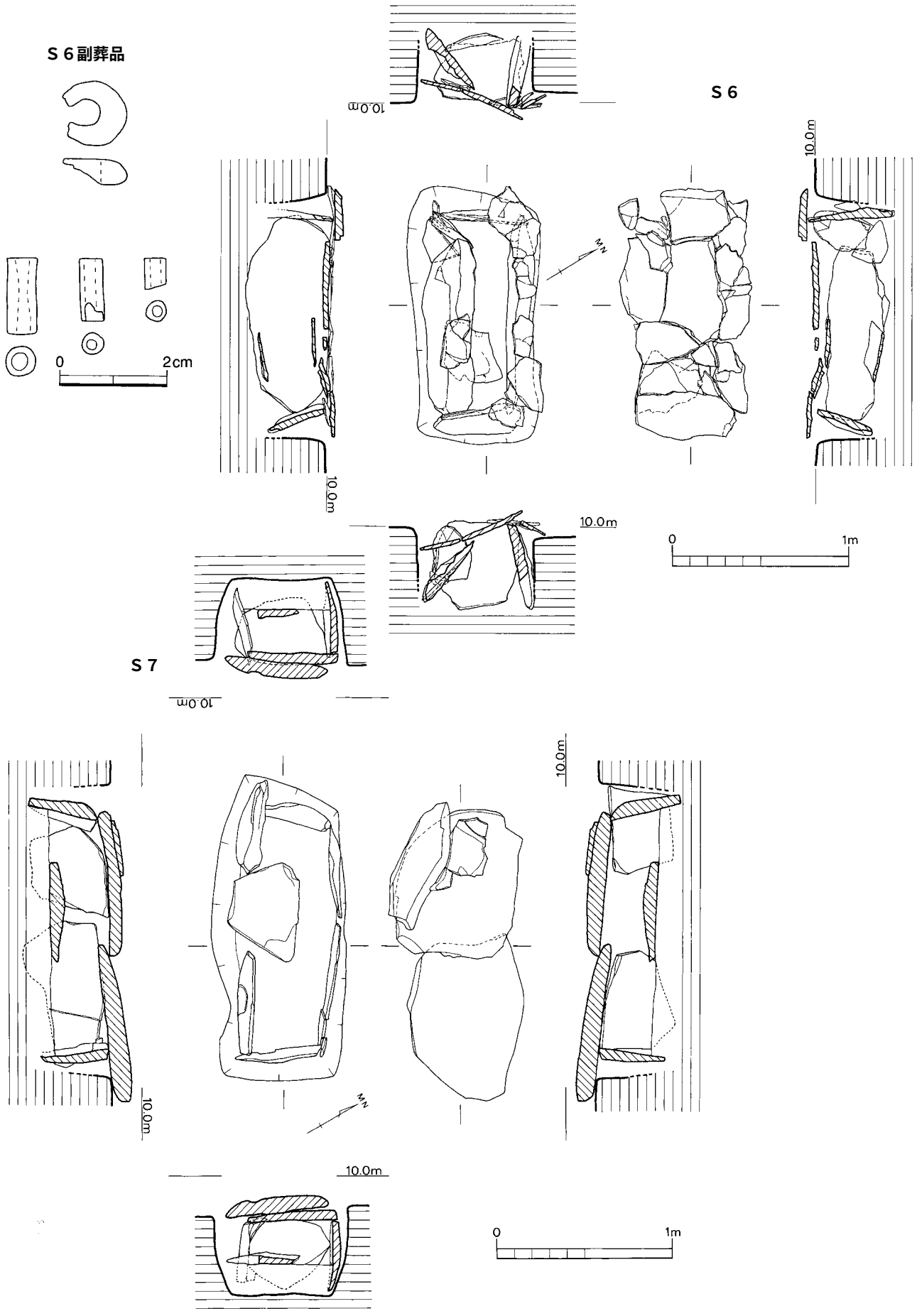
石棺墓は，石田大原墓域の北側先端部に集中して検出され，主軸をほぼ北西から南東に向けた列状に配置されている。石棺の構造は，基本的に側壁２枚と小口１枚で，小口を側壁で挟むかまたは隅を合わせる形態が主体である。石材は板状の玄武岩であり，大きいものは棺蓋として約1.5mを計るものもみられる。法量としては，長径の平均が約123㎝，深さの平均が約31㎝であり，長径が短く，深さが浅いことから横臥屈葬の埋葬形態が予想される。墓域の中心に近い部分では，石棺墓の列中に甕棺が混在しており，切り合い関係がないことから同時期に意識的に配置したものと考えられる。列埋葬として共伴する甕棺の時期から石棺墓の時期を推定すれば，弥生時代前期末から中期初頭に限定される。副葬品は，２号・11号に管玉，６号に丸玉と管玉，14号に勾玉と管玉が出土するのみであり，青銅製品等は副葬されない。石棺墓の詳細な観察については，後の一覧表に明示している。



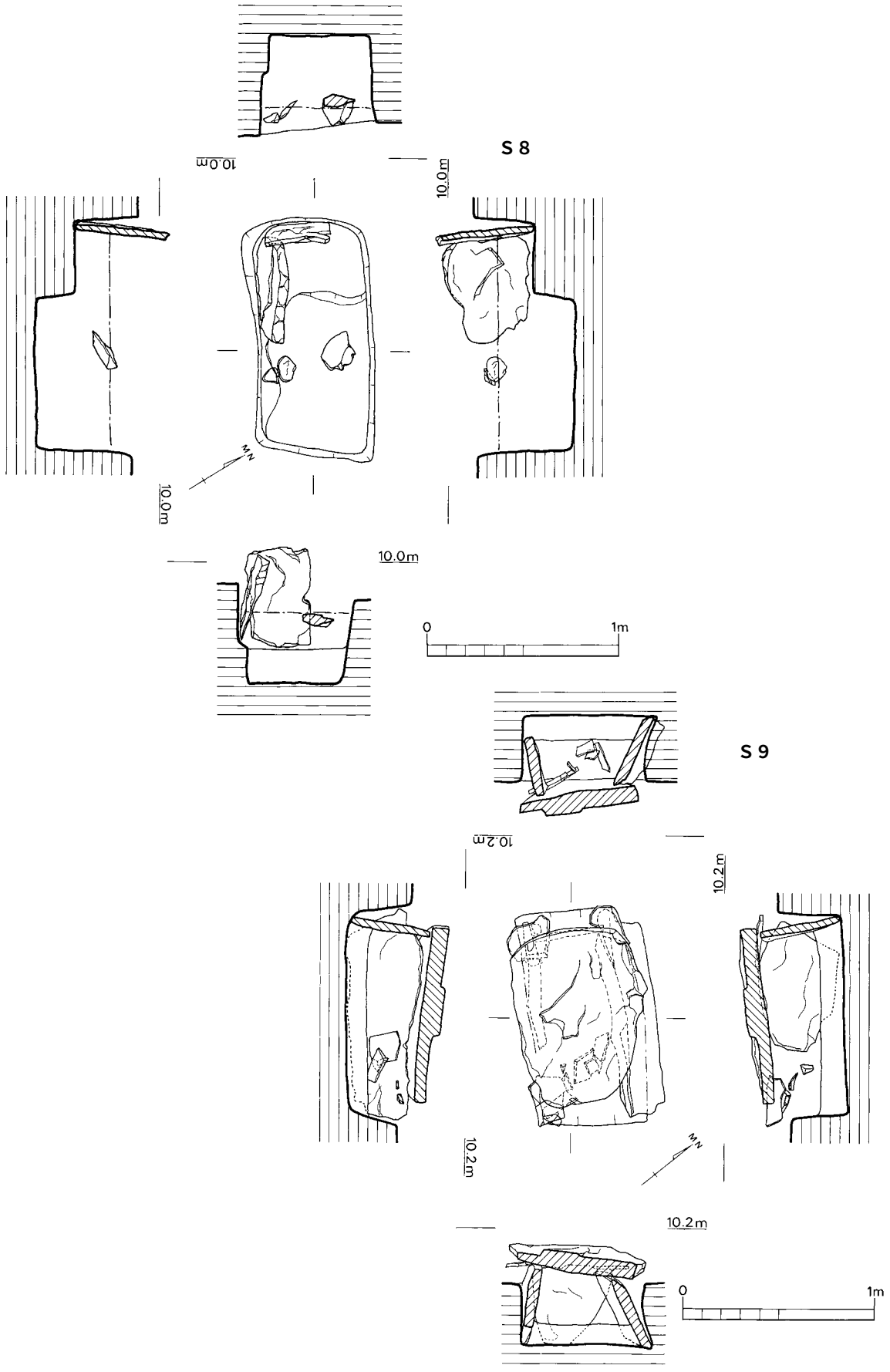
第26図　Ｓ１箱式石棺墓



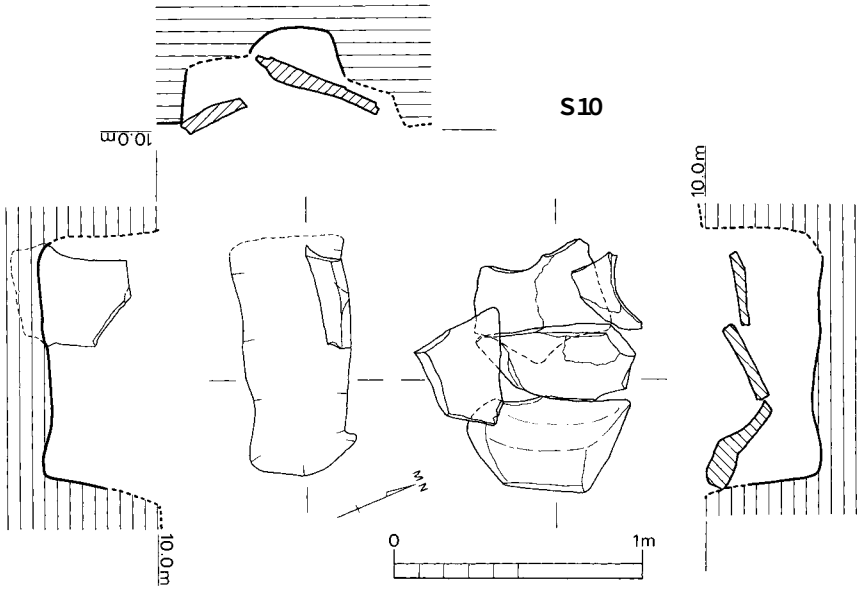
第27図　S２,３,５箱式石棺墓及び副葬品



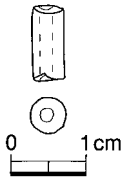
第28図　Ｓ６，７箱式石棺墓及び副葬品

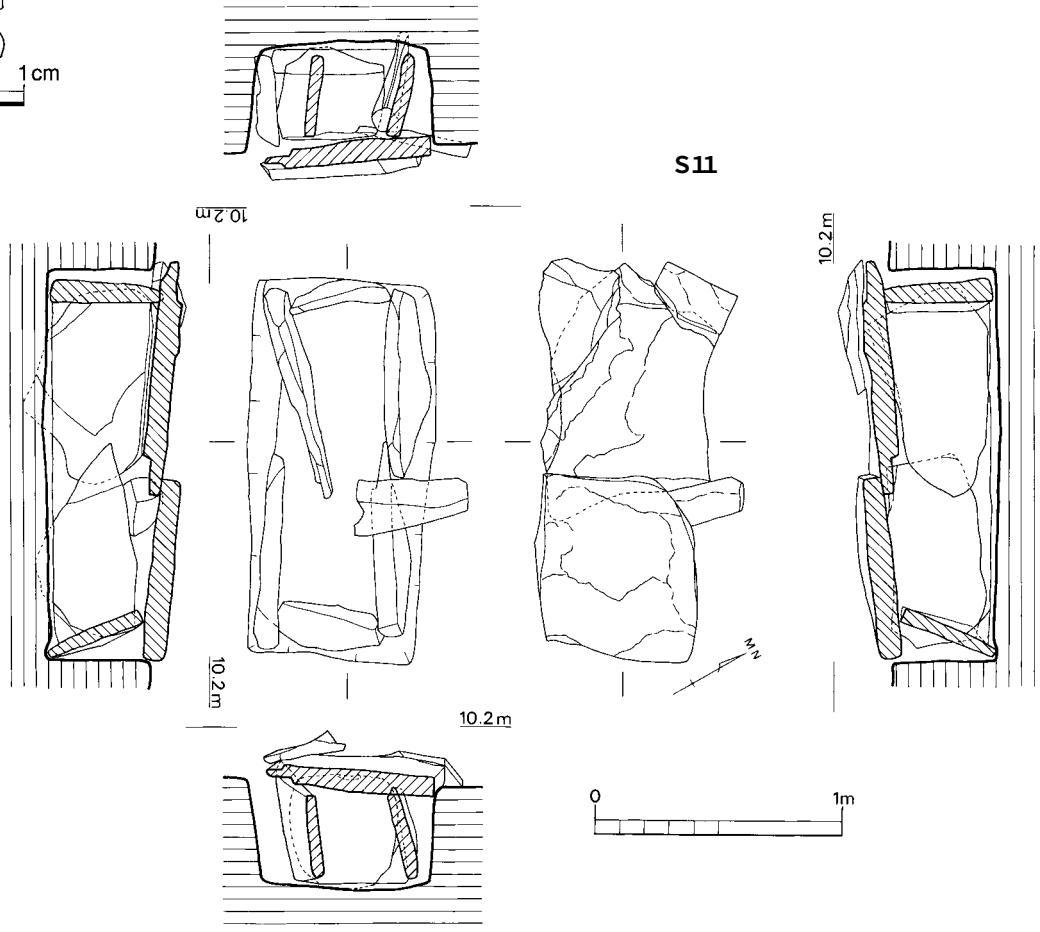


第29図　S８，９箱式石棺墓

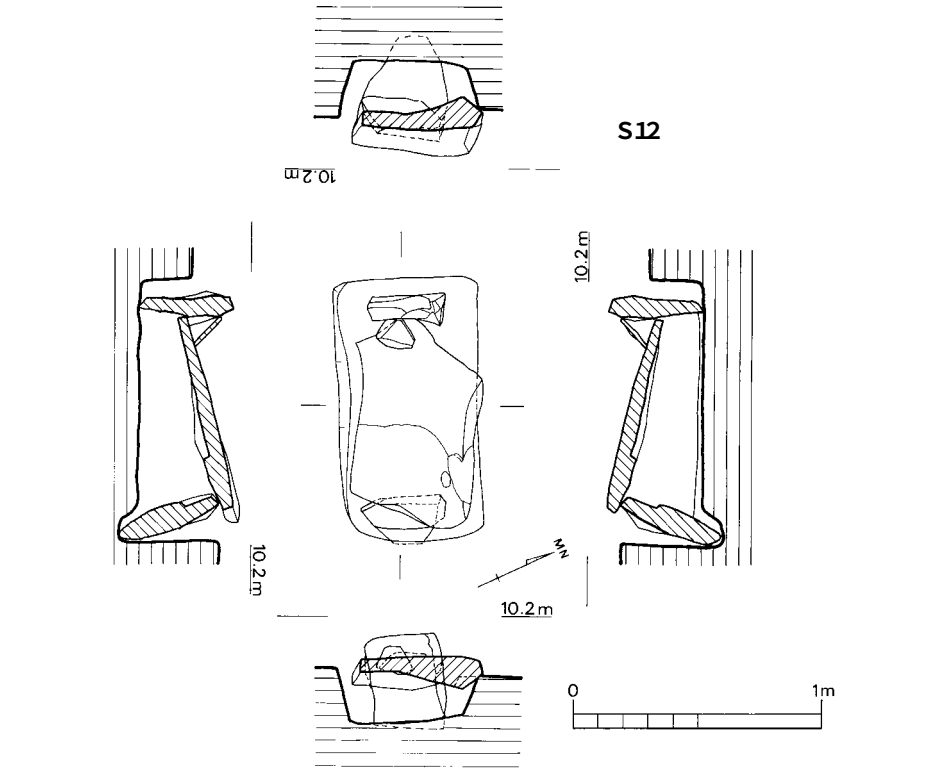


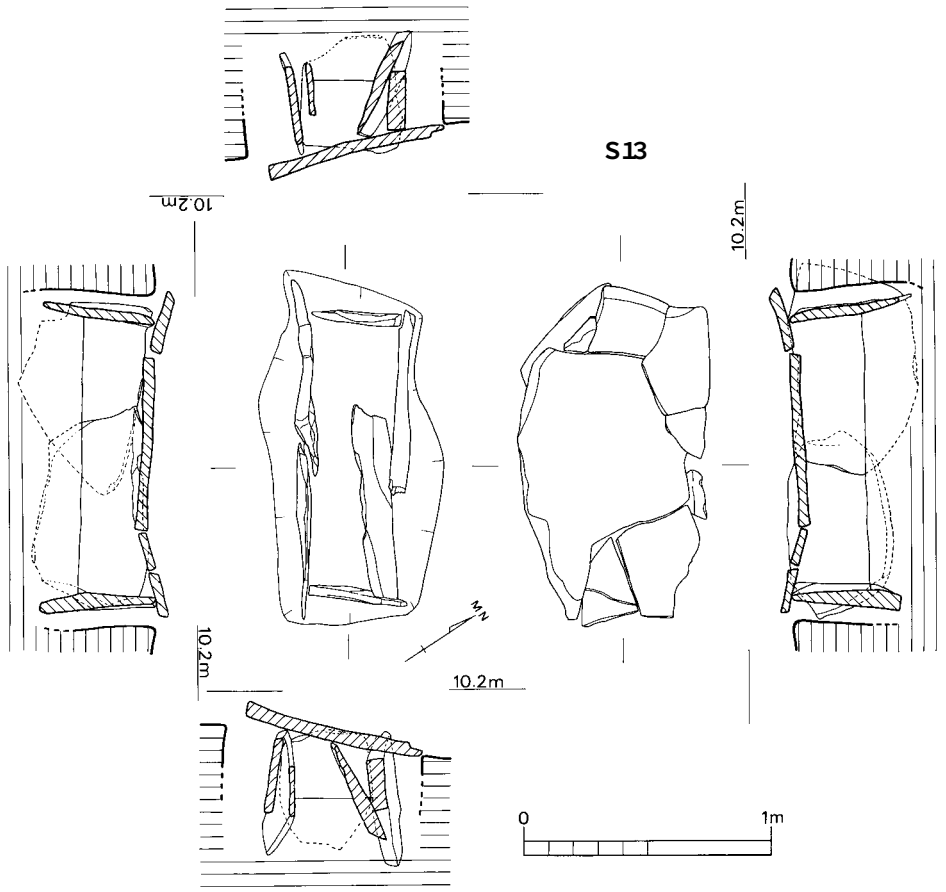
S11副葬品



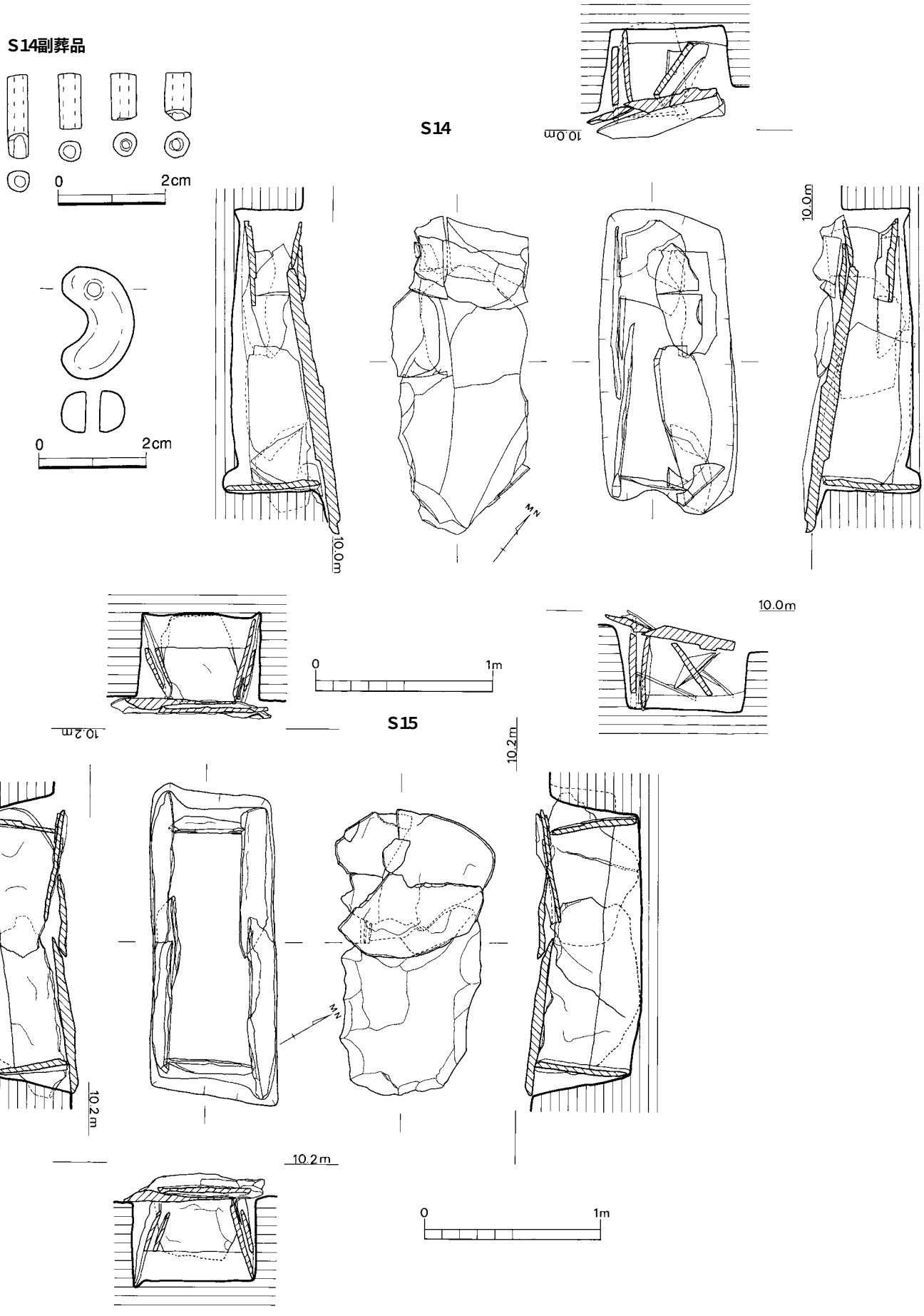


第30図　S10,11箱式石棺墓及び副葬品





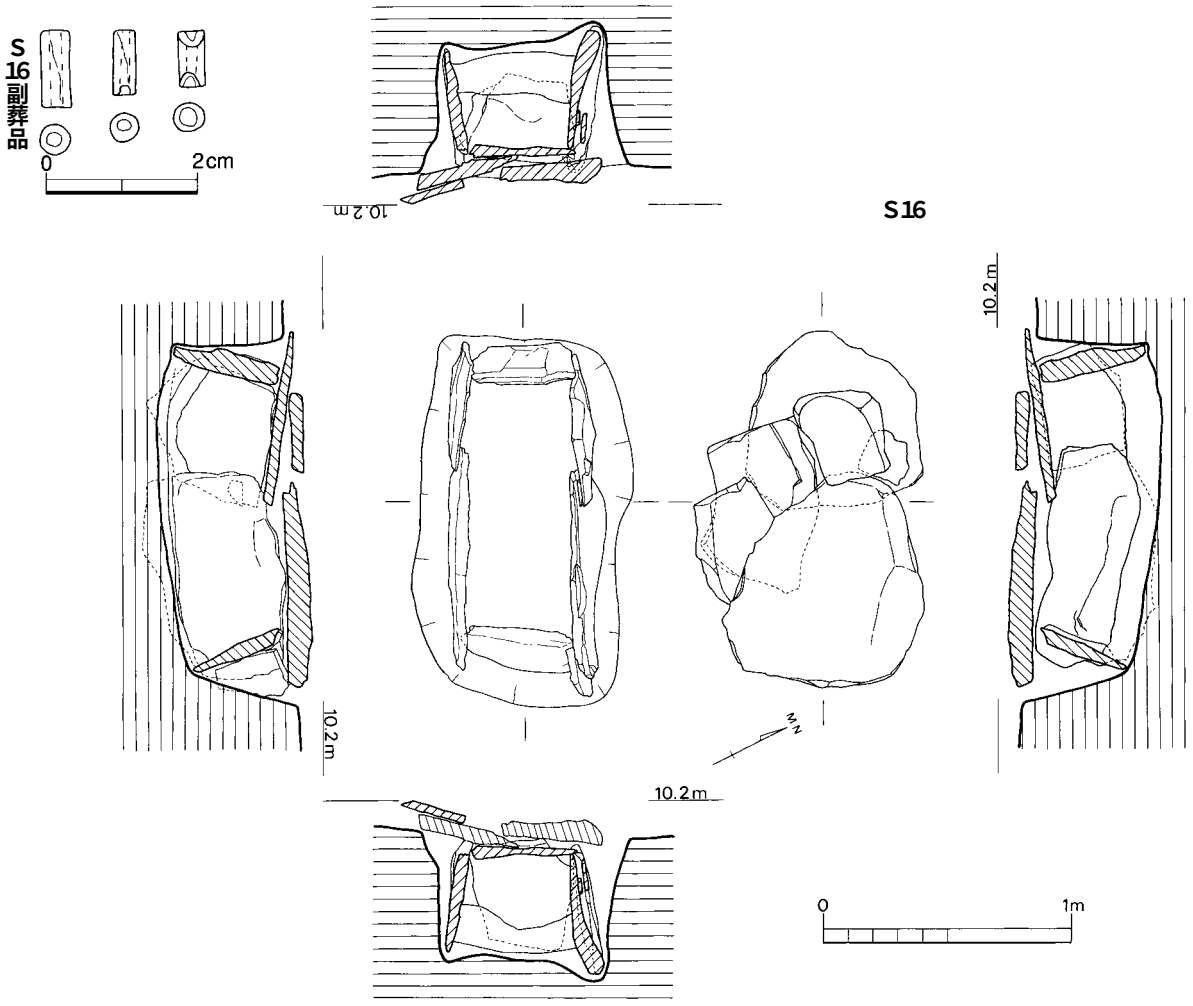
第31図　S12,13箱式石棺墓



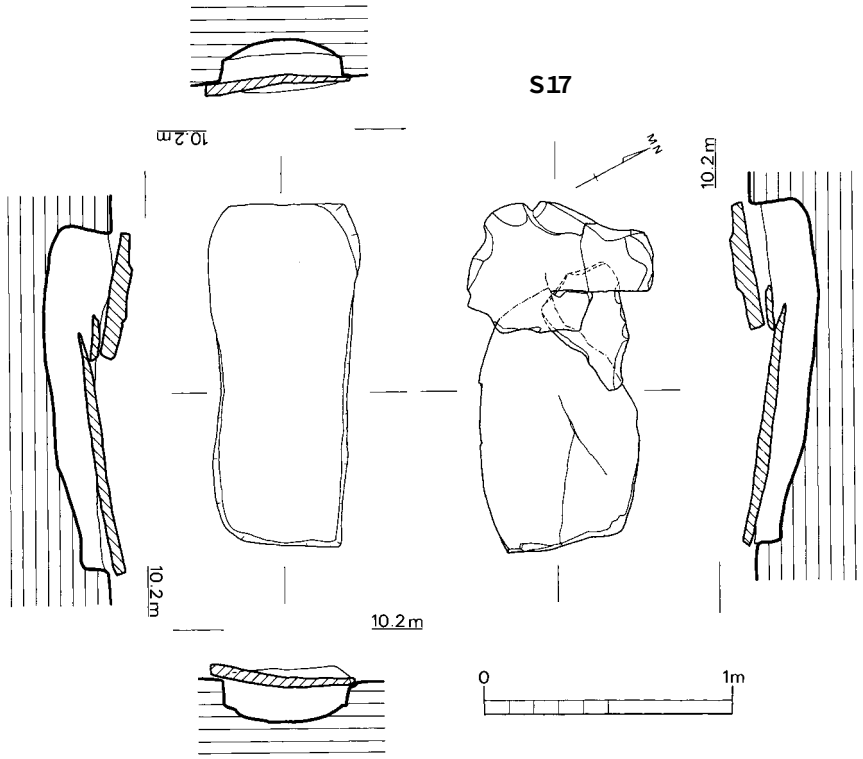
第32図　S14,15箱式石棺墓及び副葬品

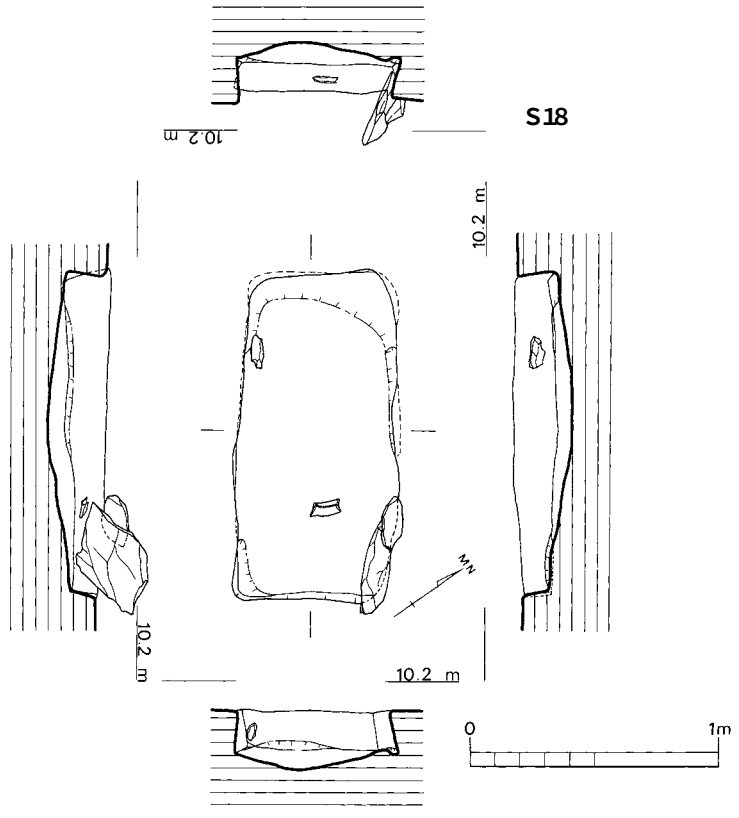
第６表　副葬品観察表①

号数	品名	数量	図番号	個別号数	法量				色調	材料	甕棺時期	備考
					長さ	幅	直径	孔直径				
K２	トンボ玉	1	7		厚		10	5.5	青に白色	ガラス	大原Ⅱａ	完形
	勾玉	1	7		20	10		5.2	青緑色	アマゾナイト	〃	完形
	管玉	14	7	①	11		3.3	1.5	淡灰緑色	緑色凝灰岩	〃	
				②	10.8		3.5	1.2	〃	〃	〃	
				③	8		3	1.5	〃	〃	〃	
				④	8.1		3	1.5	〃	〃	〃	
				⑤	4.1		2.1	1	〃	〃	〃	
				⑥	4.9		2	1	〃	〃	〃	
				⑦	4		2	1	〃	〃	〃	
				⑧	4.1		2	1	〃	〃	〃	
				⑨	5.5		2.1	1	〃	〃	〃	
				⑩	2.8		2	1	〃	〃	〃	
				⑪	4.1		2.1	1.1	〃	〃	〃	
				⑫	3		2	1.1	〃	〃	〃	
				⑬	3.1		2.1	1.1	〃	〃	〃	
				⑭	4		2	1	〃	〃	〃	
K３	トンボ玉	3	6	①	厚　4		9	4	青に白色	ガラス	大原Ⅱｂ	半欠
				②	厚7.1		10	5	青に白色	ガラス	〃	完形
				③	厚6.5		9.5	5	青に白色	ガラス	〃	完形
	管玉	5	6	①	8		3.2	1.2	淡緑色	緑色凝灰岩	〃	
				②	3.6		2.3	1	〃	〃		
				③	3.8		2.1	1	〃	〃		
				④	3.3		2	1	〃	〃		
				⑤	3.9		2.1	1	〃	〃		
K７	管玉	7	9	①	11.5		4	1.5	〃	〃	中期前半	
				②	12		4	1.5	〃	〃		



第33図　S16箱式石棺墓及び副葬品

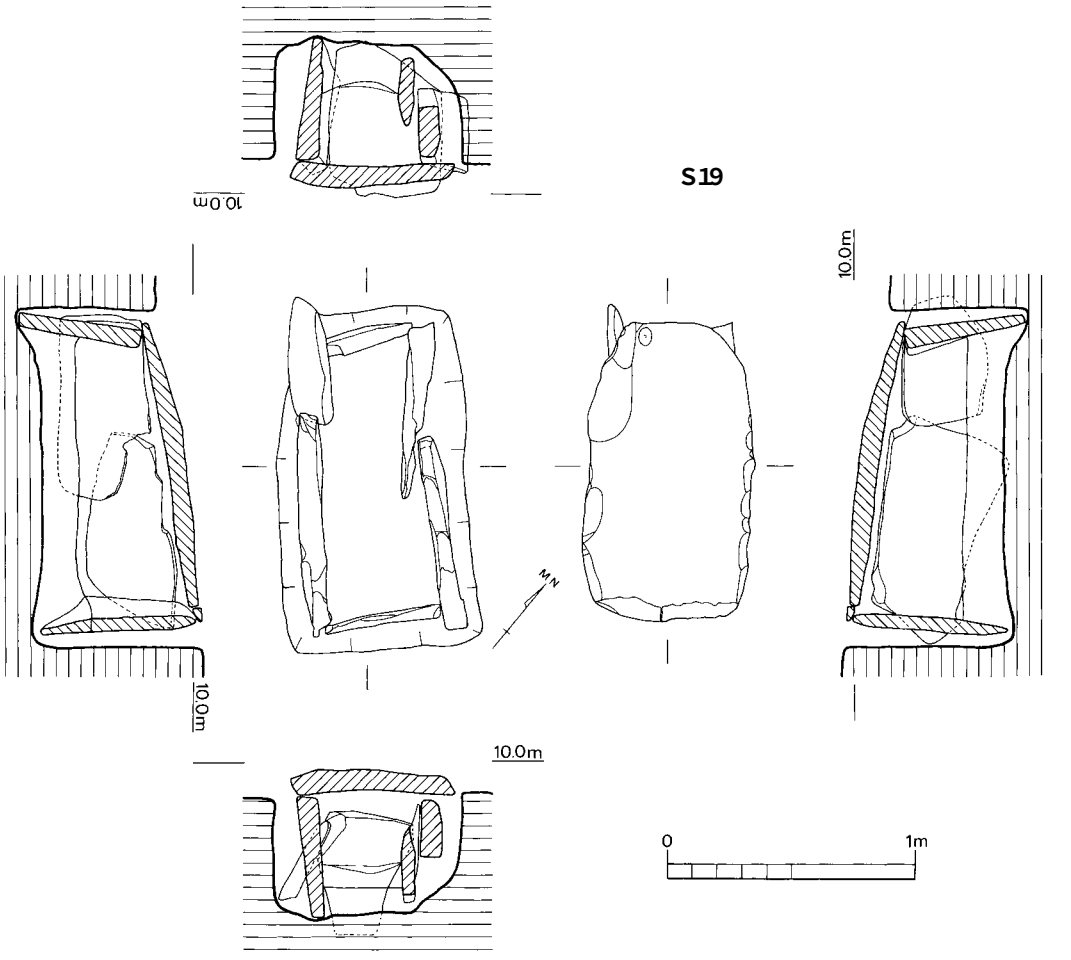




第34図　S17,18箱式石棺墓

第７表　副葬品観察表②

号数	品名	数量	図番号	個別号数	法量				色調	材質	甕棺時期	備考
					長さ	幅	直径	孔直径				
K７	管玉		9	③	7		3	1	淡緑色	緑色凝灰岩		
				④	6.2		3	1	〃	〃		
				⑤	6.1		3	1	〃	〃		
				⑥	5		2.8	1	〃	〃		
				⑦	4.5		2.5	1	〃	〃		
K18	銅剣	1	12		17.6	3.6				青銅	大原Ⅱｂ	中国戦国式
	管玉	1			5.5		2.9	1.1	淡灰緑色	緑色凝灰岩		
K23	ヤリガンナ	1	14		19					鉄	大原Ⅲ	
	刀子	1			13	1.5				鉄		一部毀損
K40	管玉	1	17		5.5		3.9	2	淡灰緑色	緑色凝灰岩	中期初	
K41	管玉	3	17	①	5.9		3.4	2	淡灰緑色	緑色凝灰岩	大原Ｉｂ	
				②	7		3.4	2.1		〃		
				③	6.8		3.4	1.5		〃		
K42	管玉	9	18	①	9.5		5	2	淡灰緑色	〃		
				②	10		5	2.1		〃		一部欠損
				③	7		4.8	1.5	濃緑色	碧玉		
				④	7.1		3.8	1.1	〃	〃		
				⑤	6		3.5	1.1	淡灰緑色	緑色凝灰岩		一部欠損
				⑥	6.5		3	1.6	〃	〃		〃
				⑦	6.5		3.1	1.2	〃	〃		〃
				⑧	5		3.9	1.5	〃	〃		〃
				⑨	4.2		3	1.5	〃	〃		
K43	ガラス小玉	1	19				2.5	0.8	青	ガラス	大原Ｉｂ	
K44	管玉	2	20	①	8		4	1.1	淡灰緑色	緑色凝灰岩		一部欠損
				②	6.5		2.8	1				〃
K45	臼玉	2	20	①	厚　3		6.5	1.1	青緑色	アマゾナイト	大原１ｃ	
				②	厚　2		5.5	1.1	〃	アマゾナイト	〃	



第35図　S19箱式石棺墓

３．副　葬　品

昭和49年の大原地区の調査では甕棺14基，５基の箱式石棺から副葬品が出土した。甕棺は43基検出されているからその出土率は32.6%であり，箱式石棺は18基中27.8%の比率となる。

その内容については第７表－８表に記しているが，甕棺の場合，単棺から２例，３重棺が１例，残りの11例が合わせ甕棺からの出土となっている。以後特に副葬品である管玉の石材については，淡灰緑色のものを緑色凝灰岩と呼び，その中でも特に緑が濃いものを碧玉と呼ぶ。

ここでは主な副葬品について副葬された甕棺の特徴の古い時期から概略を述べておきたい。

K41とK43が同じ大原Ⅰｂ期（前期後半）に属している。K41からは管玉が３個出土している。何れも淡灰緑色の緑色凝灰岩製である（第17図）。K43からはガラス製小玉が１個出土している。直径2.5㎜と小さいが，弥生時代のガラス製小玉としては最も古い時期に属する（第19図）。

大原Ⅰｃ期（前期末）に属するK45からは臼玉が２個出土し，K47からは管玉１個が出土した。臼玉は色調から見てアマゾナイト（天河石）製と思われる（第20図）。管玉は淡灰緑色の緑色凝灰岩製であるが，一部欠損している（第22図）。

大原Ⅱａ（中期初頭）期に属するＫ２からはトンボ玉１個，勾玉１個，管玉14個が，Ｋ３からはトンボ玉３個と管玉５個が出土した。またK40からは管玉が１個出土している。Ｋ２は中型の合口甕棺である。トンボ玉は完形のガラス製で，群青色の下地にトンボの目玉模様の白模様が嵌入する。勾玉は色調から見てアマゾナイト（天河石）製と思われる。完形である。管玉は何れも淡灰緑色の緑色凝灰岩製で，長さは８㎜を越す中型のものと３・４㎜程度の小型のものがある（第７図）。単棺の壺であるＫ３出土の３個のトンボ玉はＫ２出土例と大きさ，色調共に酷似するがこの内１個は半欠資料である（第６図）。K40の管玉は淡灰緑色の緑色凝灰岩製で長さ５㎜である（第17図）。

大原Ⅱｂ期（中期前半古段階）に属するものとしてＫ７，K18，K50がある。Ｋ７からは緑色凝灰岩製の管玉が７個出土している。最長12㎜，最小５㎜である。色調は何れも淡灰緑色を呈している。K18からは銅剣と管玉が１個ずつ出土した（第12図）。銅剣は切先部で現存長12.8㎝，最大幅3.6㎝，最厚部は0.6㎝を測る。腐食が進行し，刃部に破損が目立つ。刃部両側の内側に稜を持つ所謂中国戦国式剣の特徴を持つ。ただ作りが雑であり，韓国上林寺出土の銅剣と同じく仿製の可能性がある。管玉は小型で緑色凝灰岩製である。K50からは管玉４個と不明鉄製品が出土した（第24図）。管玉は比較的大型のタイプで色調は淡灰緑色である。鉄製品は長さ14㎝，幅４㎝の鍛鉄製の資料である。腐食がひどい。

大原Ⅱｃ期（中期前半新段階）に属する資料としてK42とK44があげられる。K42からは７個の緑色凝灰岩製管玉と２個の碧玉製管玉が出土している。比較的粒の揃った資料であるが，９個中５個が欠損品である（第18図）。K44出土の緑色凝灰岩製管玉も２個とも一部欠損が見られる（第20図）。

大原Ⅲ期（中期中頃～末）としてはK23の３重棺がある。K23は壺と小型甕２個を連結したもので，下甕にあたる壺から鉄製鉇と鉄製刀子がそれぞれ１本ずつ出土している（第14図）。鉇毀損しているが，長さ19㎝，幅1.9㎝，刀子は長さ13㎝，幅1.4㎝を測る。壺には胴部上半部に２頭の鯨と１艘の船が線刻で描かれている。特に１頭の鯨には数本の鉾らしきものが突き刺さっており，捕鯨の瞬間を表現したものかも知れない（第14図，カラー図版３）。原の辻遺跡からは鯨の骨そのものや骨角製の漁

労具も多く出土している。鉄製の鉇や刀子は大型海獣などを捕獲するための漁労具を作るための工具とも推定され，漁労などに携わった人物の墳墓の可能性がある。

以上が甕棺から出土した副葬品であり，Ⅰb期からⅢ期，すなわち弥生前期後半から中期後半までの資料が含まれる。この中で天河石製の資料は何れも前期末から中期初頭の間に集約される。

原の辻遺跡からは細型銅剣や多紐細文鏡など韓半島からの初期の渡来品も多く，それらの遺物と共に将来したものであろう。

箱式石棺からは管玉と丸玉が出土している。S２からは管玉３個が出土した。色調は淡灰緑色のもの１個と濃緑色のものが２個で，石材は前者が緑色凝灰岩，後者は碧玉と思われる（第27図）。S６からは管玉３個と丸玉１個が出土している。管玉は２個が緑色凝灰岩で１個は碧玉である。丸玉はヒスイで半欠製品である（第28図）。S11からは緑色凝灰岩製の管玉が１個出土している。S14からは管玉４個と勾玉１個が出土した。管玉は何れも淡灰緑色の緑色凝灰岩で，勾玉はヒスイと思われる（第32図）。

S16からは３個の管玉が出土している。何れも淡灰緑色の緑色凝灰岩であるが，内２個は一部欠損している（第33図）。

以上が箱式石棺からの出土副葬品であるが，土器が出土していないためその正確な時期は不明である。ただ，箱式石棺と甕棺の斬り合いはなく，且つ埋葬方位もほぼ同じであること，甕棺と同じ墓域を形成していること，副葬品の種類が甕棺と共通する事など総合的に考慮すると，副葬品は時期的には甕棺と同じ弥生前期末頃から中葉末までに比定できよう。

第８表　副葬品観察表③

号数	品名	数量	図番号	個別号数	法量				色調	材質	甕棺時期	備考
					長さ	幅	直径	孔直径				
K47	管玉	1	22		6.2		5	3	淡灰緑色	緑色凝灰岩	大原Ⅰc	一部欠損
K48	管玉	3	22	①	10		4	2	〃	〃		
				②					〃	〃		
				③	7		3.5	2	〃	〃		
K50	管玉	4	24	①	11		3.1	1.5	〃	〃	大原Ⅱb	
				②	9		4	2	〃	〃		
				③	10		3.9	1.2	〃	〃		
				④	8.5		3.5	1.2	〃	〃		
	鉄製品	1			14	4				鍛鉄		錆が進行

箱式石棺内副葬品一覧

号数	品名	数量	図番号	個別号数	法量				色調	材料	甕棺時期	備考
					長さ	幅	直径	孔直径				
S２	管玉	3	27	①	10		4	2	淡灰緑色	緑色凝灰岩		一部欠損
				②	6		3	1.2	濃緑色	碧玉		
				③	4		3.8		〃	〃		
S６	管玉	3	28	①	14		5.5	2.2	淡灰緑色	緑色凝灰岩		半裁
				②	11.5		4.5	2	濃緑色	碧玉		一部欠損
				③	6		4	2	淡灰緑色	緑色凝灰岩		
	丸玉	1	28				12	6	緑色	ヒスイ		
S11	管玉	1	30		10		4.5	2	淡灰緑色	緑色凝灰岩		
S14	管玉	4	32	①	16		4.5	2	〃	〃		一部欠損
				②	10.5		5	2.5	〃	〃		
				③	9		5	2	〃	〃		
				④	9		5	2.5	〃	〃		
	勾玉	1	32									
S16	管玉	3	33	①	10.5		4.5	2	淡灰緑色	緑色凝灰岩		
				②	9		3.5	2	〃	〃		一部欠損
				③	8		4	1.9	〃	〃		一部欠損

第９表　箱式石棺墓一覧表

番号	遺構番号	蓋石	側壁	小口	長径	短径	深さ	長短比	法量計	方位	副葬品	備考
1	１号石棺墓	３枚の板石を使用	両側辺ともに２枚の板石を使用する。	北西側小口は片側が側壁の外に出て，南東側は側壁との隙間を小さな板石で塞いでいる。	106	40	26	2.65	110,240	N-50°-E		
2	２号石棺墓	５枚の板石を使用する。中央は穴があく。	両側辺ともに２枚の板石を使用する。	両小口ともに側壁に挟まれている。	117	40	26	2.93	121,680	N-42°-E	管玉３	
3	３号石棺墓	不明。	抜き痕のみ残存する。	抜き痕のみ残存する。	127	48	－	2.65		N-27°-E		石棺材の抜き後のみ
4	４号石棺墓											不明
5	５号石棺墓	不明。	北側壁が１枚，南側壁が２枚の板石を使用する。	西側小口は片側が側壁の外に出て，東側は両側壁に挟まれている。	66	32	23	2.06	48,576	N-22°-E		蓋材欠損
6	６号石棺墓	主に５枚の板石が使用されるが，その隙間を小板石で塞いでいる。	両側壁ともに主に１枚の板石が使用されるが，南側壁は若干短いため小板石を継いでいる。	西側小口は側壁に挟まれ，東側小口は側壁の外側に出る。	118	55	37	2.15	240,130	N-30°-E	管玉３，丸玉１	床面不明
7	７号石棺墓	主に２枚の厚い板石を使用する。	南側壁が３枚，北側壁が２枚で，重なり合う部分がないため南側壁の真ん中の板石が倒壊している。	西側小口は側壁に挟まれ，東側小口は側壁の外側に出る。また，東小口の片側では板石の倒壊を防ぐためくさび状の小石を組んでいる。	138	46	27.5	3.00	174,570	N-29°-E		
8	８号石棺墓	不明。	南側壁の一部のみ残存する。	西小口のみ残存し，側壁の外側に出る。	112	55	45	2.04	277,200	N-31°-E		攪乱あり
9	９号石棺墓	約１ｍほどの厚手の板石が１枚使用される。	北側壁は１枚，南側壁は板石の大きさからすると２枚使用されていたと見られるが，　１枚しか残存しない。棺内に板石が散在しており，側壁片の可能性もある。	西小口のみ残存し，側壁に挟まれる形態である。	96	44	27.5	2.18	116,160	N-39°-E		北西小口欠損
10	10号石棺墓	主に３枚の板石を使用し，隙間を２枚の板石で塞いでいる。	北側壁が１枚見られるが，その他は不明。	不明	100＋α	40	35			N-25°-E		石蓋土壙墓か
11	11号石棺墓	約70～80㎝ほどの厚手の板石が２枚使用される。北側壁との間の隙間には，蓋が沈まないように側辺に直角な方向に板石を入れる。	両側辺ともに２枚の板石を使用する。	両小口ともに側壁に挟まれている。	135	32	40	4.22	172,800	N-30°-E	管玉１	
12	12号石棺墓	約80㎝ほどの板石を１枚使用する。	なし	両小口ともに１枚の板石が使用される。	80	43	27	1.86	92,880	N-26°-E		
13	13号石棺墓	おそらく1.3mほどの１枚の板石が使用されていたが，両小口側を中心として上からの圧力で破砕したと思われる。	両側辺ともに２枚の比較的薄い板石を使用する。	東小口の一端が外に出る形状で，西小口は側壁に挟まれる。	111	35	30	3.17	116,550	N-33°-E		
14	14号石棺墓	約1.5mの板石を使用し，北側の小口部分にさらに板石をのせている。	西側壁２枚，東側壁３枚の比較的薄い板石を使用する。東側壁は内側に傾いている。	両小口ともに側壁に挟まれている形態であり，北小口は内側に倒れている。	148	34	36.5	4.35	183,668	N-33°-E	勾玉１，管玉４	
15	15号石棺墓	３枚の板石を使用する。中央の板石は，その下の石の隙間を塞ぐために乗せられたものか。	両側辺ともに２枚の比較的厚い板石を使用する。	両小口ともに側壁に挟まれている。	136	48	32.5	2.83	212,160	N-29°-E		
16	16号石棺墓	主に２枚の厚い板石を使用し，小板石で隙間を塞いでいる。	両側辺ともに２枚の比較的薄い板石を使用する。	両小口ともに側壁に挟まれている。東小口との間はくさび状の小板石を組んでいる。	124	50	40	2.48	248,000	N-26°-E		
17	17号石棺墓	約１ｍの板石を使用し，北側の小口部分にさらに板石をのせている。	なし	なし	136	48	25	2.83	163,200	N-27°-E		石蓋土壙墓
18	18号石棺墓	不明。	北小口の板石１枚が残る。その他は不明。抜き痕は北東側側辺に確認される。	不明。北西小口に抜き痕が残る。	128	62	17	2.06	134,912	N-35°-E	土器	
19	19号石棺墓	約1.2mほどの厚手の板石が１枚使用される。	両側辺ともに２枚の比較的厚い板石を使用する。	両小口ともに片側が側壁と隅をあわせる形態であり，一方は側壁の内側に入る。	114	44	33.5	2.59	168,036	N-50°-E		

４．小　　結

①石田大原墓域甕棺の時期的特徴について

今回，報告した甕棺について時期的変遷と時期別の特徴についてまとめることとした。

甕棺の観察の結果，この調査区に墓地が構成され始めたのは弥生時代前期後葉（大原Ⅰｂ期）の時期である。これに該当する甕棺はK43とK41である。K43は壺の形状的特徴を残すものの，肩部に段を持たないことと肩部に２条の沈線を有する特徴から大原Ⅰｂ期と判断した。現段階では，このK43と原地区の丘陵部で検出された甕棺が原の辻遺跡でもっとも古い段階の甕棺で，橋口編年のＫⅠａ式に該当する壺の形状をした甕棺はまだ検出されていない。K41は頚部がすぼまらず，口縁部は如意輪状に開き，形状も壺というより甕の形状に近い。口縁部には粘土を貼り付け，器壁を厚くしている。同甕棺の蓋には鉢型甕が用いられ，如意輪状の口縁部に断面三角形状の粘土帯を貼り付けているのと胴部が張っているのが特徴である。

続く大原Ⅰｃ期はK43とK41に付随する形で列埋葬状に墓地を構成している。この時期に該当する甕棺はK47，K45，K44，K46，K32，K48である。K46の下甕は壺の形状を残すものの，上甕の形状から大原Ⅰｃ期に分類した。上甕は垂直に近い口縁部の外側に断面三角形状の粘土帯を貼り付け，未発達のＬ字状を形成している。K45の下甕は口縁部上端に粘土を貼り付け，分厚くしている。上甕は鉢型甕を用い，口縁部はすぼまらず「ハ」の字状に開く如意輪状を呈す。胴部もK41の上甕に比べ，張りが弱い。K32の両甕とも口縁部は如意輪状に開くが粘土は貼り付けられていない。

大原Ⅱａ期にはＫ２，K14の成人棺が出現する。小児棺ではＫ３の壺の形状のものとＫ１，Ｋ５，K49の甕の形状のものが出現する。Ｋ２の下甕は内反する口縁部に断面長方形状の分厚い粘土帯を貼り付けたＬ字状を呈す。器壁も分厚くつくられている。K14もＫ２と同形状であるが，口縁部先端に刻目を持つのが特徴である。Ｋ１は口縁部に粘土帯を貼り付けて，Ｌ字状を呈し，胴部はさらに張り出す。底部は「ハ」の字状に広がらす，直立状となるが，上げ底は残る。K49は，発達した「Ｌ」字状の口縁部を呈し，胴部は張りがある。器壁は厚めで，底部は直立状の上げ底が残る。

大原Ⅱｂ期は成人棺のＫ７，K18，K50が，小児棺は壺を用いたK27と甕を用いたＫ４が該当する。Ｋ７は先端部が丸みを帯びた「Ｌ」字状を呈し，胴部の張りが弱くなる。器壁もⅡａ期に比べ薄くなっているのが特徴である。K50の口縁部はⅡａ期の形状を継承するが，「Ｌ」字状の内側に粘土を貼り付け「Ｔ」字状をなす。K27はＫ３と比べ，底部の器壁が薄いのが特徴である。Ｋ４はＬ字状の口縁部を継承するが，底部は上げ底から平底になっているのと器壁が薄くなるのが特徴である。

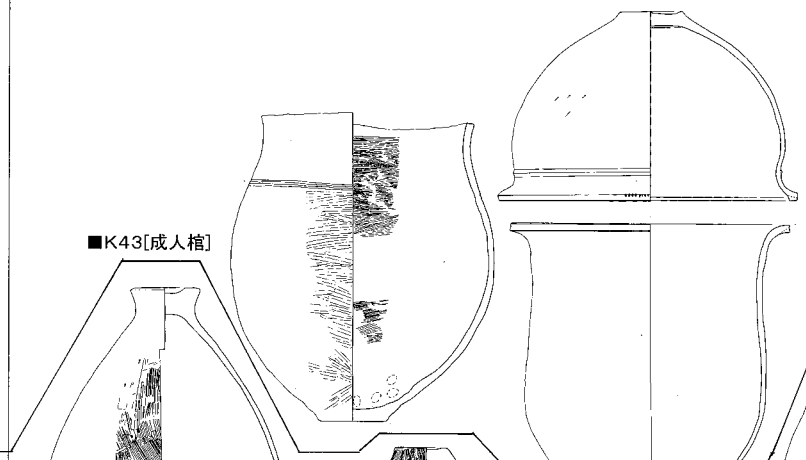
大原Ⅱｃ期は成人棺が姿を消す。この時期を境に成人は甕棺墓埋葬から石棺墓埋葬へと移行する。この小児棺は壺を用いるK10と甕を用いるK17，K20，K24が該当する。K10は壺を下甕に用いているが，口縁部は打ち欠いている。K17の口縁部はＬ字状を呈すが，

	対応時期	橋口編年	大原墓域編年
前期	前期後葉	ＫⅠａ式	該当なし
	前期後葉	ＫⅠｂ式	大原Ⅰｂ期
	前期末	ＫⅠｃ式	大原Ⅰｃ期
中期	中期初頭	ＫⅡａ式	大原Ⅱａ期
	中期前葉	ＫⅡｂ式	大原Ⅱｂ期
	中期前葉	ＫⅡｃ式	大原Ⅱｃ期
	中期中葉～中期末	ＫⅢａ式 ＫⅢｂ式 ＫⅢｃ式	大原Ⅲ期
後期	後期前葉～後期中葉	ＫⅣａ式 ＫⅣｂ式 ＫⅣｃ式	大原Ⅳ期
	後期中葉～後期末	ＫⅤａ式 ＫⅤｂ式 ＫⅤｃ式 ＫⅤｄ式 （ＫⅤｅ式） ＫⅤｆ式	大原Ⅴ期

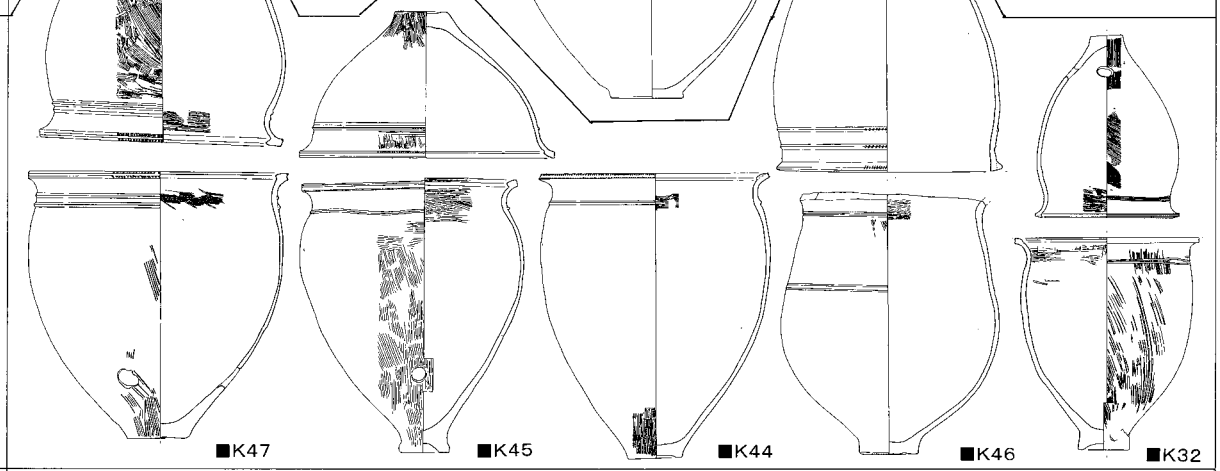
第10表　大原地区における甕棺の時期区分一覧

出土甕棺

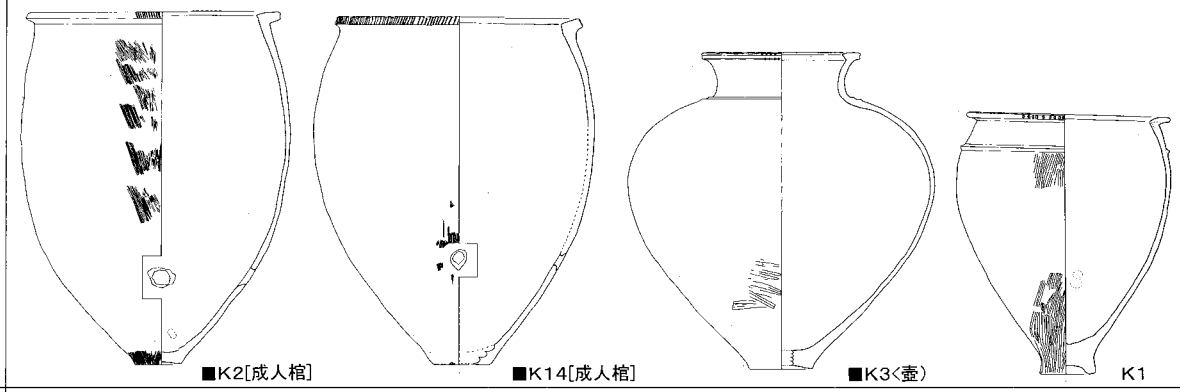
大原Ⅰb期（前期後葉）



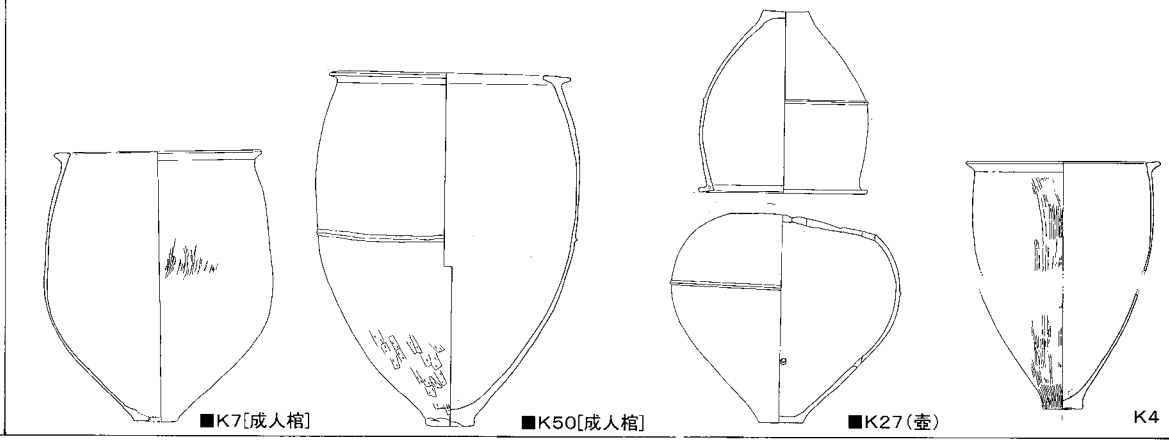
大原Ⅰc期（前期末）



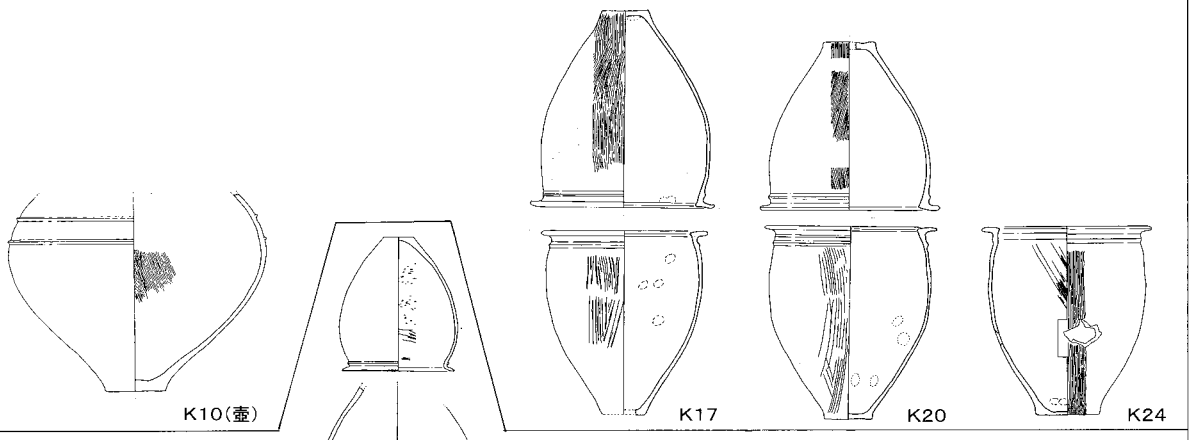
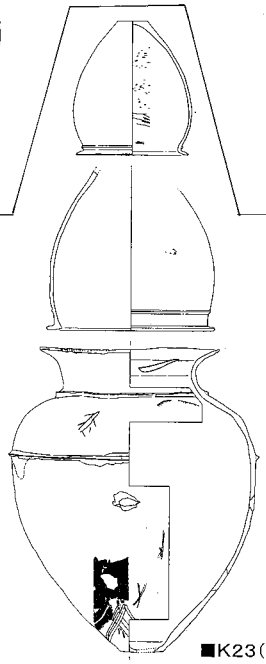
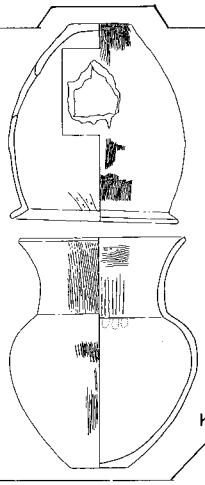
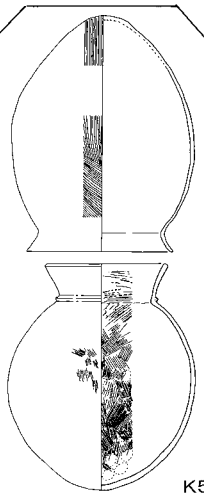
大原Ⅱa期（中期初頭）



大原Ⅱb期（中期前葉）



第36図　石田大原墓域甕棺編年①

	出土甕棺
大原Ⅱc期（中期前葉）	
大原Ⅲ期（中期中葉～末）	
大原Ⅳ期（後期前葉～中葉）	
大原Ⅴ期（後期中葉～末）	

第37図　石田大原墓域甕棺編年②

内側に傾斜する。また胴部から底部にかけて器壁の厚みがほとんど変わらないのが特徴である。K20とK24もK17と同様の特徴を持つ。

大原Ⅲ期になるとほとんど甕棺は検出されなくなる。検出されたK23は，調査区の南側に位置し，大原墓域で唯一の三連甕棺である。甕（上甕）＋甕（中甕）＋壺（下甕）の組み合わせで，中甕は底部を打ち欠いて繋いでいる。上甕は胴部がやや張るものの，口縁部は「く」の字状の形状となる。下甕の壺はやや広口形で胴部から口縁部にかけて段を持たず丸く立ち上がる。また大原墓域で唯一，甕棺K24と重複してつくられているのも特徴である。

大原Ⅳ期にはK31がK23の北側約2.5mの位置に突発的に出現する。K31は上甕に甕，下甕に壺を用いた合わせ口式である。上甕の口縁部は屈曲部分が明確な「く」の字状の口縁部を持つのが特徴である。下甕は壺で，広口形で胴部から口縁部にかけては不明瞭であるが段を有し，口縁部が長く「ハ」の字状に開くのが特徴である。

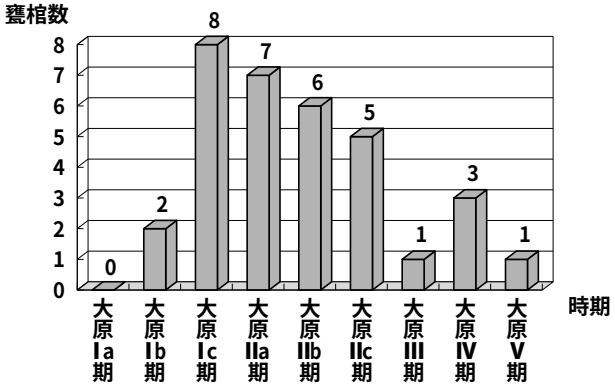
大原Ⅴ期にもK52が石棺墓群に隣接して突発的に出現する。K52の上甕は「く」の字状の口縁部を持ち，底部が丸底である。下甕も胴部から口縁部にかけて明確な段を有し，「ハ」の字状に直立する。底部も丸底の形状を呈す。この時期をもってこの調査区における甕棺墓の終焉となる。

【昭和49年発掘調査大原墓域甕棺の時期的変遷について】

大原墓域における本調査区から検出された甕棺の時期を区分すると以下のグラフのようになる（ただし，時期を区分することが難しい破片資料は除く）。甕棺墓の出現は大原Ⅰｂ期に始まり，大原Ⅴ期まで継続して甕棺墓は形成される。甕棺墓が墓地構成の中で最も用いられた時期は大原Ⅰｃ期である。甕棺数の変移から大原墓域において甕棺墓が積極的に墓地構成の中に用いられた時期は大原Ⅰｂ期から大原Ⅱｃ期に集中し，甕棺墓で墓域を構成する時期は弥生時代前期後葉から弥生時代中期中葉までが主な時期である。この時期は，成人は甕棺と石棺を併用し，小児は甕棺を用いている。原の辻遺跡で検出されている成人甕棺の約９割がこの大原墓域に集中しているのも特徴である。甕棺数の変移には，大原墓域の墓地を構成する種類が甕棺墓から石棺墓へと移行する時期と大川地区に墓域が形成され始める時期と密接に関係がある。大原Ⅲ期以降は甕棺墓の形成は続くものの，成人に加え小児も石棺墓に埋葬される形態となり，単独もしくは石棺墓群に付随する甕棺に限られる。

墓地を構成する中で，特別的存在もしくは石棺墓に埋葬された人物に関係の深い小児のみを埋葬するのに甕棺墓が用いられた。この変移からも全時期を通じて，大原墓域が原の辻集落において重要視されていたことが継続してつくられた甕棺から窺える。

第38図　石田大原墓域における甕棺数の変遷



②石田大原墓域における遺構の概観

最初にこの墓域に登場するのは，Ｂ－２区を中心として大原Ⅰｂ期（弥生時代前期後葉）のK43，41の甕棺である。それぞれにS14，15石棺が併設されるが，左右交互に構築される。それから南東方向へ大原１ｃ期（弥生時代終末）のK42，44，45が列埋葬される。ほぼ同じ時期に１ｍ程西側にK47や，列の方向に直交するようなK46がある。それほど列埋葬の規制力はな

いとみえて，次の時期大原Ⅱａ期（弥生時代中期初頭）のＫ２は，さらにK47の北西にある。なお，このエリアの石棺は，ほぼ甕棺と同時期ではないかと推察される。それから南東方向へ２号溝を超えて，大原１ｃ期のK48，Ｋ１が埋置されていく。やはり問題となるのは１～３号溝がいつの時期に掘削されたかであるが，先に遺構の所でも触れたように，溝内からの出土遺物でみれば，例えば１号溝は，最初弥生時代中期中葉頃に掘削されたものが，後期中葉頃に再掘削されたのではないかと推測したが，甕棺の埋置と溝の位置関係を整理してみると，溝の掘削時期についてはもう少し検討が必要なようである。まず，２号溝であるが，列埋葬の南端K45とＳ17との間に１ｍ程の空白地帯があるのが注目される。この空白地帯には甕棺または，石棺等の抜き取り跡等も確認されていないので，元々ここは空白地帯として空いていたと考えられる。２号溝も，もしそこに列埋葬があれば，あえてそれを壊してまで溝を掘ったとは考えにくいのではないだろうか。この２号溝南に埋置されるK48は，列埋葬の軸線に揃えている。そして，あたかも２号溝が掘られることを予測していたかのように，K45と離して埋置している。その後Ｋ７が埋置されるが，このＫ７の軸線と１号溝のそれが揃っているのは注目される。とりあえずここではＫ７を埋置したときに北側に２号溝，西に１号溝を掘削したと考えたい。東には既にK48や，Ｋ１が所在していたものであろう。３号溝はその後に掘削されたとしたい。２号石棺は３号石棺と並んでいる。

Ａ－２，３区に所在する石棺群は，細かな時期の決め手になるような副葬品はない。列埋葬に近いものはそれに軸線を揃えている。調査区西半部のＣ～Ｆ－２～４区に所在する甕棺と小児甕棺のグループは，２号溝に近いＫ３の中期初頭をはじめとして後期中葉のものまで認められる。最後に２号溝が埋まりその上に弥生時代後期末のK52が埋置される。

環濠集落と墓地との関係

原の辻遺跡では，墓地は基本的に環濠集落の外につくられる。図でも分かるように，一番古いのは今回の報告となった石田大原墓地域である。環濠の中心からすると南東方向になる。その更に東南には大川墓地がある。南に行くと原の久保Ａ地区があり，更にその南に原の久保Ｂ地区がある。南西には原の久保Ｃ地区がある。西側には，鶴田遺跡が所在する。

ところで，今回の石田大原墓域では，N60°Wの方位で列埋葬が行われているが，この軸線を延ばしていくと環濠集落内高元地区へと向かっていく。この高元地区では，住居跡近くの貯蔵穴から弥生時代前期末の土器が出土して，この場所に石田大原の墓地域に葬られた人の住居が存在した可能性もある。また，墓地域でそうであったように，この場所ないしはここより南には，中期から後期の住居が形成されている。

石田大原墓域概観

先に遺構の所でも触れたように，溝からの出土遺物だけでなく，甕棺の埋置と溝の位置関係を整理してみると，弥生時代前期末以降，列埋葬の流れの中で溝が掘削された事が考えられ，Ｋ７の甕棺を溝等で囲まれたこのエリアの埋葬主体ではないかと推測した。Ｋ７の甕棺の所属時期は弥生時代中期前葉の須玖Ⅰ式の時期であるが，この時期には環濠が掘られ，船着き場も築造された時期にあたる（宮崎2001）。当然その当時の社会状況を墓地は反映していると考えられ，「現世で自他を明確に区別するものとして働いていた溝が，彼岸の世界でも同様に，自他を区別するものとして機能しているのである」（水野1986）。それにしても，環濠の掘削，船着き場の築造は大規模土木工事であり，特に船着き場の建設に関しては大陸からの土木技術の導入及び多人数の労力と統率力なくしては成し遂げられな

かったであろう。そうした力がある人物の墓地としての条件をこのＫ７が満たしているかどうかは今ひとつ不明としか言えない。また，溝で区画し，隔絶性を示すところから「区画墓」（吉留1989）としての性格を考慮する必要性があると思われる（中村2005）(註1)

環濠集落と墓地との関係

原の辻遺跡では，墓地は基本的に環濠集落の外につくられる。一番古いのは今回の報告となった石田大原墓地域であるが，第39図でも分かるように環濠の中心からすると南東方向になる。その更に東南には大川地区がある。南に行くと原の久保Ａ地区があり，更にその南に原の久保Ｂ地区がある。南西には原の久保Ｃ地区がある。西側には，鶴田遺跡が所在する。

ところで，今回の石田大原墓域では，Ｎ60°Ｗの方位で列埋葬が行われているが，この軸線を延ばしていくと環濠集落内高元地区へと向かっていく。この高元地区では，住居跡近くの貯蔵穴から弥生時代前期末の土器が出土していて，この場所に石田大原の墓地域に葬られた人の住居が存在した可能性があり，今後住居域と墓地域との関連等も考慮しながら進めることが不可欠であろう（第40図）。

石田大原墓域の地域的特性と「捕鯨線刻」土器

石田大原墓域の地域的な特性は，西北九州の玄界灘沿岸域の範囲に含まれる（藤尾1989）。ところで，この西北九州玄界灘沿岸域は，縄文時代早期末頃より捕鯨を生業としてきた地域であり(註2)，近世の「鯨組」等による捕鯨が盛んだった地域ともオーバーラップする地域でもある。ここでは，「捕鯨線刻土器」をその当時の社会状況を表す絵画資料として読み解くこととし，ここでは「捕鯨」をその程度は不明であるが，社会的に浸透したものとして考えたい(註3)。ただ，当然ながらその当時の人々は鯨のみを扱ったのではなく，他の海洋資源を含めた漁労や航海術を含む海洋民としての生活の中での季節的な「一コマ」であった事は認識しておかなければならない(註4)。

【引用・参考文献】

宮崎貴夫2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第４号

水野正好1986「死者と生者の織りなす古代」金関恕（編）『宇宙への祈り』日本古代史３

中尾篤史2003「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集長崎県教育委員会

吉留秀敏1989「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓－北部九州における弥生時代区画墓の一例」『九州考古学』第63号

中村大介2005「方形周溝墓の系譜とその社会」『墓制から弥生社会を考える』近畿弥生の会発表要旨集

藤尾慎一郎1989「九州の甕棺－弥生時代甕棺墓の分布とその変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告第21集』坪井洋文教授追悼号

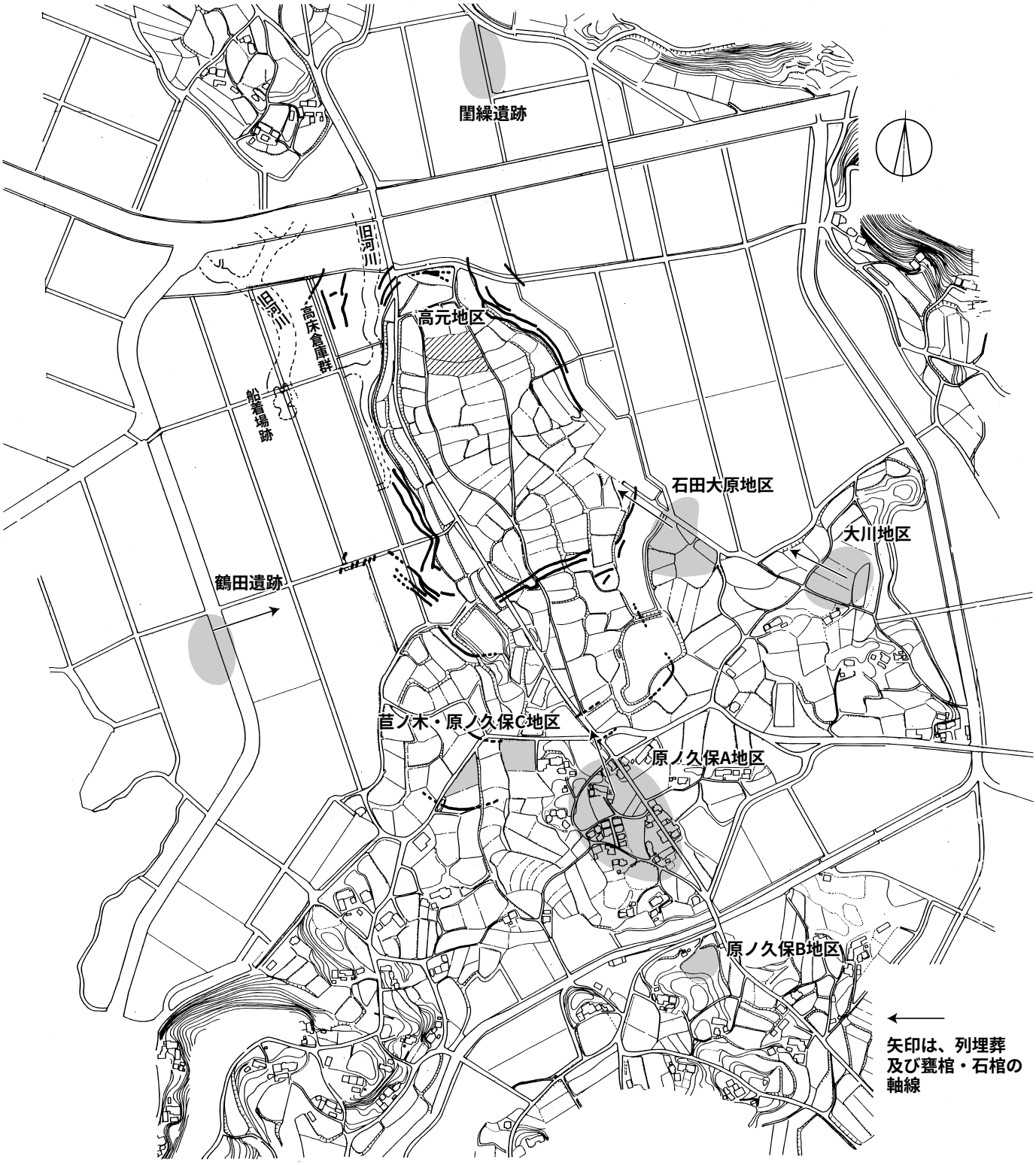
註１　（中村大介2005）の文献で，九州では区画墓，畿内では方形周溝墓が地域性をもって存在すると述べている。

註２　平戸瀬戸に望む平戸市田平町つぐめのはな遺跡では，縄文時代早期末から前期前半の土器と共に石銛及び解体に使用したと考えられるスクレーパが出土しており，鯨骨も一緒に存在することから鯨を捕獲したことが考えられている。他にもこの西北九州沿岸域には，同様の石器を出土する遺跡が多い。

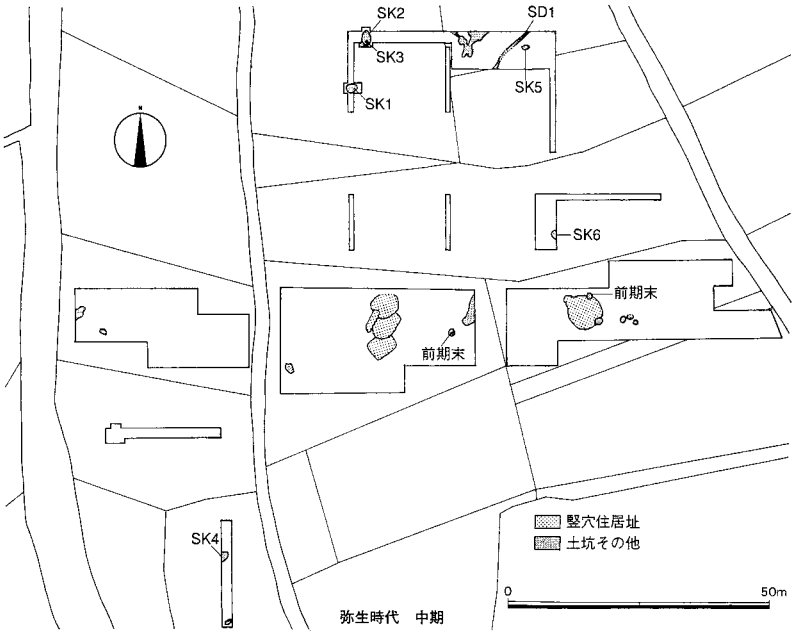
註３　これまで出土した全国の甕棺の線刻としては「鹿」等が描かれており「捕鯨線刻土器」は珍しい。しかし，西北九州沿岸域では先にも述べたように縄文時代早期末から行われていた可能性があり，特にこの地域の歴史からみれば特異なことではない。ただ，海に生産基盤を置くこの地域の文化の解明の為の「海の視点からの考古学」の研究が進んでいるかというと，未開拓の分野であり，こらからの研究の進展によって，その様相がわかってくるであろう。

註４　橘昌信「西北九州における縄文時代の石器研究」２『史学論叢』10号1979によると，ハエ崎の古老からの聞き取りとして，「ハエ崎（つぐめのはな遺跡の北に隣接する）の海岸にはタマリ小屋（鯨納屋）

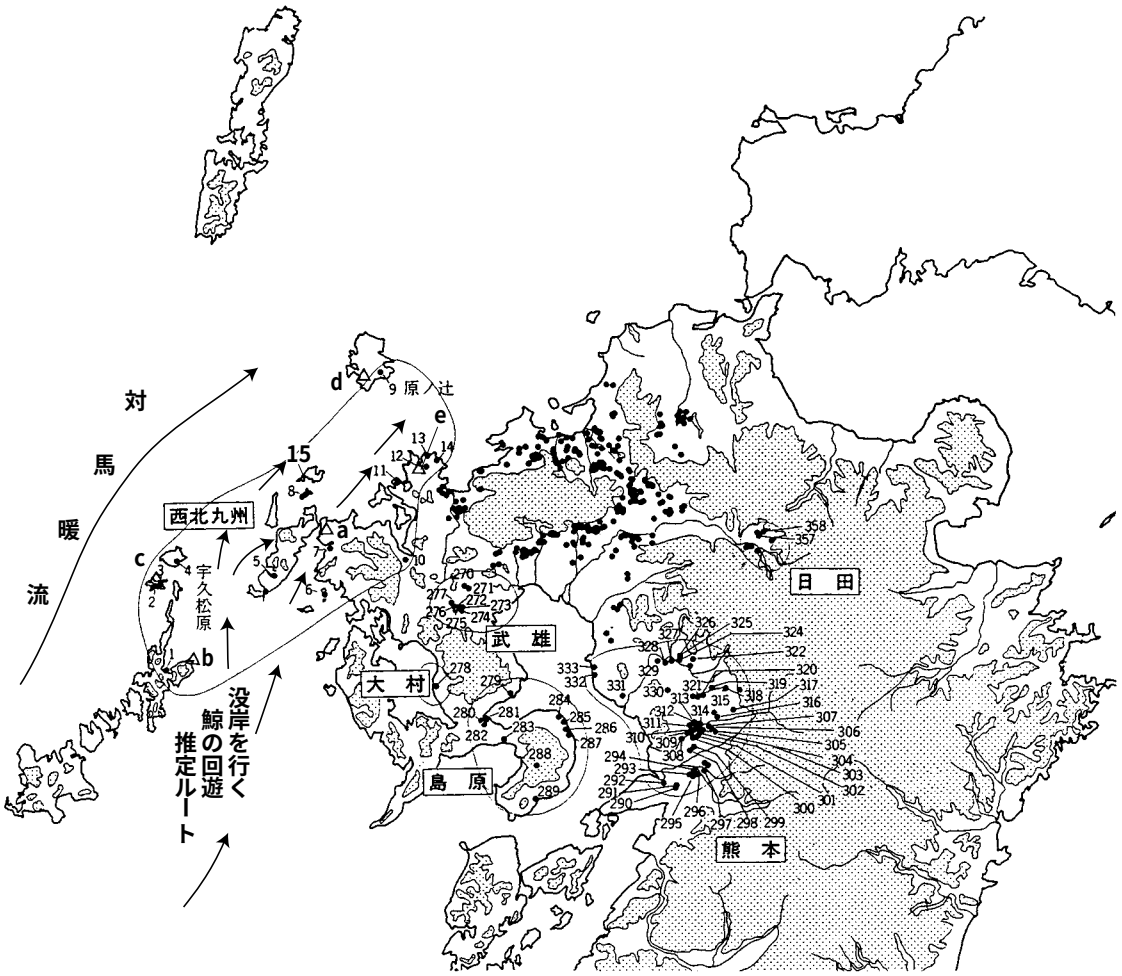
があったこと，崖上には小さな鯨見張り小屋があったこと，平戸島の中崎と平戸瀬戸の南入口の二カ所にもタマリがあって，この三カ所共同で，鯨を見張り，捕獲し，解体していたこと。四，五月はクジラ取りの季節で，鉄砲打ち，ハダシ（銛打ち），ノリコ（乗組員）がタマリに待機し，旗とノロシを合図に平戸瀬戸を南から回遊するナガスクジラとの格闘が始まった」と掲載している。



第39図　原の辻遺跡墓地配置図（太線は環濠）



第40図　高元地区時期別住居跡等検出状況



（弥生時代甕棺出土地●）1：浜郷　2；笛吹　3；殿寺　4；宇久松原　5；津吉　6；宮ノ本　7；大野台　8；度島中学校運動場　9；原の辻　10；橋本　11；押川　12；鳥の巣　13；大友　14；鼓　15；長畑馬場
（縄文時代石銛出土地△）a：つぐめのはな　b；頭ケ島白浜　c；殿崎　d；鎌崎　e；赤松海岸

第41図　西北九州地域における甕棺及び縄文時代石銛出土地（藤尾慎一郎1989）挿図に加筆

③石田大原地区検出の石棺墓について

石田大原地区から検出された石棺墓について若干の考察を加えてみる。

法量については，長径の平均が約120㎝と，縄文時代からの埋葬形態である屈葬から弥生時代後半でみられる伸展葬への過渡的な形態といえる。埋葬姿勢としては横臥屈葬（上半身は仰向けで体を伸ばし，下半身は膝を横に曲げた屈肢の形態）が予想される(註1)。ただ，長径のわりに深さが浅いことから，長径の極端に短い５号や12号などは小児棺の可能性が強い。

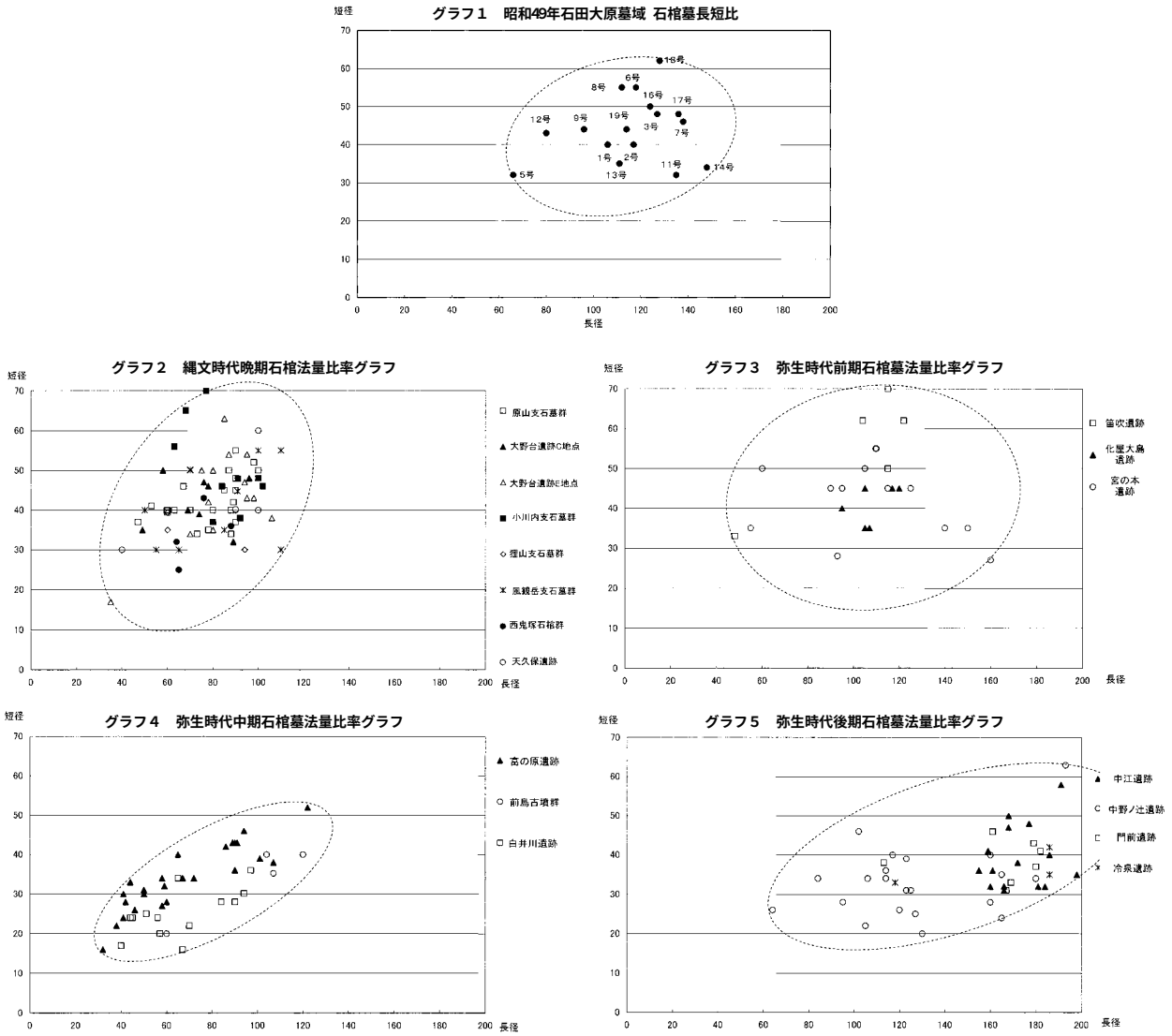
次に石の組み方であるが，小口を側壁で挟む形態が主であるが，小口の一方が側壁の外側に出るもの（１号・５号・６号・７号），小口と側壁の一端を隅で合わせるもの（19号）などが観察される。側石の棺材の枚数は２枚から３枚程度であり，その隅を重ね内側に倒壊しないような工夫を行っている。また，７号・16号では小口のずれをおさえるようなくさび状の小石材を挟み込んでいる。構築方法からは，前述するような若干の差はあるものの，ほぼ同様な工法で組み立てられており，同時期に形成されたと考えられる。

主軸の方位は，ほぼすべてが北西から南東へ軸をとり，列状の配置が営まれている。ただ，弥生時代中期以降にみられる「二列埋葬」とは異なり，ある一定の範囲に方向性を定めて埋置した結果，列状を呈したものとも考えられる。このような傾向は，福岡県前原市志摩町新町遺跡（弥生時代早期）の支石墓群（橋口1987）などでも見られ，列を意識するというよりも，墓域の中での統一的な秩序が成立していた現れとも考えられる(註2)。

最後に時期についてである。第41図のグラフは長崎県内の複数の石棺墓が検出された主要な遺跡の時期別法量比率グラフである。横軸を長径，縦軸を短径として，長短の比率を図化したものである。

縄文時代晩期（弥生時代早期）［グラフ２］の石棺の特徴としては，長崎県の本土部では支石墓の下部構造として石棺を構築することが多く，長径60～100㎝がピークとなり非常に短い形態である。弥生時代前期［グラフ３］ではかなり幅広い分散がみられるが，中心は80～120㎝である。中期［グラフ４］では細長く斜めに広がる分布を示し，長径が短い石棺は短径も短く，長径が長くなるにつれて幅も広くなる。これは被葬者のサイズに合わせた石棺墓の構築が行われたことが想定され，小児棺・成人棺が成立する時期である。後期［グラフ５］は長径が極端に長くなる傾向があり，終末期になるにつれて伸展葬が可能な法量となる。

石田大原墓域の石棺墓［グラフ１］は，主体は長径120～140㎝であり，長短比としては前期の分布に近似する。前段で触れた石の組み方や石材などと合わせて考慮すると，長崎県諫早市多良見町化屋大島遺跡(註3)の石棺墓に非常に近い。ただ，化屋大島遺跡は石棺のみの墓域であり，他墓制との共伴関係は見ることができない。石田大原墓域では，甕棺墓との列埋葬があることから甕棺墓の時期による石棺墓の時期の推定が可能である。石田大原墓域で石棺墓とグループを共にする甕棺墓の時期としては，弥生時代前期末から中期前葉に限定できる。つまり石棺墓の時期もこの時期に比定できよう。これは化屋大島遺跡とほぼ同時期であり，石棺墓の墓制の共通性が壱岐と本土部であったことが推測される。



第42図　長崎県内出土石棺墓時期別法量比率グラフ

弥生時代前期末から後期初頭にかけての長崎県内にみられる石棺墓のあり方は，甕棺墓と比較し，副葬品などに明らかに格差がある。弥生時代中期後半から後期前葉を中心に形成された大村市富の原遺跡（稲富1987）は，約70基の石棺墓と約30基の甕棺墓が検出されており，鉄戈３本と鉄剣１本が副葬品として出土しているが，いずれも甕棺墓の副葬であり，石棺からは玉類が出土する程度である。この傾向は原の辻遺跡およびその周辺の弥生時代の墓域でも同じである。すなわち，石棺墓は西北九州地域で縄文時代晩期（弥生時代早期）から築かれてきた支石墓の下部構造の石棺の慣習をそのまま継続し，在地で産する板状の玄武岩を利用してつくられた在地の墓制であった。そのような中にある時期（弥生時代前期末か）甕棺を墓制とする人たちが流入することとなる。石田大原墓域の場合は，その二つの墓制が互いに潰し合うことなくうまく融合し墓域を営んでいる。前述した大村市の富の原遺跡においても格差はあるものの石棺墓と甕棺墓が混在し墓域を形成している。どのような社会情勢の中でこのような墓制の融合が成立したかは疑問であるが，これは壱岐を含めた西北九州地域全域にみられる状況であることが判断される。

註１　壱岐市石田町大久保遺跡では人骨がほぼ完全な形で出土しており，法量が長径120㎝と石田大原墓域の石棺とほぼ変わらないことから，同様な埋葬姿勢が想定されよう。（「長崎県文化財調査報告書第91集　長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ　Ⅱ大久保遺跡」1983）

註２　このような考え方は，九州大学溝口孝司氏の論文の中でも指摘されており，「列形成指向墓」として，墓地全体の統一的秩序形成を意識し墓の位置を決定する現れとし，墓地のみならず社会単位の統合や内的秩序の強化の成立まで言及されている。この「列形成指向墓」の成立が弥生時代前期ごろと想定されており，石田大原墓域も同様な傾向を示すと言えよう。（「墓地の構成から何がわかるか　1.カメ棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館　1998）

註３　化屋大島遺跡は，大村湾の最南部に位置し，湾に突き出した小高い丘上に立地している。その名が示すとおりかつては孤島であり，その島のなかの標高約７ｍの斜面上に７基の石棺墓が検出された。石棺は小口が側壁に挟まれる形態で，側壁の石棺材は２～３枚程度で隅を重ねている。供献された土器の年代から弥生時代前期末から中期初頭の時期に形成された遺構と考えられている。
（「化屋大島遺跡－西彼杵郡多良見町所在弥生時代石棺群の発掘調査記録－」多良見町文化財調査報告書第２集　1974）

【参考文献】

橋口達也『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第７集　志摩町教育委員会　1987

稲富裕和『富の原　大村市富の原１・２丁目に所在する遺跡群の範囲確認調査』大村市文化財調査報告書第12集　長崎県大村市教育委員会　1988

寺田正剛「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第６号　2005

【その他，グラフ内に記載した遺跡の文献など】

高野晋司ほか『国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会　1981

正林　護ほか『大野台遺跡』長崎県鹿町町文化財調査報告書第１集　鹿町町教育委員会　1983

坂田邦洋「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告書」『古文化談叢』第５集　1978

森貞次郎「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論叢』1969

田川肇ほか『風観岳支石墓群調査報告書』諫早市文化財調査報告書第１集　諫早市教育委員会　1976

川瀬雄一『風観岳支石墓群発掘調査概要報告書』諫早市文化財調査報告書第15集　諫早市教育委員会　2002

村川逸朗『西鬼塚支石墓・石棺群』有家町埋蔵文化財調査報告書第３集　長崎県有家町教育委員会　1997

安楽　勉『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ　Ⅱ.天久保遺跡』長崎県文化財調査報告書第114集　長崎県教育委員会　1994

塚原　博『笛吹遺跡～弥生時代墳墓群の調査記録～』小値賀町文化財調査報告書第12集　長崎県北松浦郡小値賀町教育委員会　1997

井上和夫『化屋大島遺跡－西彼杵郡多良見町所在弥生時代石棺群の発掘調査記録－』多良見町文化財調査報告書第２集　多良見町教育委員会　1974

久村貞男『宮の本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書　佐世保市教育委員会　1980

大野安生ほか『富の原遺跡・小佐古石棺墓群Ｂ地点Ⅱ発掘調査報告書』大村市文化財調査報告書第19集　大村市教育委員会　1995

福田一志『前島古墳群Ⅱ』時津町埋蔵文化財調査報告書第２集　長崎県時津町教育委員会　1994

安楽勉ほか『白井川遺跡（Ⅱ）』東彼杵町文化財調査報告書第４集　長崎県東彼杵町教育委員会　1990

高野晋司ほか『中江遺跡・上田井原遺跡－小江地区県営圃場整備事業にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県高来町文化財調査報告書第１集　長崎県高来町教育委員会　1993

町田利幸『中野ノ辻遺跡』田平町文化財調査報告書第６集　長崎県田平町教育委員会　1992

副島和明ほか『一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　門前遺跡』長崎県文化財調査報告書第190号　長崎県教育委員会　2006

松尾尚哉ほか『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol.３第３章　主な確認調査　冷泉遺跡』大村市文化財調査報告書第25集　大村市教育委員会　2002

④石田大原墓域その後の調査について

昭和49年に緊急発掘調査された範囲は，字大原のなかで359および360番地であるが，その後における旧石田町や壱岐市の範囲確認調査及び旧地図，写真，聞き取り調査などから，当墓域がある程度の広がりをもっていたことが明らかになってきた。

地形的には南から北へ延びる舌状台地の東側つけ根の部分にあたり，標高11.4mから10mの間に位置する。昭和23年米軍撮影の空中写真を見てみると，南西側には原池があり取水口は北に向き狭い谷状地形となり，反対の東側も浅い窪地がみられ，墓域の部分は先端が現地形よりもさらに突きだし半島状を呈している。昭和29年このあたりの耕地整理に伴って先端部の土取りが行われたことが関係者の話で裏付けられているが，現在の農道から北側は削平されていることになる。

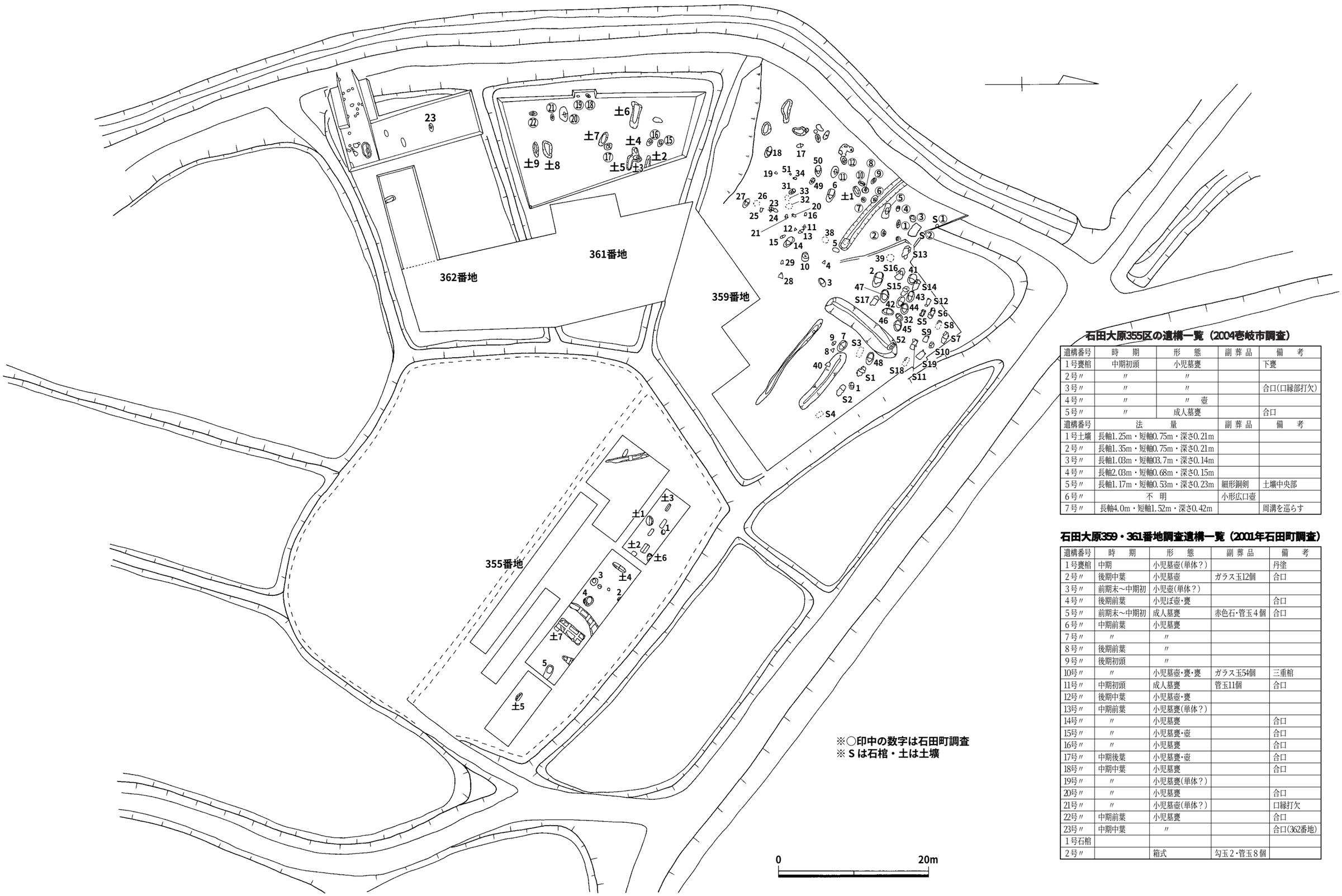
当時の新聞記事によると，壱岐土地改良区第三区の区画整理に必要な土砂の採取が原の辻丘陵から行われ，この時地表１ｍのところから石棺10組，銅剣２点，銅矛１点のほか土器，石器などが出土したことが報道されている。ただ，この時の銅製品は大学の先生に渡したという話も残っているが，所在については不明である。これとは別物と思われるが，伝壱岐として細形銅剣２本とほぼ完形の細形銅戈１本が，現在平戸市の松浦歴史資料館に保管[註1]されている。いずれにしてもこれらの銅製品が正確にどこから出土したのか，工事中発見の銅剣・銅矛は存在するのか，今後の課題である。

昭和49年以降この墓域については長い間調査されなかったが，近年になって全貌が明らかになりつつある。平成10年度に策定された「原の辻遺跡整備基本計画」に基づいて芦辺町と石田町が整備に伴う発掘調査を実施し，平成16年度からは合併で誕生した壱岐市によって調査が継続されている。

先ずは，昭和49年の調査であるが，この水田はもとは２枚の畑として利用されていたものを１枚に造成工事するということで緊急調査の運びになったもので，すでに前項で述べられているように，甕棺墓43基，石棺墓18基，溝４条が確認された主な遺構である。それを細部にわたって観察すると，時期差はあるものの，石棺墓および甕棺は東西に近い方向に列埋葬の状態で並んでいることがわかる。

その後，平成13年の石田町の調査[註2]では359・361番地の49年調査時の北側を中心に調査杭が入れられたが，その根拠となったのは，旧地形が西側に低くなり削平された土が埋められ，遺構の残存状態もよいと考えられたからである。結果としては前回ほどの遺構の集中は欠くものの，墓域の広がりが確認された。この時の調査では，過去に削平された元の包含層と考えられる埋土から，重要な遺物が出土している。有茎銅鏃は25本以上あり，水銀朱を塗布したものや，樹皮や糸状のもので茎を巻いたものもある。さらに推定径11.8㎝の後漢鏡片，細形銅剣片４点のほか小破片ながら多紐細文鏡１片などである。361番地は北側より50㎝ほど高くなっているが，道路に沿って調査杭を設定している。その結果，甕棺墓及び土壙墓が検出されている。ほかにピット群も見られるが，性格まではつかめていない。

さらに南側の361・362番地も平成14年調査[註3]されている。調査区の東側半分は削平されほとんど遺構は見られない。この地点は墓域の端になっており西側から甕棺墓１基と土壙墓と思われるものが確認されている。



第43図　石田大原墓域S49,H13,14,16年度調査一覧図

石田大原355区の遺構一覧（2004壱岐市調査）

遺構番号	時　期	形　態	副葬品	備　考
1号甕棺	中期初頭	小児墓甕		下甕
2号〃	〃	〃		
3号〃	〃	〃		合口(口縁部打欠)
4号〃	〃	〃　壺		
5号〃	〃	成人墓甕		合口
遺構番号	法　量		副葬品	備　考
1号土壙	長軸1.25m・短軸0.75m・深さ0.21m			
2号〃	長軸1.35m・短軸0.75m・深さ0.21m			
3号〃	長軸1.03m・短軸03.7m・深さ0.14m			
4号〃	長軸2.03m・短軸0.68m・深さ0.15m			
5号〃	長軸1.17m・短軸0.53m・深さ0.23m		細形銅剣	土壙中央部
6号〃	不　明		小形広口壺	
7号〃	長軸4.0m・短軸1.52m・深さ0.42m			周溝を巡らす

石田大原359・361番地調査遺構一覧（2001年石田町調査）

遺構番号	時　期	形　態	副葬品	備　考
1号甕棺	中期	小児墓壺(単体？)		丹塗
2号〃	後期中葉	小児墓壺	ガラス玉12個	合口
3号〃	前期末～中期初	小児壺(単体？)		
4号〃	後期前葉	小児ぼ壺・甕		合口
5号〃	前期末～中期初	成人墓甕	赤色石・管玉４個	合口
6号〃	中期前葉	小児墓甕		
7号〃	〃	〃		
8号〃	後期前葉	〃		
9号〃	後期初頭	〃		
10号〃	〃	小児墓壺・甕・甕	ガラス玉54個	三重棺
11号〃	中期初頭	成人墓甕	管玉11個	合口
12号〃	後期中葉	小児墓壺・甕		
13号〃	中期前葉	小児墓甕(単体？)		
14号〃	〃	小児墓甕		合口
15号〃	〃	小児墓甕・壺		合口
16号〃	〃	小児墓甕		合口
17号〃	中期後葉	小児墓甕・壺		合口
18号〃	中期中葉	小児墓甕		合口
19号〃	〃	小児墓甕(単体？)		
20号〃	〃	小児墓甕		合口
21号〃	〃	小児墓壺(単体？)		口縁打欠
22号〃	中期前葉	小児墓甕		合口
23号〃	中期中葉	〃		合口(362番地)
1号石棺				
2号〃		箱式	勾玉２・管玉８個	

平成16年度は合併により壱岐市となってはじめての調査で，355番地が対象地である[註4]。標高11.40ｍの地表面でこれまでの調査区のなかで一番高いところに位置する。調査区は現状畑の北側半分に設定されたが，ここも水田化によって中央部分は削平されており，溝状の遺構が見られるのみで甕棺墓等の検出はない。しかし，表土から0.7m～1.5mの深いところでは甕棺墓及び土壙墓が検出され遺構が残されている。

大原墓域の時期的変遷と特徴について

これまでの調査概要について見てきたが，埋葬遺構の出土数は49年が甕棺51基・石棺19基，平成13・14年度が甕棺墓23基・石棺墓２基・土壙墓９基，平成16年度が甕棺墓５基・土壙墓11基であり，合計は甕棺墓79基・石棺墓21基・土壙墓20基となっている。しかし，この数字はあくまでも調査で確認したものであり，未調査区やすでに削平されたものも数多くあったと推測され，これが全ての結果ではない。

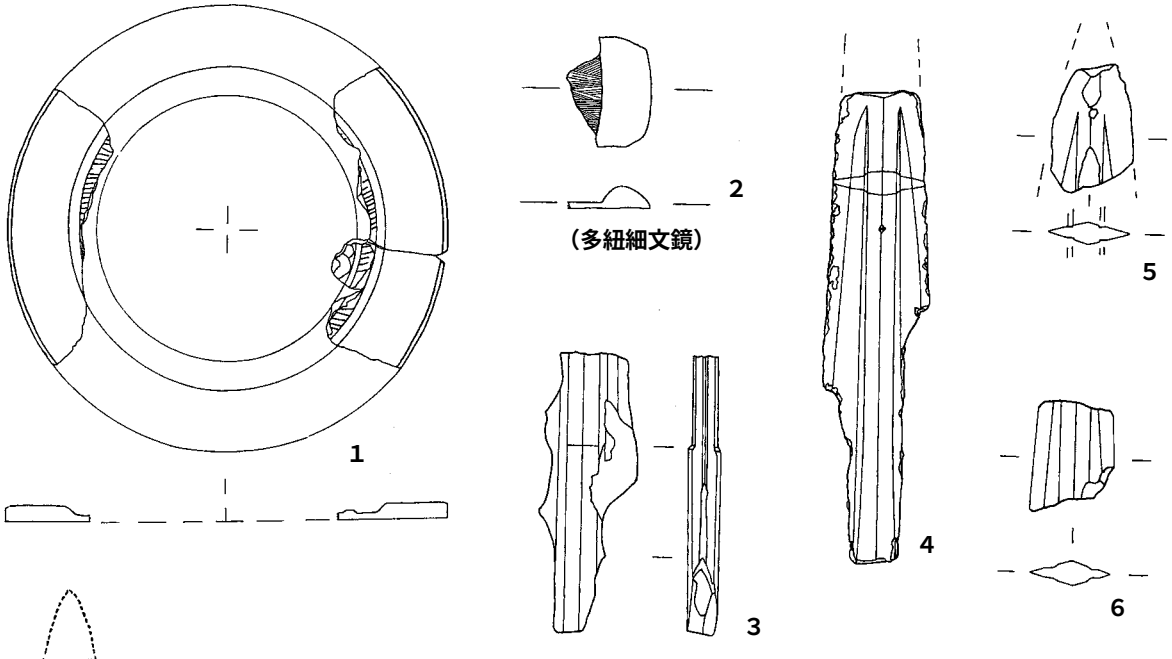
時期的な変遷を見てみると，359～362番地にかけては弥生前期後半から弥生後期中頃までの幅が観察されるが，一番多いのは弥生中期前半から中頃である。弥生後期のものは北側の溝を挟んで位置し，弥生終末の甕棺墓も１基存在するが，後期以降の墓域は小規模に限定された範囲だったことが窺われる。石棺墓は弥生中期のものがほとんどで395番地東側の南北に並んで埋葬されている。

355番地の甕棺墓は，５基ではあるが，弥生中期初頭から中期前半と比較的短期間の幅である。ここで注目されることは，６号土壙墓内から再加工された細形銅剣の剣先が副葬されていたほか，５号土壙墓内からも小型広口壺が副葬されていたことから，ここのグループ墓制は弥生時代の古い風習を残したものと考えられる。（2005松見）

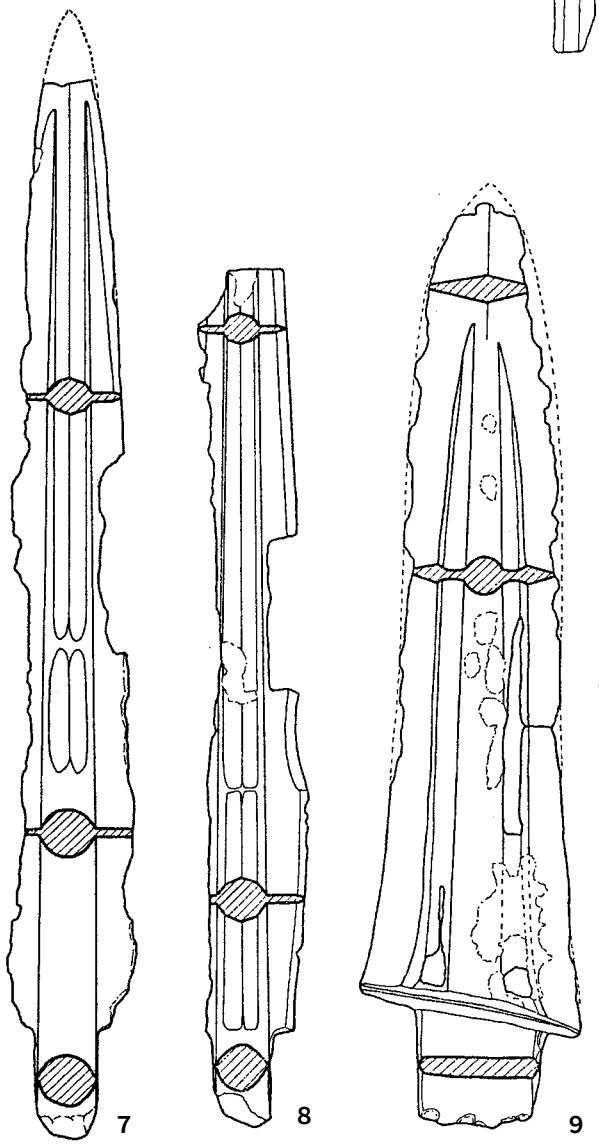
また原の辻遺跡の墓地の形成に特徴的なことは時代を問わず，大川墓域・原ノ久保墓域に対しても小児棺墓の比率が高い点である。これは隣接した閏繰遺跡や鶴田遺跡にもあてはまることであり，現在までのところ，どうしたわけか北部九州に卓越してみられる大型の成人棺の墓制は壱岐島では発達していない。

原の辻遺跡は隣接部を含め，これまでの調査で９カ所の墓域が確認されている。そのなかで石田大原墓域と時期的に併行関係にあるものは原Ⅲ区と閏繰遺跡である。前者については丘陵中央部に位置し，これまで想定されていなかった地点であるが，規模が小さく副葬品等も出土していない。後者は原の辻遺跡の北側にあたり，規模は大きいものの副葬品は見られない。以上のことから，原の辻遺跡の初期の段階における墓域については，石田大原墓域が優位性を保っており，首長墓の存在も考えられるのである。

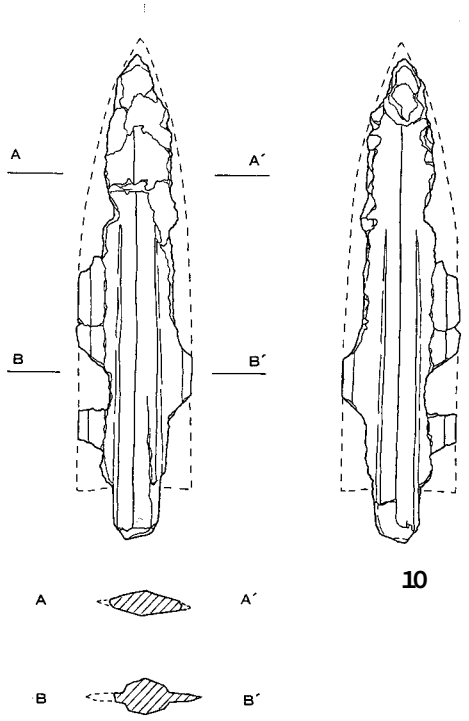
註１　塩屋勝利氏御教示（氏は伝壱岐とは江戸時代に平戸にもたらされたものとの考えである。）
註２　河合雄吉2002『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第５集　石田町教育委員会
註３　河合雄吉2003『原の辻遺跡』石田町文化財調査報告書第６集　石田町教育委員会
註４　松見祐二2005『原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第２集　壱岐市教育委員会



1～6　2002年出土の鏡・銅剣（註２より）



7～9　松浦資料館蔵「伝壱岐の銅剣・銅戈（註１）」
（原図　塩屋勝利氏）



2004年出土銅剣（註４より）

第44図　石田大原墓域の青銅製品

Ⅳ章　ま　と　め

昭和49年に調査した遺構は甕棺墓，石棺墓合わせて66基の埋葬墓が確認された。その詳細についてはこれまで述べてきたとおりであり，このことが契機となって範囲確認調査が計画され，その後の本格的な調査へと進んできたわけである。こうした調査の結果，弥生時代の前期から終末期に至る墓域の存在も明らかになってきている。

さらに，大原墓域についても墓域が拡大していることが判明し，また消滅している範囲についても確認することができた。さらに，これまで昭和29年の土地改良工事によって削平された部分から出土したと思いこまれてきた細形銅剣２本と銅戈１本は，実は34代松浦家当主静山（天明年間）の時収集されたことが平戸市の松浦歴史資料館の資料カードから判明している。その一方で，工事によって発見された銅剣２本と銅矛１本の所在であるが，残されている工事図面や関係者等の話から出土地点は今次報告地点の北側に間違いはなく，同じモノなのかさらに追跡調査を行っていく必要がある。

壱岐島では弥生時代の遺跡は約60箇所が周知されているが，夜臼期の２．３の遺跡を除いて，本格的な集落が営まれるのは板付Ⅱ式以降であり，原の辻遺跡が最初である。遺物の出土量においてもまとまったものではなく，丘陵の周囲に散見される程度である。

また，墓域については甕棺墓及び石棺墓のなかで前者が優位性を保っているが，石棺墓については時期設定について甕棺と同じ時期と考えられるものの確定する材料に乏しい。甕棺墓の出自については弥生前期後葉（大原Ⅰｂ期）から始まり中期初頭（大原Ⅱａ期）から中期末（大原Ⅲ期）そして後期前葉（大原Ⅳ期）から後期末（大原Ⅴ期）で終焉を迎える。墓制のなかで一番中心をなすものは前期後葉から中期までである。形態的には成人棺墓は非常に少なく小児甕棺墓が目立つが，集落構成や家族構成からの視点も検討していく必要がある。

副葬品からみてみると，戦国式銅剣を副葬した18号甕棺墓は中期前葉の時期であるが，出土位置は他の遺構と違って離れたところにある。またトンボ玉３個・管玉４個を擁する３号甕棺も中期前葉であるが，他とは違い単独で埋葬されていることから特殊な埋葬遺構と考えてよいと思われる。

この墓域からはすでに報告のとおり，多紐細文鏡や細形銅剣が５本以上も確認されており，この区域が初期原の辻遺跡における首長墓の存在も窺わせ，一支国のクニを形成する過程をかいま見る重要な地点である。

最後に本報告掲載の石田大原地区は調査を実施してから，すでに30余年が経過している。当時調査に加わったなかには，すでに退職あるいはこの世を離れた人もいる。残された者も間もなく人生の区切りを迎えようとしている。そういった事情もあり，若い人たちの後押しを受けながらも永年気にかかっていた使命感を全うすることになった。原の辻遺跡は現在も発掘調査が続けられ，新しい事実が掘り起こされている。その点では本書が空白の一端を埋めることができればと願っている。

刊行にあたり多くの方々のご協力を得たことを厚く感謝申し上げたい。

写 真 図 版

１～３号溝（南西から撮影）

同上（北西から撮影）

調査地近景

図版２

調査開始状況

調査中のひとこま

平板測量状況

甕棺実測状況

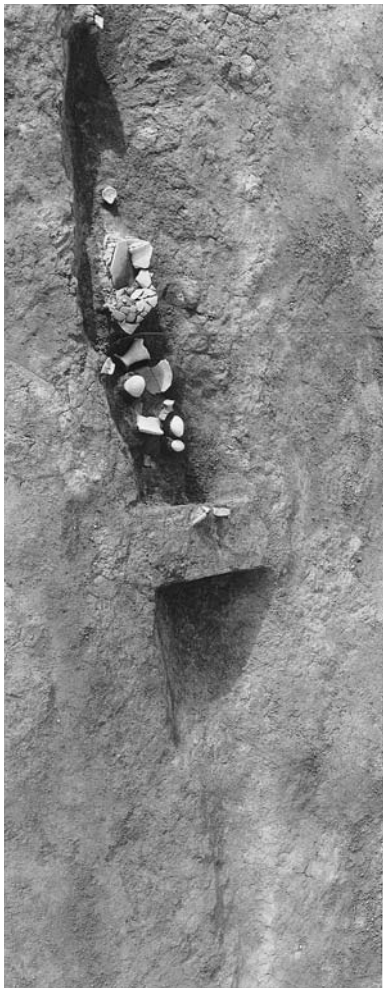
甕棺発掘状況

甕棺実測状況

石棺発掘状況

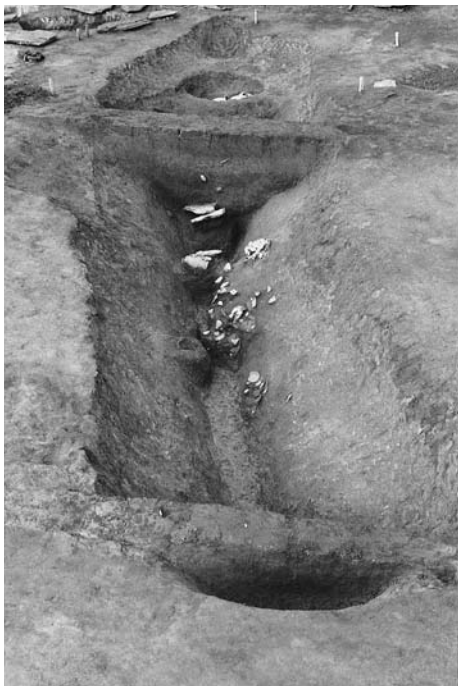
調査作業員の方々

調査状況



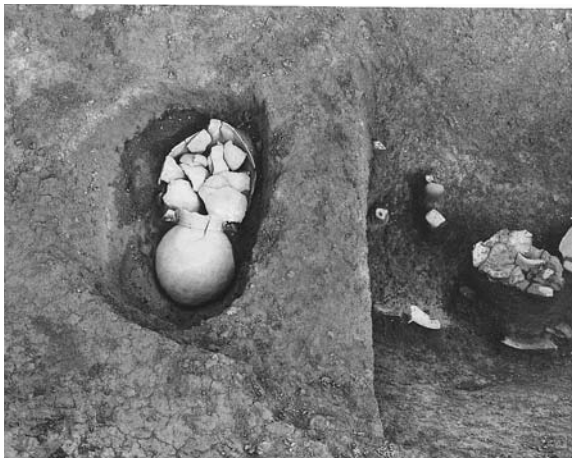
遺構検出状況（１号溝）

図版４



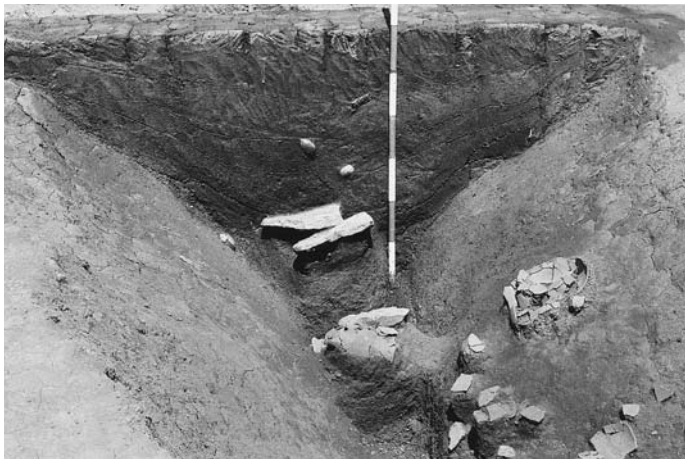
南西から撮影

南から撮影



K52（上段）と溝底の出土遺物

手前K52と溝断面



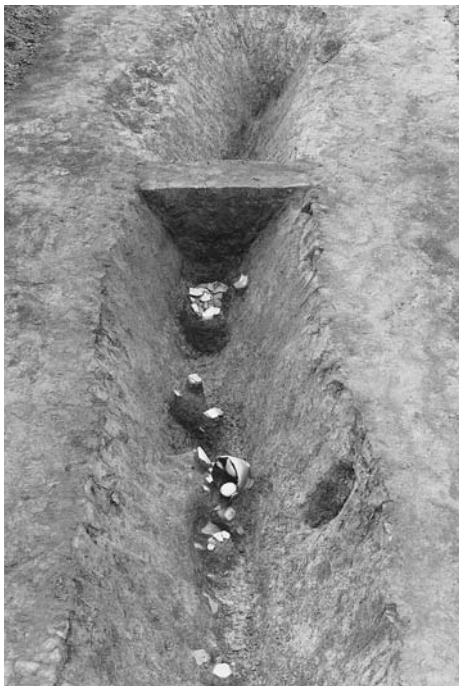
溝断面

溝断面

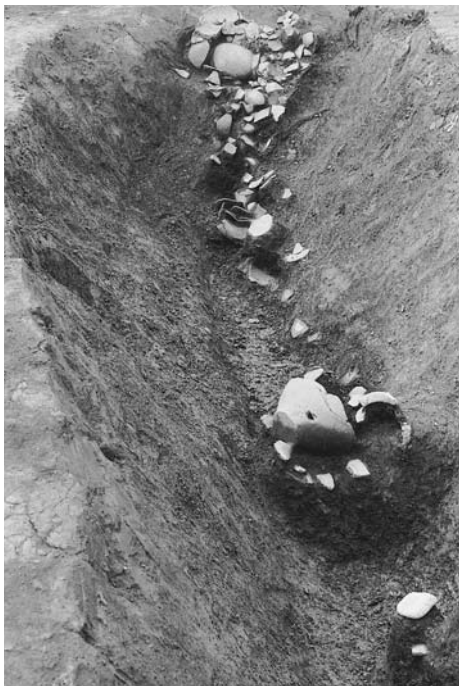
遺構検出状況（２号溝）

北西から撮影

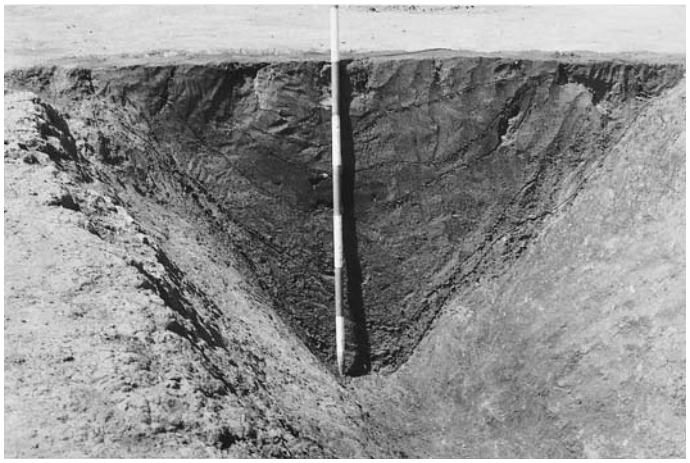
南東から撮影



同上



同上



溝断面

遺構検出状況（３号溝）

図版６

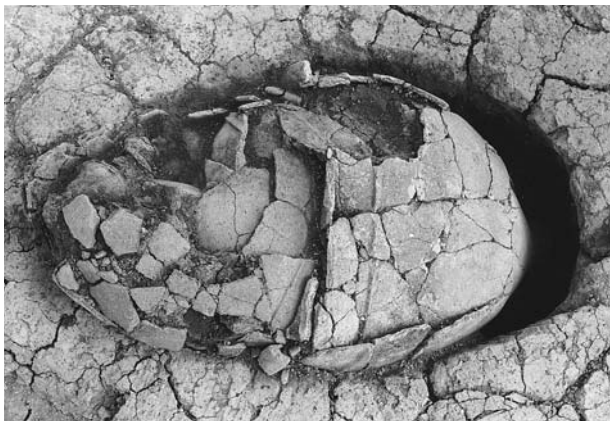
手前からＳ２，Ｋ１，ＳＩ

手前左から右へS14，K41，S16，その奥左K43，同右S15(北北東から撮影)

手前左から右へS12，Ｓ５，その奥Ｓ６，Ｓ８，Ｓ９，S17(南西から撮影)

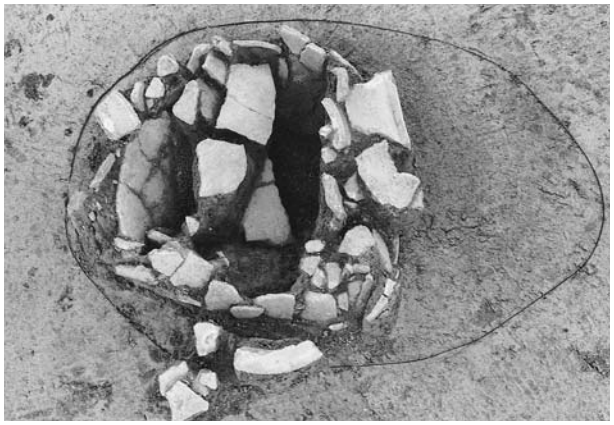
手前からS16，S15，K42，S14，K43，K44（南西から撮影）

遺構検出状況（石棺墓）



Ｋ１

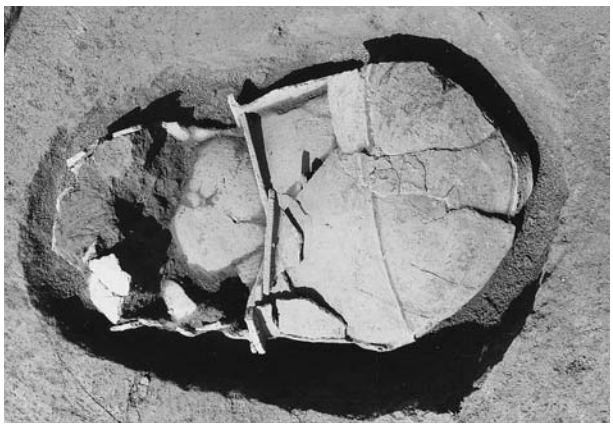
Ｋ２



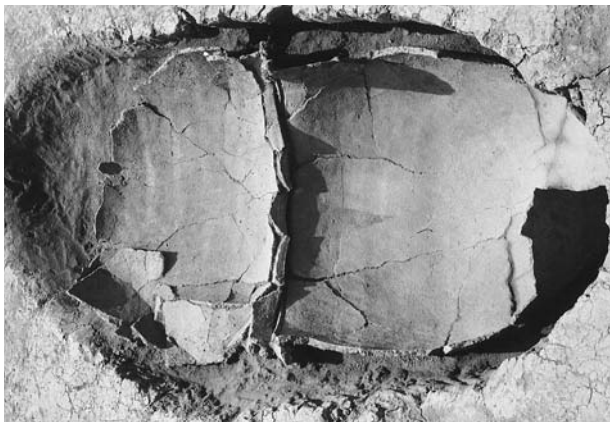
Ｋ３

Ｋ２　遺物出土状況

Ｋ４



Ｋ５

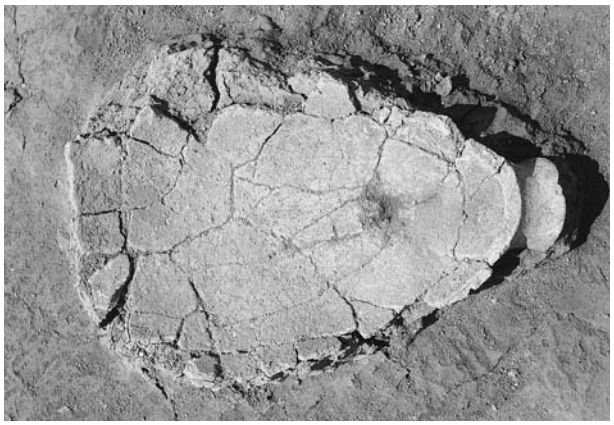


Ｋ６

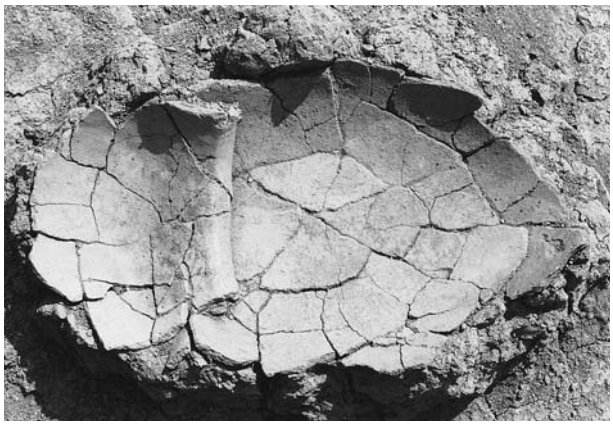
Ｋ７

Ｋ１～７甕棺墓検出状況

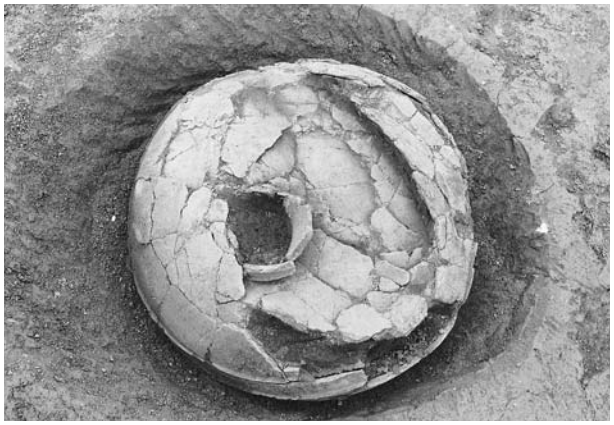
図版８



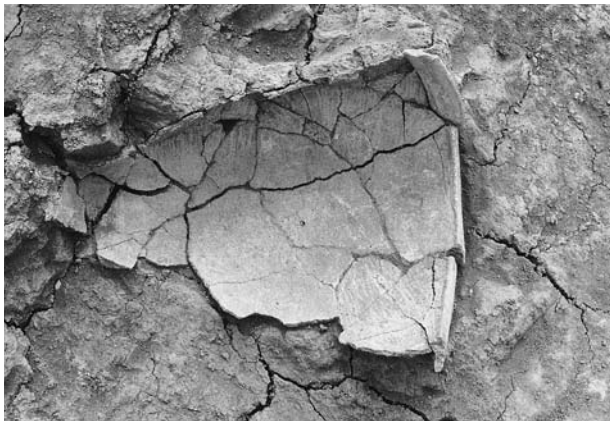
K８



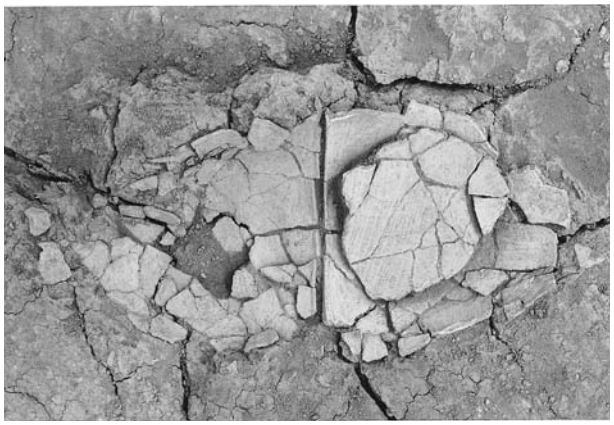
K９



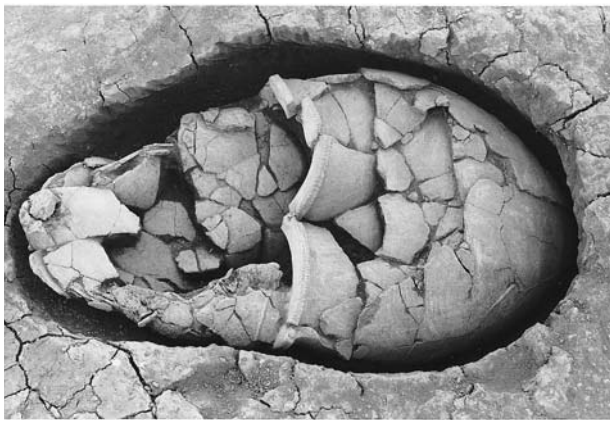
K10



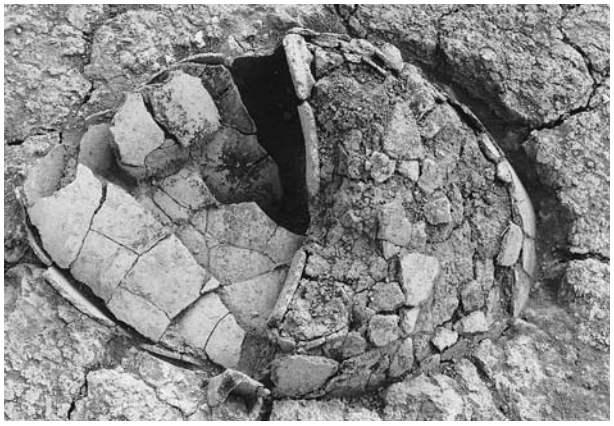
K12



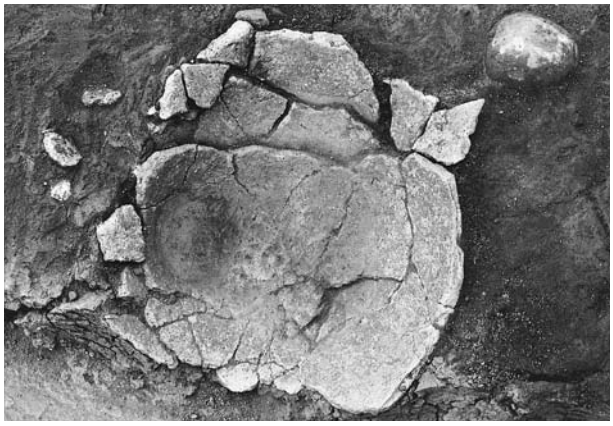
K13



K14

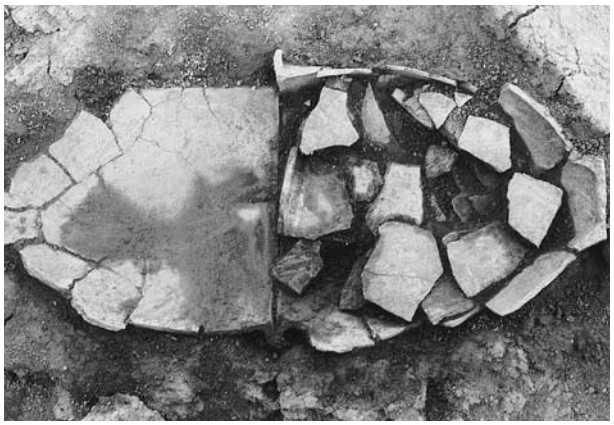


K15

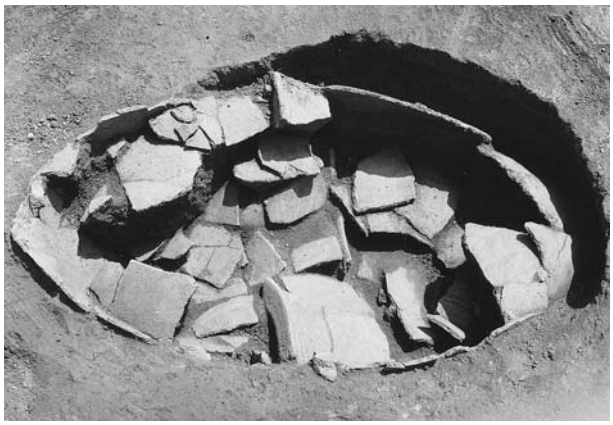


K16

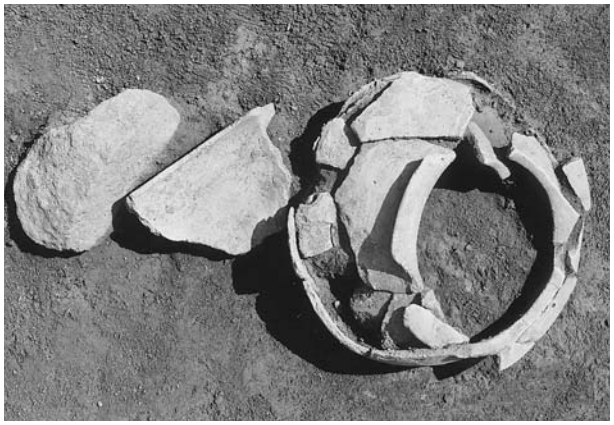
Ｋ８～16甕棺墓検出状況



K17



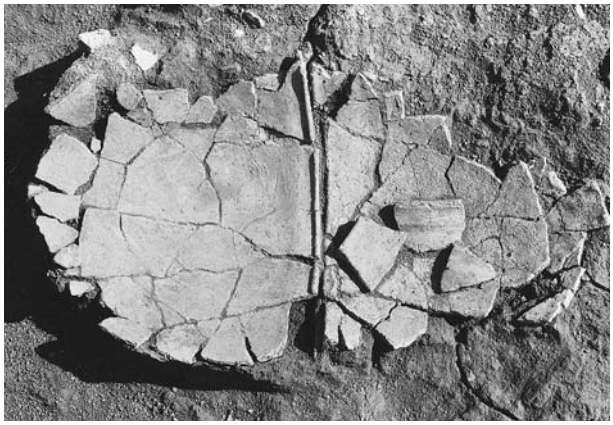
K18



K19

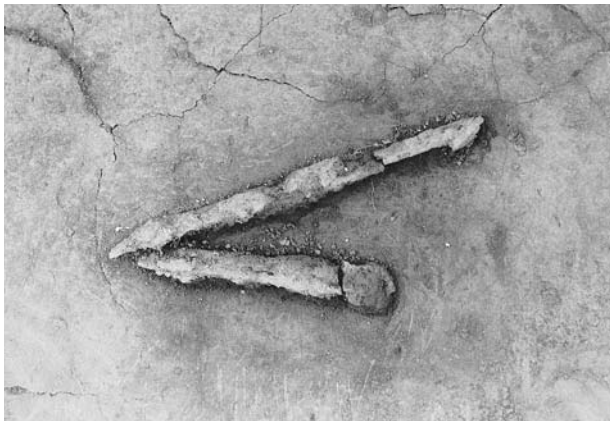
K18　遺物出土状況（戦国式銅剣）

K20



K21

K23・24



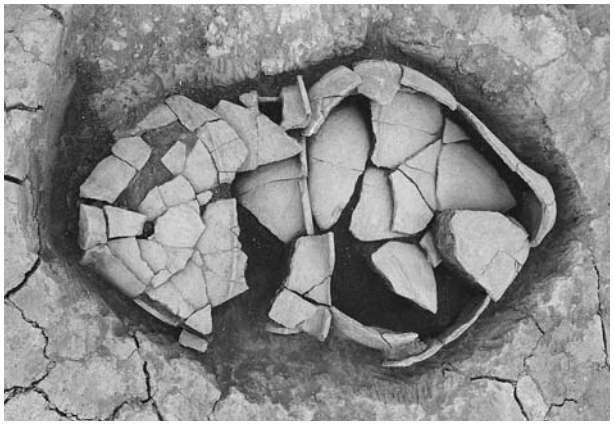
K23　遺物出土状況

K17～24甕棺墓検出状況

図版10

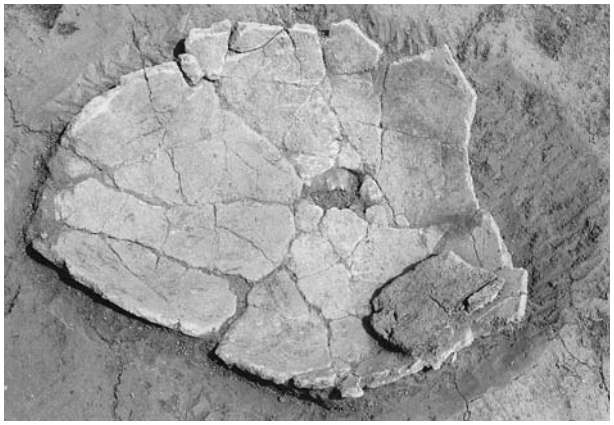
K24

K25

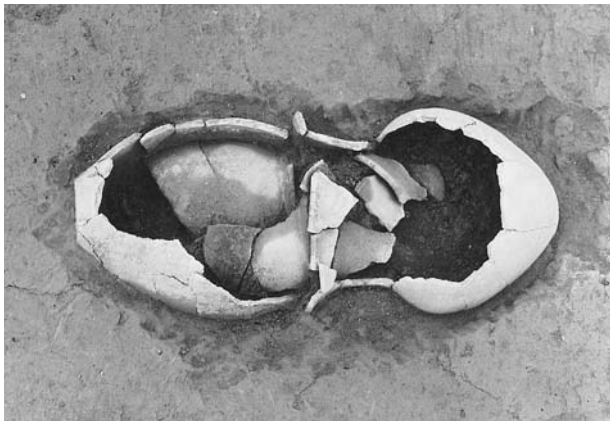


K27

K28

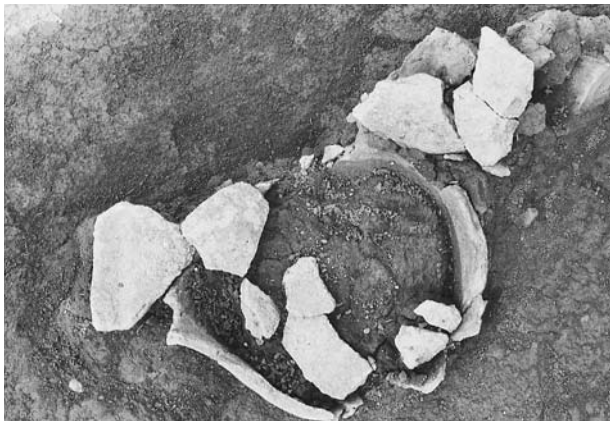


K29



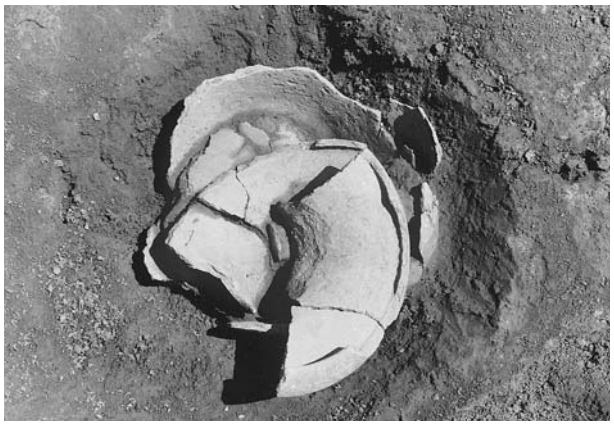
K31

K32



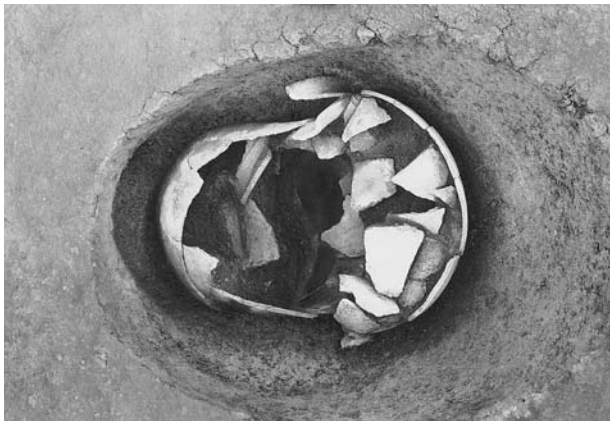
K34

K24～34甕棺墓検出状況

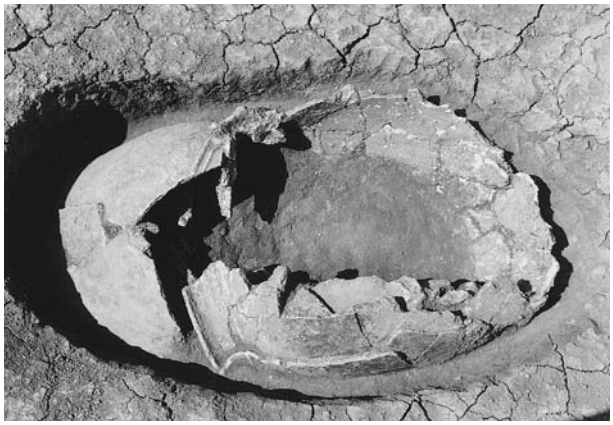


K37

K40



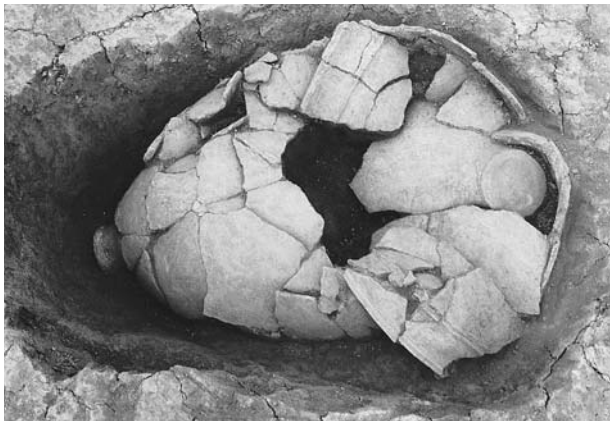
K41



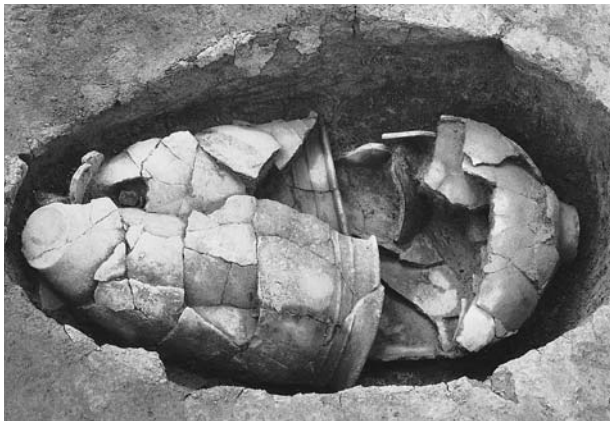
K42

K43

K44



K45

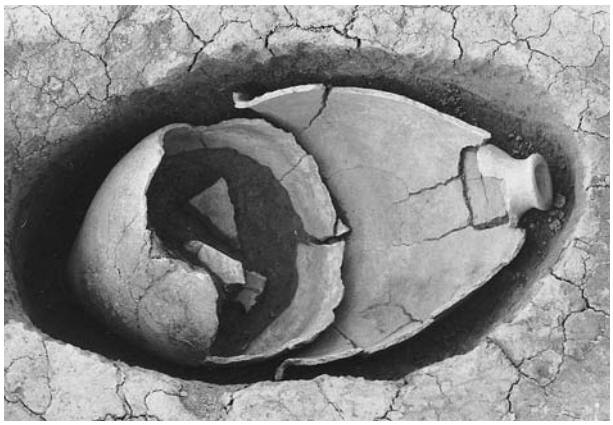


K46

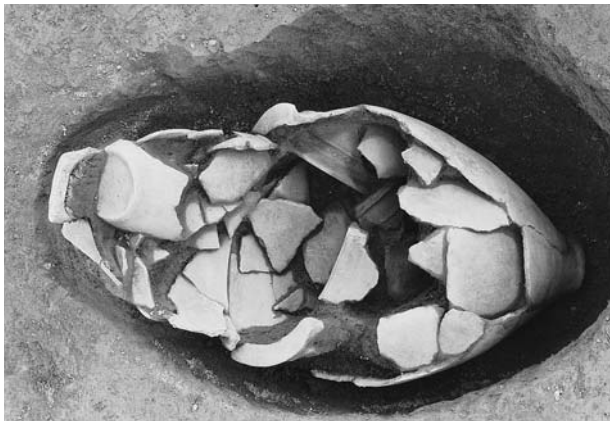
K37～46甕棺墓検出状況

図版12

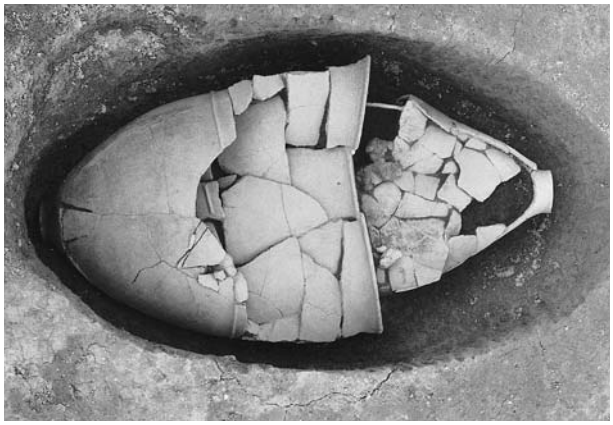
K47



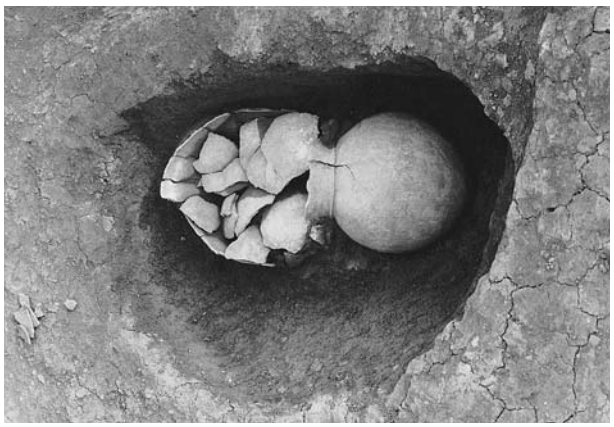
K48



K49



K50



K52

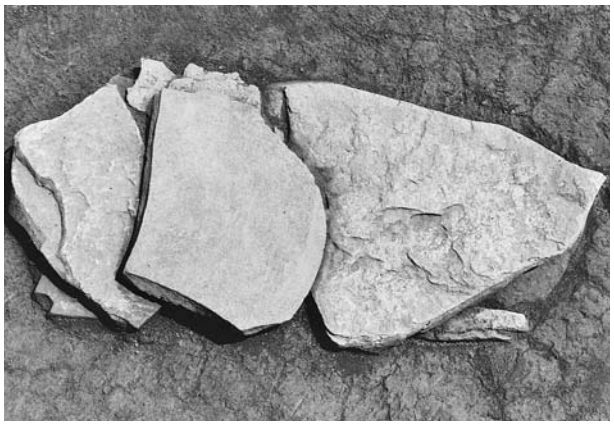
K50　遺物出土状況

K23副葬品

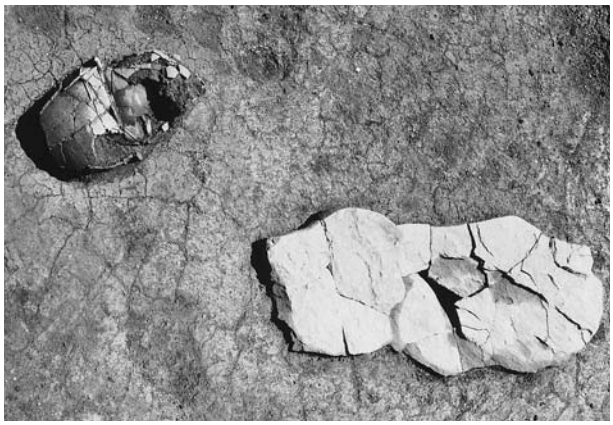
K50副葬品

K50　遺物出土状況（菅玉）

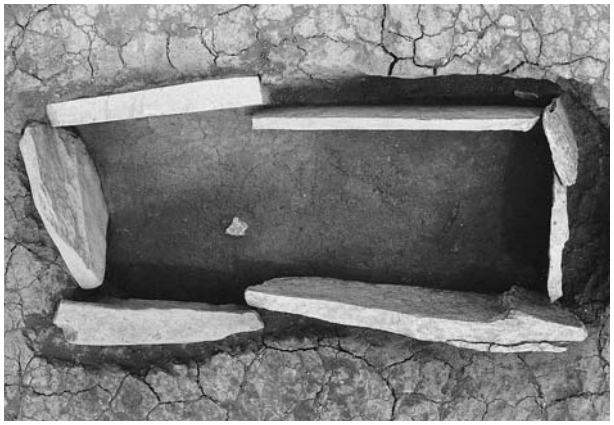
K47～52甕棺墓検出状況



Ｓ１　蓋石



Ｓ２とＫ１



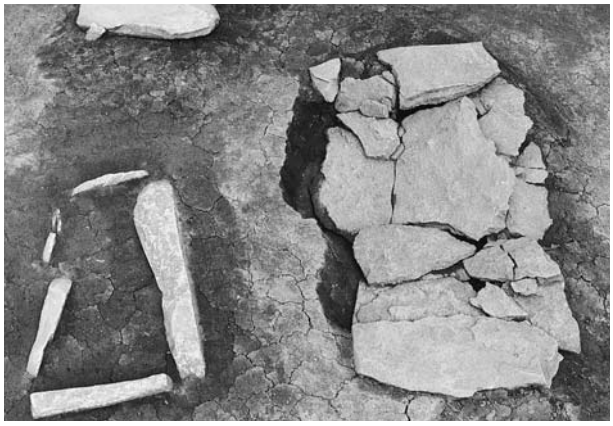
Ｓ１　石棺内

Ｓ３

Ｓ５　石棺

左上からＳ６，５，その下S12

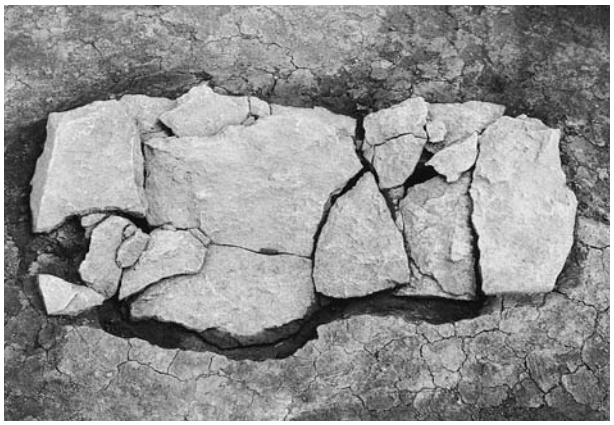
Ｓ５　掘り方



Ｓ５と６

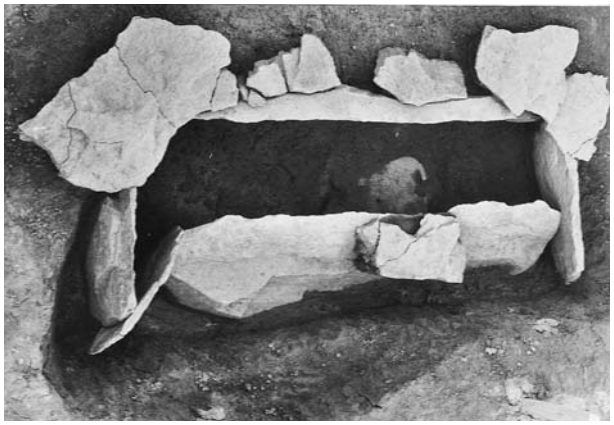
Ｓ１～６箱式石棺墓検出状況

図版14

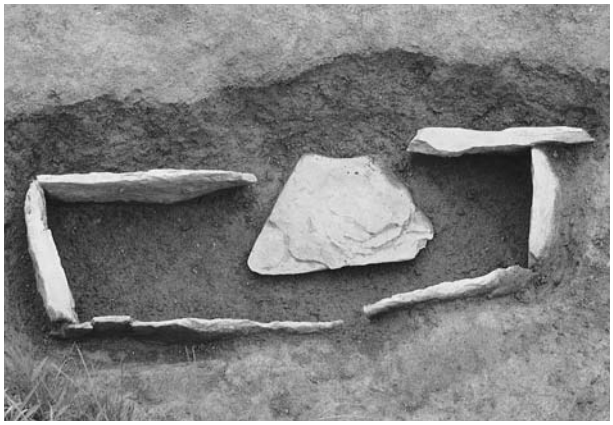


S６

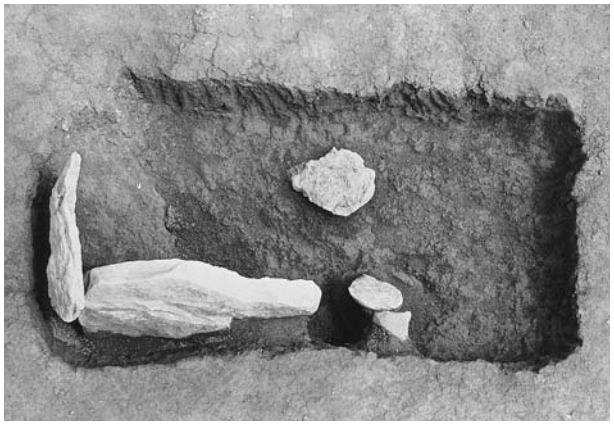
S７



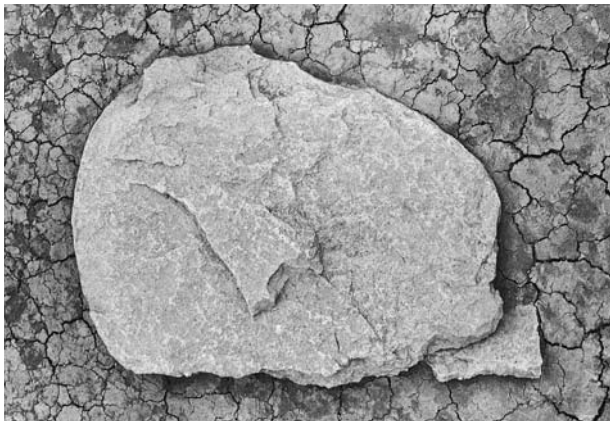
S６　蓋石をあげた状況



S７　蓋石をあげた状況

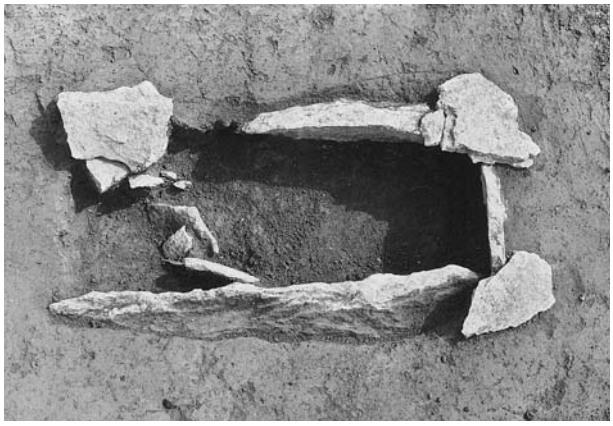


S８



S９

S10



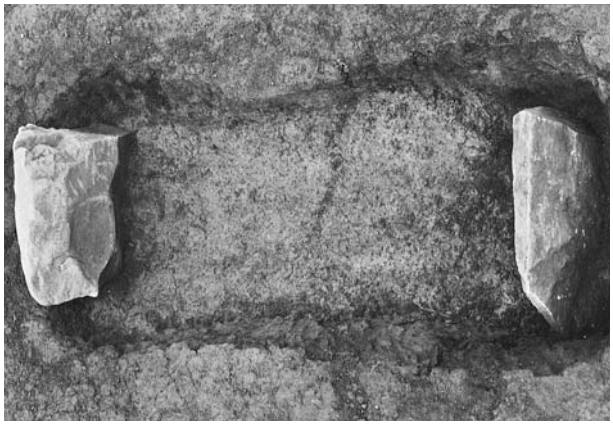
S９　蓋石をあげた状況

S７～９箱式石棺墓検出状況

S11

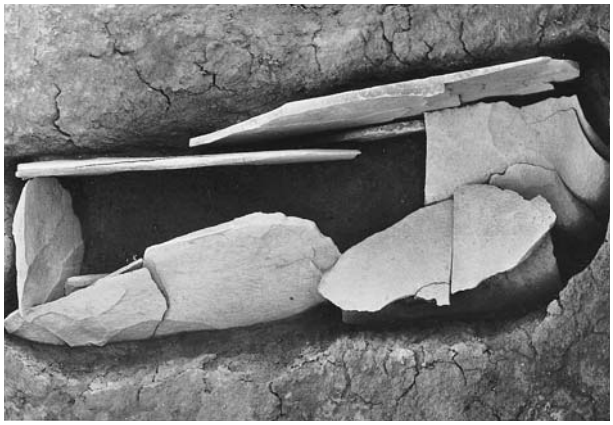
S12

S13

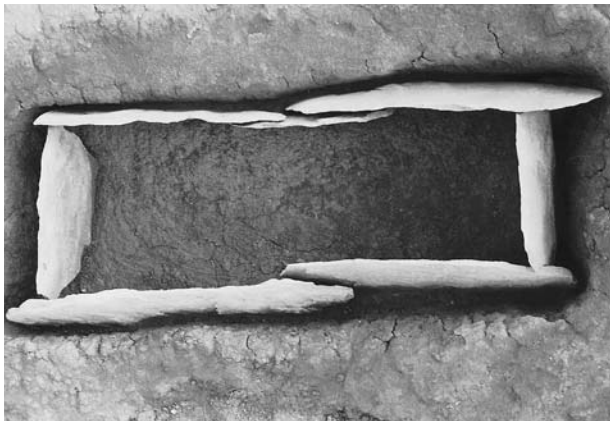


S12　蓋石をあげた状況

S13　蓋石をあげた状況



S14　蓋石をあげた状況

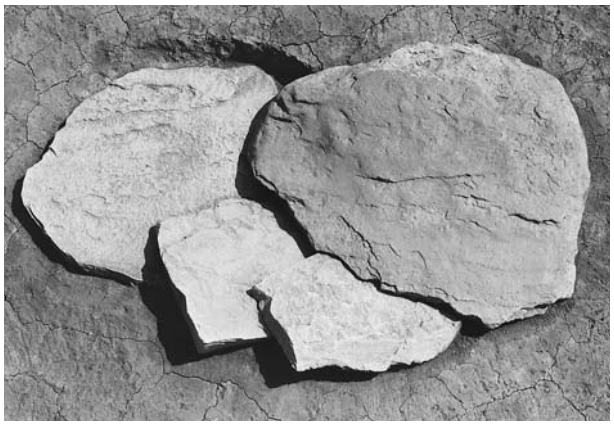


S15　蓋石をあげた状況

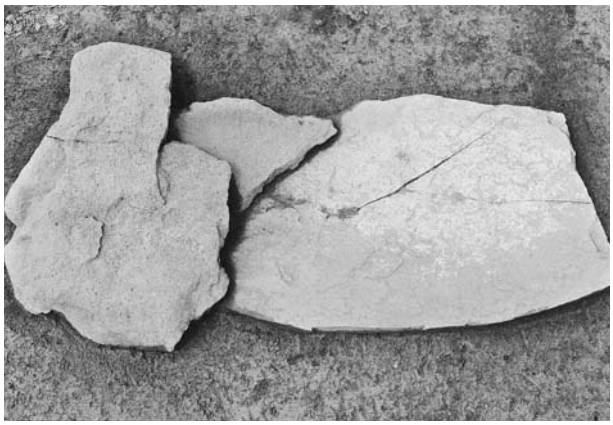
S14　副葬品検出状況

S11～15箱式石棺墓検出状況

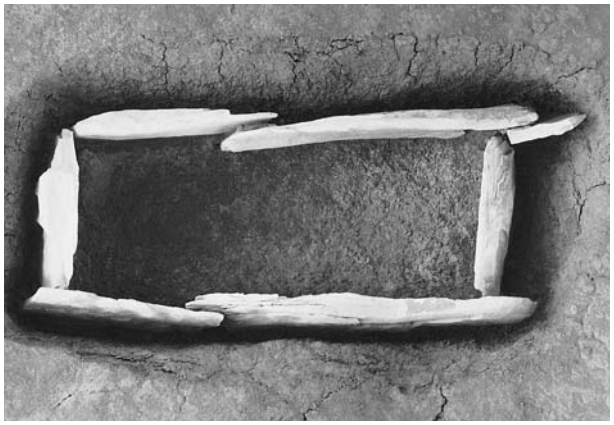
図版16



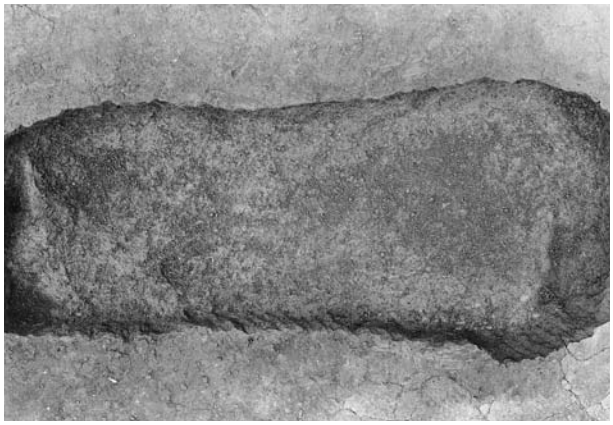
S16



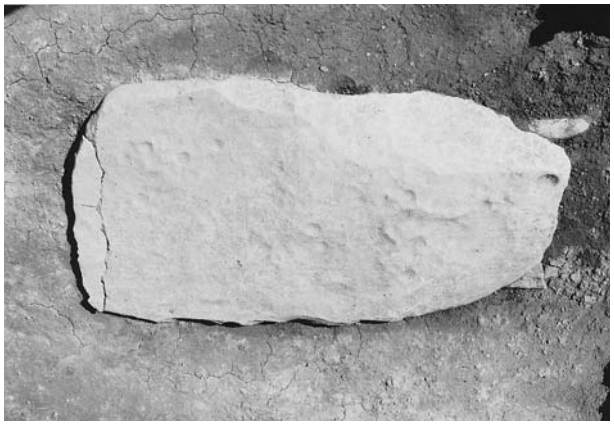
S17



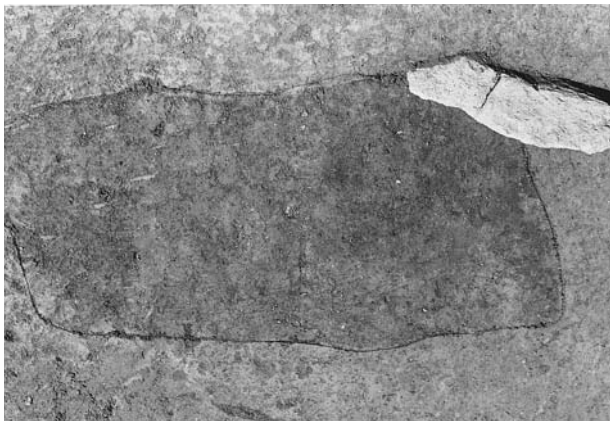
S16　蓋石をあげた状況



S17　蓋石をあげた状況



S19



S18

S19　蓋石をあげた状況

S10　完掘状況

S16~19箱式石棺墓検出状況

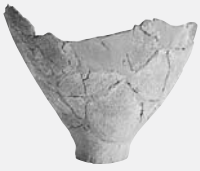
K１

K５

K６

K３

K７



K４

K１～７甕棺墓

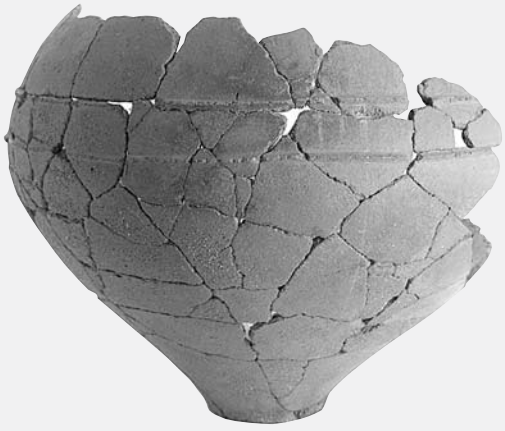
図版18

K 8

K14

K 9

K15



K10

K17

K 8～17甕棺墓

K18

K20

K21

K23

K18～23甕棺墓

図版20

K24

K27

K31

K32

K42

K24～42甕棺墓

K44

K46

K45

K47

K44～47甕棺墓

図版22

K48

K49

K50

K52

K48～52甕棺墓

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はるのつじいせき
書　　名	原の辻遺跡
副 書 名	原の辻遺跡特定調査事業発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第35集
編 著 者 名	田川　肇・高野晋司・安楽　勉・村川逸朗・寺田正剛・林　隆広・松見裕二
編 集 機 関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所　在　地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地１　TEL0920(45)4080
発 行 年 月 日	西暦2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
原の辻遺跡 （はるのつじ）	長崎県壱岐市 （ながさきけんいきし） 芦辺町・石田町 （あしべちょう　いしだちょう）	42424	72－92	33°45′23″	129°45′23″	19740417 ～ 19740812	750	畑地から水田への転換

収録遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	墓地	弥生時代	甕棺43基 石棺18基 溝４条	弥生土器 戦国式銅剣，ガラス製小玉，トンボ玉，勾玉，管玉，鉄製金施，鉄製刀子	区画溝がある墳墓

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集

原の辻遺跡

2007．3．26

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂